

# 道 草

夏目漱石



一冊堂青空文庫



道草

夏目漱石

—

健三<sup>けんぞう</sup>が遠い所から帰って来て駒込<sup>こまごめ</sup>の奥に世帯<sup>しよたい</sup>を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋<sup>さび</sup>し味<sup>み</sup>さえ感じた。

彼の身体<sup>からだ</sup>には新らしく後<sup>あと</sup>に見捨てた遠い国の臭<sup>におい</sup>がまだ付着していた。彼はそれを忌<sup>い</sup>んだ。一日も早くその臭を振り落<sup>ふる</sup>さなければ

ならないと思った。そうしてその臭のうちに潜んでいる彼の誇りと満足にはかえって気が付かなかった。

彼はこうした気分を有<sup>も</sup>った人にありがちな落付<sup>おちつき</sup>のない態度で、千駄木<sup>せんだぎ</sup>から追分<sup>おいわけ</sup>へ出る通りを日に二返ずつ規則のように往来した。

ある日小雨<sup>こさめ</sup>が降った。その時彼は外套<sup>がいとう</sup>も雨具も着けずに、ただ傘を差しただけで、何時もの通りを本郷<sup>ほんごう</sup>の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思い懸けない人にはたりと出会った。その人は根津権現<sup>ねづこんげん</sup>の裏門の坂を上<sup>あが</sup>って、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十

間位先から既に彼の視線に入ったのである。そうして思わず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顔をしてその人の傍を通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍この男の眼鼻立を確かめる必要があつた。それで御互が二、三間の距離に近づいた頃また眸をその人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めていた。

往来は静であつた。二人の間にはただ細い雨の糸が絶間なく落ちていくだけなので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかった。健三はすぐ眼をそらしてまた真正面を向いたまま歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まったなり、少しも足を運ぶ

気色けしきなく、じつと彼の通り過ぎるのを見送っていた。健三はその男の顔が彼の歩調につれて、少しずつ動いて回るのに気が着いた位であつた。

彼はこの男に何年会わなかつたろう。彼がこの男と縁を切つたのは、彼がまだ廿歳はたちになるかならない昔の事であつた。それから今日こんにちまでに十五、六年の月日経っているが、その間彼らはついでに一度も顔を合せた事がなかつたのである。

彼の位地も境遇もその時分から見るとまるで變つていた。黒い髭ひげを生して山高帽を被かぶつた今の姿と坊主頭の昔の面影おもかげとを比べて見ると、自分でさえ隔世の感が起らないとも限らなかつた。しか

しそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。彼はどう勘定しても六十五、六であるべきはずのその人の髪の毛が、何故<sup>なぜ</sup>今でも元の通り黒いのだろうと思って、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通しているその人の特色も、彼には異な気分を与える媒介<sup>なかだち</sup>となった。

彼は固<sup>もと</sup>よりその人に出会う事を好まなかった。万一出会ってもその人が自分より立派な服装<sup>なり</sup>でもしていてくれれば好<sup>い</sup>いと思つていた。しかし今目前<sup>まのあたり</sup>見たその人は、あまり裕福な境遇にいたとは誰が見ても決して思えなかった。帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織<sup>はおり</sup>なり着物なりについて判断したところ、どうして

も中流以下の活計を営んでいる町家ちようかの年寄としか受取れなかった。彼はその人の差していた洋傘こうもりが、重そうな毛繻子けじゆすであつた事にまで気が付いていた。

その日彼は家へ帰つても途中で会つた男の事を忘れ得なかった。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送っていたその人の眼付に悩まされた。しかし細君には何にも打ち明けなかった。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙っている夫に対しては、用事の外ほか決して口を利かない女であつた。



次の日健三はまた同じ時刻に同じ所を通った。その次の日も通った。けれども帽子を被<sup>かぶ</sup>らない男はもうどこからも出て来なかった。彼は器械のようにまた義務のように何時もの道を往<sup>い</sup>ったり来たりした。

こうした無事の日が五日続いた後<sup>あと</sup>、六日目の朝になって帽子を被らない男は突然また根津権現の坂の蔭から現われて健三を脅<sup>おそ</sup>やかした。それがこの前とほぼ同じ場所で、時間も殆<sup>ほとん</sup>どこの前と違わなかった。

その時健三は相手の自分に近付くのを意識しつつ、何時もの通り器械のようにまた義務のように歩こうとした。けれども先方の態度は正反対であつた。何人をも不安にしなければやまないほどな注意を双眼そうがんに集めて彼を凝視した。隙すきさえあれば彼に近付こうとするその人の心が曇どんよりした眸ひとみのうちにありありと読まれた。出来るだけ容赦なくその傍そばを通り抜けた健三の胸には変な予覚が起つた。

「とてもこれだけでは済むまい」

しかしその日家へ帰うちつた時も、彼はついに帽子を被らない男の事を細君に話さずにしまった。

彼と細君と結婚したのは今から七、八年前で、もうその時分にはこの男との関係がとくの昔に切れていたし、その上結婚地が故郷の東京でなかった。細君の方ではじかにその人を知るはずがなかった。しかし噂うわさとしてだけならあるいは健三自身の口から既に話していたかも知れず、また彼の親類のものから聞いて知っていないとも限らなかった。それはいずれにしても健三にとって問題にはならなかった。

ただこの事件に関して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事実が一つあった。五、六年前彼がまだ地方にいる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。そ

の時彼は変な顔をしてその手紙を読んだ。しかしいくら読んでも読んでも読み切れなかった。半紙廿枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はついにそれを細君の手に渡してしまった。

その時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかいた女の素性を細君に説明する必要があった。それからその女に關聯して、是非ともこの帽子を被らない男を引合に出す必要もあった。健三はそうした必要にせまられた過去の自分を記憶している。しかし機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れていた。細君は女の事だからまだ判然覚えてい

るだろうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問い訊ただして見る  
気も起らなかつた。彼はこの長い手紙を書いた女と、この帽子を  
被らない男とを一所に並べて考えるのが大嫌だいきらひだつた。それは彼の  
不幸な過去を遠くから呼び起す媒介なかだちとなるからであつた。

幸い彼の目下の状態はそんな事に屈托くつたくしている余裕を彼に与え  
なかつた。彼は家うちへ歸つて衣服を着換えると、すぐ自分の書斎へ  
這入はいつた。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のする事が山  
のように積んであるような氣持でいるのである。けれども實際か  
らいうと、仕事をするよりも、しなければならぬという刺戟しげきの  
方が、遥かに強く彼を支配していた。自然彼はいらいらしなけれ

ばならなかった。

彼が遠い所から持って来た書物の箱をこの六畳の中で開けた時、彼は山のような洋書の裡うちに胡坐あぐらをかいて、一週間も二週間も暮らしていた。そうして何でも手に触れるものを片端かたはしから取り上げては二、三頁ページずつ読んだ。それがため肝心の書斎の整理は何時まで経っても片付かなかった。しまいていにこの体ていたらくを見るに見かねた或友人あるが来て、順序にも冊数にも頓着とんじゃくなく、あるだけの書物をさっさと書棚の上に並べてしまった。彼を知っている多数の人は彼を神経衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じていた。

### 三

健三は実際その日その日の仕事に追われていた。家<sup>うち</sup>へ帰ってからも気楽に使える時間は少しもなかった。その上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考えたい問題を考<sup>ほ</sup>えたりしたかった。それで彼の心は殆<sup>ほと</sup>んど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯楽の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙がしがつている彼が、ある時友達から謡<sup>うたい</sup>の稽古<sup>けいこ</sup>を勧められて、体<sup>てい</sup>よくそれを断わったが、彼は心のうちで、他人<sup>ひと</sup>にはどうしてそんな暇があるのだろ

うと驚ろいた。そうして自分の時間に対する態度が、あたかも守  
銭奴のそれに似通っている事には、まるで気がつかなかった。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避  
けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になれば  
なるほど、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼  
は臃<sup>おぼろげ</sup>気にその淋<sup>さび</sup>しさを感じずる場合さえあった。けれども一方では  
また心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから  
索寞<sup>さくばく</sup>たる曠野<sup>あらの</sup>の方角へ向けて生活の路<sup>みち</sup>を歩いて行きながら、それ  
がかえって本来だとばかり心得ていた。温かい人間の血を枯らし  
に行くのだとは決して思わなかった。



彼は親類から変人扱いにされていた。しかしそれは彼に取って大した苦痛にもならなかった。

「教育が違うんだから仕方がない」

彼の腹の中には常にこういう答弁があつた。

「やっぱり手前味噌よ」

これは何時でも細君の解釈であつた。

気の毒な事に健三はこうした細君の批評を超越する事が出来なかった。そういわれる度にたび気不味いきまず顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌々いまいましく思った。ある時は叱り付けた。またある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癩癩かんしゃくが細君の耳に

空威張からいばりをする人の言葉のように響いた。細君は「手前味噌」の四

字を「大風呂敷おおふろしき」の四字に訂正するに過ぎなかった。

彼には一人の腹違はらちがひの姉と一人の兄があるぎりであつた。親類と  
いったところでこの二軒より外に持たない彼は、不幸にしてその  
二軒ともあまり親しく往来ゆききをしていなかった。自分の姉や兄と  
疎遠になるという変な事実、彼に取つても余り気持の好いいもの  
ではなかった。しかし親類づきあいよりも自分の仕事の方が彼に  
は大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三、四回彼らと  
顔を合せたという記憶も、彼には多少の言訳になつた。もし帽子  
を被かぶらない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの

通り千駄木せんだぎの町を毎日二返規則正しく往来するだけで、当分の方角へは足を向けずにしまつたろう。もしその間に身体あいだからだの樂に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢ししを畳の上に横たえて半日の安息を貪むさぼるに過ぎなかつたろう。

しかし次の日曜が来たとき、彼はふと途中で二度会つた男の事を思い出した。そうして急に思い立つたように姉の宅うちへ出掛けた。姉の宅は四ッ谷よやの津つの守坂かみざかの横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫というのは健三の従兄いとこにあたる男だから、つまり姉にも従兄であつた。しかし年齢としは同年おなじとしか一つ違で、健三から見ると双方とも、一廻りも上であつた。この夫が

もと四ツ谷の区役所へ勤めた縁故で、彼が其所をやめた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといって、姉は今の勤先に不便なものも構わず、やっぱり元の古ぼけた家に住んでいるのである。

## 四

この姉は喘息持であつた。年が年中ぜえぜえいつていた。それでも生れ付が非常な癩性なので、よほど苦しくないと決して凝としていなかった。何か用を拵えて狭い家の中を始終ぐるぐる廻つ

て歩かないと承知しなかった。その落付おちつきのないがさつな態度が健三の眼には如何いかにも気の毒に見えた。

姉はまた非常に饒舌しゃべる事の好すきな女であった。そうしてその喋舌たり方に少しも品位というものがなかった。彼女と対坐たいざする健三はきつと苦い顔をして黙らなければならなかった。

「これが己おれの姉なんだからなあ」

彼女と話をした後あとの健三の胸には何時でもこういう述懐が起つた。

その日健三は例の如く襷たすきを掛けて戸棚の中を搔かきまわしているこの姉を見出した。

「まあ珍らしく能く来てくれたこと。さあ御敷きなさい」

姉は健三に座蒲団ざぶとんを勧めて縁側へ手を洗いに行った。

健三はその留守に座敷のなかを見廻わした。欄間らんまには彼が子供の時から見覚えのある古ぼけた額が懸っていた。その落款らくかんに書いてある筒井憲つついけんという名は、たしか旗本はたもとの書家か何かで、大変字が上手なだと、十五、六の昔此所ここの主人から教えられた事を思い出した。彼はその主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行ったものである。そうして年からいえば叔父甥おじおいほどの相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲すもうをとっては姉おこから怒られたり、屋根へ登って無花果いちじくを搦もいで食って、その皮を隣の庭へ投

げたため、尻しりを持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買って遣やるといつて彼を騙だましたなり何時まで経っても買ってくれなかったのを非常に恨めしく思った事もあった。姉と喧嘩けんかをして、もう向うから謝罪あやまって来ても勘忍してやらないと覚悟を極きめたが、いくら待っていても、姉が詫あやまらないので、仕方なしにこちらからのこのこ出掛けて行ったくせに、手持無沙汰てもちぶさたなので、向うで御這入おはいりというまで、黙って門口かどぐちに立っていた滑稽こっけいもあった。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向けた。そうしてそれほど世話になった姉夫婦に、今は大し

た好意を有<sup>も</sup>つ事が出来にくくなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身体<sup>からだ</sup>の具合はどうです。あんまり非道<sup>ひど</sup>く起る事もありませんか」

彼は自分の前に坐<sup>すわ</sup>つた姉の顔を見ながらこう訊<sup>たず</sup>ねた。

「ええ有難う。御蔭さまで陽気が好<sup>い</sup>いもんだから、まあどうかこうか家の事だけは遣<sup>は</sup>つてゐるんだけど、——でもやっぱり年が年だからね。とても昔しのようにがせいに働く事は出来ないのさ。昔健ちゃんの遊<sup>あそ</sup>びに来てくれた時分にや、随分尻<sup>しり</sup>ツ端<sup>はし</sup>折り<sup>よ</sup>で、それこそ御釜<sup>おかま</sup>の御尻まで洗ったもんだが、今じゃとてもそんな元気はありやしない。だけど御蔭様でこう遣<sup>は</sup>つて毎日牛乳も飲



んでるし……」

健三は些<sup>さ</sup>少<sup>しょう</sup>ながら月々いくらかの小遣を姉に遣<sup>や</sup>る事を忘れなかつたのである。

「少し瘦<sup>や</sup>せたようですね」

「なにこりや私<sup>あたし</sup>の持前<sup>もちまえ</sup>だから仕方がない。昔から肥<sup>ふと</sup>った事のない女なんだから。ヤッぱり癩<sup>かん</sup>が強いもんだからね。癩で肥る事が出来ないんだよ」

姉は肉のない細い腕を捲<sup>まく</sup>つて健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半円形の暈<sup>かさ</sup>が、怠<sup>だる</sup>そうな皮<sup>もの</sup>で物憂<sup>うれ</sup>げに染めていた。健三は黙ってそのぱさぱさした手の平を見詰

めた。

「でも健ちゃんは立派になって本当に結構だ。御前さんが外国へ行く時なんか、もう二度と生きて会う事は六<sup>む</sup>ずかしкаろうと思つてたのに、それでもよくまあ達者で歸つて来られたのね。御父<sup>おとつ</sup>さんや御母<sup>おつか</sup>さんが生きて御出<sup>おで</sup>だつたらさぞ御喜<sup>およろこ</sup>びだらう」

姉の眼にはいつか涙が溜<sup>たま</sup>っていた。姉は健三の子供の時分、  
「今に姉さんに御金が出来たら、健ちゃんに何でも好きなものを  
買<sup>か</sup>つて上げるよ」と口癖<sup>くちくせ</sup>のようにいつていた。そうかと思うと、  
「こんな偏<sup>へん</sup>窟<sup>くつ</sup>じゃこの子はとても物にやならない」ともいった。

健三は姉の昔の言葉やら語気やらを思い浮べて、心の中で苦笑し

た。

## 五

そんな古い記憶を喚よび起こすにつけても、久しく会わなかった姉の老けた様子が一層健三ひとしおの眼についた。

「時に姉さんはいくつでしたかね」

「もう御婆おばあさんさ。取って一いちだもの御前さん」

姉は黄色い疎まばらな歯を出して笑って見せた。実際五十一とは健

三にも意外であつた。

「すると私わたしとは一廻ひとまわり以上違うんだね。私やまた精々違って十とおか十一だと思っていた」

「どうして一廻どころか。健ちゃんとは十六違うんだよ、姉さんは。良人うちが羊さんの三碧ぺきで姉さんが四緑しろくなんだから。健ちゃんは慥たしか七赤しちせきだったね」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「繰って見て御覧、きっと七赤だから」

健三はどうして自分の星を繰るのか、それさえ知らなかった。

年齢としの話はそれぎりやめてしまった。

「今日は御留守なんですか」と比田ひだの事を訊きいて見た。

「昨<sup>ゆう</sup>夕<sup>べ</sup>も宿<sup>とまり</sup>直<sup>ち</sup>でね。なに自分の分<sup>ぶん</sup>だけなら月に三度か四<sup>よ</sup>度<sup>ど</sup>で済<sup>す</sup>む  
んだけれども、他<sup>ひと</sup>に頼<sup>たの</sup>まれるもんだからね。それに一晩でも余計  
泊<sup>とまり</sup>りさえすればやっぱりいくらかになるだろう、それでつい他<sup>ひと</sup>の  
分<sup>ぶん</sup>まで引受ける気にもなるのさ。この頃<sup>ころ</sup>じゃあつちへ寐<sup>ね</sup>るのと  
こつちへ歸<sup>かへ</sup>るのと、まあ半々位なものだろう。ことによると、向<sup>むかう</sup>  
へ泊<sup>とまり</sup>る方がかえって多いかも知れないよ」

健三は黙<sup>もく</sup>って障子<sup>しょうし</sup>の傍<sup>そば</sup>に据<sup>す</sup>えてある比田<sup>ひだ</sup>の机<sup>こ</sup>を眺<sup>なが</sup>めた。硯箱<sup>すずりばこ</sup>や  
状袋<sup>じょうふく</sup>や巻紙<sup>まきし</sup>がきちり<sup>きちり</sup>と行儀<sup>ぎやうぎ</sup>よく並<sup>なら</sup>んでいる傍<sup>そば</sup>に、簿記<sup>ぼけき</sup>用の帳面<sup>ちやうめん</sup>が  
赤<sup>せ</sup>い脊皮<sup>せがわ</sup>をこちらへ向<sup>む</sup>けて、二、三冊<sup>さんさふ</sup>立て懸<sup>か</sup>けてあつた。それか  
ら綺麗<sup>きれい</sup>に光<sup>ひ</sup>つた小<sup>こ</sup>さい算盤<sup>そろばん</sup>もその下<sup>した</sup>に置<sup>お</sup>いてあつた。

噂<sup>うわさ</sup>によると比田はこの頃変な女に関係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに囲<sup>ひきこ</sup>っているという評番<sup>ひょうばん</sup>であつた。宿直<sup>とまり</sup>だ宿直だといって宅<sup>うち</sup>へ帰らないのは、あるいはそのせいじゃなかろうかと健三には思えた。

「比田さんは近頃どうです。大分<sup>だいぶ</sup>年を取ったから元とは違つて真<sup>ま</sup>面目<sup>じめ</sup>になつたでしょう」

「なにやッぱり相変らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて来た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席<sup>よせ</sup>だ、やれ芝居<sup>しばや</sup>だ、やれ相撲だつて、御金さえありや年が年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇体なもんで、年のせいだか何だか知らないが、昔に比べる

と、少しは優しくなつたようだよ。もとは健ちゃんも知ってる通りの始末で、随分烈しかったもんだがね。蹴ったり、敲いたり、髪の毛を持って座敷中引摺廻したり……」

「その代り姉さんも負けてる方じゃなかったんだからな」

「なに妾や手出しなんかした事あ、つい一度だってありやしな  
い」

健三は勝気な姉の昔を考え出してつい可笑しくなった。二人の立ち廻りは今姉の自白するように受身のものばかりでは決してなかった。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だった。それにしてもこの利かぬ気の姉が、夫に騙されて、彼が宅へ歸ら

ない以上、きつと会社へ泊っているに違いないと信じ切っているのが妙に不憫<sup>ふびん</sup>に思われて来た。

「久しぶりに何か奢<sup>おご</sup>りましようか」と姉の顔を眺めながらいった。

「ありがと、今御鮎<sup>おすし</sup>をそういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてって御くれ」

姉は客の顔さえ見れば、時間に関係なく、何か食わせなければ承知しない女であつた。健三は仕方がないから尻<sup>しり</sup>を落付<sup>おちつ</sup>けてゆつくり腹の中に持って来た話を姉に切り出す氣になつた。



## 六

近頃の健三は頭を余計遣い過ぎるせいか、どうも胃の具合が好  
くなかった。時々思い出したように運動して見ると、胸も腹もか  
えって重くなるだけであつた。彼は要心して三度の食事以外には  
なるべく物を口へ入れないように心掛けていた。それでも姉の悪強  
には敵わなかつた。

「海苔巻なら身体に障りやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御  
馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御くれな。厭か  
い」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張って、好い加減烟草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が余り饒舌るので、彼は何時までも自分のいいたい事がいえなかった。訊きたい問題を持っていながら、こう受身な会話ばかりしているのが、彼には段々むず痒くなってきた。しかし姉にはそれが一向通じないらしかった。

他に物を食わせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三がこの前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣ろうかという出した。

「あんなものあ、宅にあったって仕方がないんだから、持って御

出でよ。なに比田ひだだって要いりやしないやね、汚いない達磨なんか」

健三は貰もらうとも貰もらわないともいわずにただ苦笑こくしやうしていた。する

と姉は何か秘密話ひみつわでもするように急に調子を低くした。

「実は健ちゃん、御前ごぜんさんが帰かえって来たら、話そう話そうと思つて、つい今日きょうまで黙もくってたんだがね。健ちゃんも帰りたてでさぞ

忙いそがしかろうし、それに姉さんが出掛でかけけて行くにしたところで、御住おすみさんがいちゃ、少し話はなし悪い事にくだしね。そうかって、手紙を

書かこうにも御存ごぞんじの無筆むふでだろう……」

姉あねの前まえ置おきは長たらしくもあり、また滑稽こっけいでもあった。小さい時

分わいくら手習てしなをさせても記憶おぼえが悪わるくつて、どんなに平易やさしい字

も、とうとう頭へ這<sup>はい</sup>入らずじまいに、五十の今日<sup>こんにち</sup>まで生きて来た女だと思つと、健三にはわが姉ながら氣の毒でもありまたうら恥ずかしくもあつた。

「それで姉さんの話つてえな、一体どんな話なんです。実は私<sup>わたし</sup>も今日は少し姉さんに話があつて来たんだが」

「そうかいそれじゃ御前さんの方のから先へ聴くのが順だったね。何故<sup>なぜ</sup>早く話さなかったの」

「だって話せないんだもの」

「そんなに遠慮しないでもいいやね。姉弟<sup>きょうだい</sup>の間じゃないか、御前さん」

姉は自分の多弁が相手の口を塞いでいるのだという明白な事実には毫も気が付いていなかった。

「まあ姉さんの方から先へ片付けましょう。何ですか、あなたの話ってというのは」

「実は健ちゃんにはまことに気の毒で、いい悪いんだけども、あたしも段々年を取って身体は弱くなるし、それに良人があの通りの男で、自分一人さえ好けりや女房なんかどうなったって、己の知った事じゃないって顔をしているんだから。——尤も月々の取高が少ない上に、交際もあるんだから、仕方がないといえばそれまでだけれどもね……」

姉のいう事は女だけに随分曲りくねっていた。なかなか容易な事で目的地へ達しそうになかったけれども、その主意は健三によく解った。つまり月々遣る小遣こづかいをもう少し増ましてくれというのだろうと思った。今でさえそれをよく夫から借りられてしまうという話を耳にしている彼には、この請求が憐あわれでもあり、また腹立たしくもあつた。

「どうか姉さんを助けると思つてね。姉さんだつてこの身体じゃどうせ長い事もあるまいから」

これが姉の口から出た最後の言葉であつた。健三はそれでも厭いやだとはいいかねた。

## 七

彼はこれから宅<sup>うち</sup>へ帰って今夜中に片付けなければならぬ明日<sup>あした</sup>の仕事を有<sup>も</sup>っていた。時間の価値というものを少しも認めないこの姉と対坐<sup>たいざ</sup>して、何時<sup>いつ</sup>までも、べんべんと喋<sup>しゃべ</sup>舌<sup>べ</sup>っているのは、彼にとって多少の苦痛に違<sup>ちが</sup>なかつた。彼は好<sup>いい</sup>加<sup>かげん</sup>減<sup>げん</sup>に帰ろうとした。そうして帰る間際になつてやつと帽子を被<sup>かぶ</sup>らない男の事をいい出した。

「実はこの間島田に会つたんですがね」

「へえどこで」

姉は吃驚<sup>びっくり</sup>したような声を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であつた。

「太田<sup>おおた</sup>の原<sup>はら</sup>の傍<sup>そば</sup>です」

「じゃ御前さんのじき近所じゃないか。どうしたい、何か言葉でも掛けたかい」

「掛けるって、別に言葉の掛けようもないんだから」

「そうさね。健ちゃんの方から何とかいわなきや、向<sup>むか</sup>で口<sup>くち</sup>なんぞ利<sup>き</sup>けた義理でもないんだから」

姉の言葉は出来るだけ健三の意を迎えるような調子であつた。

彼女は健三に「どんな服装<sup>なふり</sup>をしていたい」と訊<sup>き</sup>き足した後で、



「じゃやッぱり楽でもないんだね」といった。其所には多少の同情も籠こもっているように見えた。しかし男の昔を話し出した時にはさもさも悪にくらしそうな語氣を用い始めた。

「なんぼ因業いんごうだって、あんな因業な人ったらありやしないよ。今日が期限だから、是が非でも取って行くって、いくら言訳をいっても、坐すわり込んで動いごかないんだもの。しまいにこっちも腹が立つたから、御氣の毒さま、御金はありませんが、品物で好ければ、御鍋おなべでも御釜おかまでも持ってって下さいっていったらね、じゃ釜を持ってくっていうんだよ。あきれるじゃないか」

「釜を持って行くったって、重くってとても持てやしないでしょ

う」

「ところがあの業突張ごうつくばりの事だから、どんな事をして持ってかないとも限らないのさ。そらその日の御飯をあたしに炊たかせまいと思つて、そういう意地の悪い事をする人なんだからね。どうせ先へ寄つて好いい事あないはずだあね」

健三の耳にはこの話がただの滑稽こっけいとしては聞こえなかつた。その人と姉との間に起つたこんな交渉のなかに引絡ひっからまっている古い自分の影法師は、彼に取つて可笑おかしいというよりもむしろ悲しいものであつた。

「私わたしや島田に二度会つたんですよ、姉さん。これから先また何時

会うか分らないんだ」

「いいから知らん顔をして御出でよ。何度会ったって構わないじゃないか」

「しかしわざわざ彼所<sup>あそこ</sup>いらを通って、私の宅<sup>うち</sup>でも探しているんだか、また用があって通りがかりに偶然出ツくわしたんだか、それが分らないんでね」

この疑問は姉にも解けなかった。彼女はただ健三に都合の好さそうな言葉が無意味に使った。それが健三には空御世辞<sup>からおせじ</sup>のごとく響いた。

「こちらへはその後まるで来ないんですか」

「ああこの二、三年はまるつきり来ないよ」

「その前は？」

「その前はね、ちよくちよくってほどでもないが、それでも時々は来たのさ。それがまた可笑しいんだよ。来ると何時でも十一時頃でね。鰻飯<sup>うなぎめし</sup>かなにか食べさせないと決して帰らないんだからね。三度の御まんまを<sup>ひと</sup>一かたけでも好<sup>い</sup>いから他<sup>ひと</sup>の家<sup>うち</sup>で食べようってというのがつまりあの人の腹なんだよ。そのくせ服<sup>な</sup>装<sup>り</sup>なんかかなりなものを着ているんだがね。……」

姉のいう事は脱線しがちであつたけれども、それを聴いている健三には、やはり金銭上の問題で、自分が東京を去つたあとも、

なお多少の交際が二人の間に持続されていたのだという見当はついた。しかしそれ以上何も知る事は出来なかった。目下の島田については全く分らなかった。

## 八

「島田は今でも元の所に住んでいるんだろうか」

こんな簡単な質問さえ姉には判然はつきり答えられなかった。健三は少し的あてが外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居所いどころを突き留めようとまでは思っていなかったので、大した失望も感じ

なかった。彼はこの場合まだそれほどの手数を<sup>てかず</sup>尽す必要がないと信じていた。たとい尽すにしたところで、一種の好奇心を満足するに過ぎないとも考えていた。その上今の彼はこういう好奇心を軽蔑<sup>けいべつ</sup>しなければならなかった。彼の時間はそんな事に使用するには余りに高価すぎた。

彼はただ想像の眼で、子供の時分見たその人の家と、その家の周囲とを、心のうちに思い浮べた。

其所<sup>そこ</sup>には往来の片側に幅の広い大きな堀が一丁も続いていた。水の変らないその堀の中は腐った泥で不快に濁っていた。所々に蒼<sup>あお</sup>い色が湧<sup>わ</sup>いて厭<sup>いや</sup>な臭<sup>におい</sup>さえ彼の鼻を襲った。彼はその汚<sup>きた</sup>ならしい

一廓<sup>いっかく</sup>を――様の御屋敷<sup>さま</sup>という名で覚えていた。

堀の向う側には長屋がずっと並んでいた。その長屋には一軒に一つ位の割で四角な暗い窓が開けてあった。石垣とすれすれに建てられたこの長屋がどこまでも続いているので、御屋敷のなかはまるで見えなかった。

この御屋敷と反対の側には小さな平家<sup>ひらや</sup>が疎<sup>まば</sup>らに並んでいた。古いのも新らしいのもごちゃごちゃに交<sup>まじ</sup>っていたその町並は無論不揃<sup>ふそろ</sup>であつた。老人の齒のように所々が空いていた。その空いている所を少しばかり買つて島田は彼の住居<sup>すまい</sup>を拵<sup>ぐし</sup>えたのである。

健三はそれが何時出来上ったか知らなかった。しかし彼が始め

てそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであつた。四間よましかない狭い家だったけれども、木口きぐちなどはかなり吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつた。六畳の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狭い庭に、大き過ぎるほど立派な御影みかげの石燈籠いしどうろうが据えてあつた。

綺麗きれい好きな島田は、自分で尻端折しりはしおりをして、絶えず濡雑巾ぬれぞうきんを縁側や柱へ掛けた。それから跣足はだしになつて、南向の居間の前栽せんざいへ出て、草耒くさむしをした。あるときは鍬くわを使つて、門口かどぐちの泥溝どぐも浚さうつた。その泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸つていた。

島田はまたこの住居すまい以外に粗末な貸家を一軒建てた。そうして



双方の家の間を通り抜けて裏へ出られるように三尺ほどの路<sup>みち</sup>を付けた。裏は野とも畠<sup>はた</sup>とも片のつかない湿地であつた。草を踏むとじくじく水が出た。一番凹<sup>へこ</sup>んだ所などはしよっちゅう浅い池のようになつていた。島田は追々其所へも小さな貸家を建てるつもりでいるらしかつた。しかしその企ては何時までも実現されなかつた。冬になると鴨<sup>かも</sup>が下<sup>お</sup>りるから、今度は一つ捕つてやろうなどといつていた。……

健三はこういう昔の記憶をそれからそれへと繰り返した。今其所へ行つて見たら定めし驚ろくほど変っているだろうと思ひながら、彼はなお二十年前の光景を今日<sup>こんにち</sup>の事のように考えた。

「ことによると、良人<sup>うち</sup>では年始状位まだ出してるかも知れないよ」

健三の帰る時、姉はこんな事をいって、暗<sup>あん</sup>に比田<sup>ひだ</sup>の戻るまで話して行けと勧めたが、彼にはそれほどの必要もなかった。

彼はその日無沙汰<sup>ぶさた</sup>見舞<sup>みづみ</sup>かたがた市ヶ谷<sup>いちがや</sup>の薬王寺<sup>やくおうじ</sup>前にいる兄<sup>あに</sup>の宅<sup>うち</sup>へも寄って、島田の事を訊<sup>き</sup>いて見ようかと考えていたが、時間の遅<sup>おそ</sup>くなったのと、どうせ訊<sup>き</sup>いたって仕方がないという気が次第に強<sup>こ</sup>くなったのとで、それなり駒込<sup>こまごめ</sup>へ帰った。その晩はまた翌日<sup>あくるひ</sup>の仕事<sup>ぼうさい</sup>に忙殺<sup>ぼうさい</sup>されなければならなかった。そうして島田の事はまるで忘れてしまった。

## 九

彼はまた平生へいせいの我に歸った。活力の大部分を挙げて自分の職業に使う事が出来た。彼の時間は静かに流れた。しかしその静かなうちには始終いらするものがあつて、絶えず彼を苦しめた。

遠くから彼を眺めていなければならなかった細君は、別に手の出しようもないので、澄ましていた。それが健三には妻にあるまじき冷淡としか思えなかった。細君はまた心の中うちで彼と同じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮らす時間が多くなればなるほど、夫婦間の交渉は、用事以外に少なくなければならないは

ずだというのが細君の方の理窟であつた。

彼女は自然の勢い健三を一人書斎に遺して置いて、子供だけを相手にした。その子供たちはまた滅多に書斎へ這入らなかつた。たまに這入ると、きつと何か悪戯いたずらをして健三に叱しかられた。彼は子供を叱るくせに、自分の傍そばへ寄り付かない彼らに対して、やはり一種の物足りない心持を抱いだいていた。

一週間後の日曜が来た時、彼はまるで外出しなかつた。気分を変えるため四時頃風呂ふろへ行つて帰つたら、急にうっとりした好いい気持ちに襲われたので、彼は手足を畳の上へ伸ばしたまま、つい仮うた寐たねをした。そうして晩食ばんめしの時刻になつて、細君から起されるまで

は、首を切られた人のように何事も知らなかった。しかし起きて膳ぜんに向った時、彼には微かすかな寒気が脊筋せすじを上から下へ伝わって行くような感じがあつた。その後で烈はげしい嚏くさみが二つほど出た。傍にいる細君は黙っていた。健三も何もいわなかったが、腹の中ではこうした同情に乏しい細君に対する厭いやな心持を意識しつつ箸はしを取った。細君の方ではまた夫が何故なぜ自分に何もかも隔意なく話して、能働のうどつてき的に細君らしく振舞わせないのかと、その方をかえって不愉快に思つた。

その晩彼は明らかに多少風邪かぜ気味であるという事に気が付いた。用心して早く寐ねようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げら

れて、十二時過まで起きていた。彼の床に入る時には家内のものはもう皆な寐ねていた。熱い葛湯くずゆでも飲んで、発汗したい希望をもっていた健三は、やむをえずそのまま冷たい夜具うちものの裏に潜り込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寐付が大変悪かった。しかし頭脳あくるひの疲労はほどなく彼を深い眠の境に誘った。

翌日あくるひ眼を覚した時は存外安静であつた。彼は床の中で、風邪はもう癒なおったものと考えた。しかしいよいよ起きて顔を洗う段になると、何時もの冷水摩擦が退儀な位からだ身体が倦怠だるくなってきた。勇気を鼓こして食卓に着いて見たが、朝食あさめしは少しも旨うまくなかった。いつもは規定として三膳食べるところを、その日は一膳で済ました

後、<sup>あと</sup>梅干を熱い茶の中に入れてふうふう吹いて呑<sup>の</sup>んだ。しかしその意味は彼自身にも解らなかった。この時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしていたが、別に何にもいわなかった。彼にはその態度がわざと冷淡に構えている技巧の如く見えて多少腹が立つた。彼はことさらな咳<sup>せき</sup>を二度も三度もして見せた。それでも細君は依然として取り合わなかった。

健三はさつさと頭から白襯衣<sup>ワイシャツ</sup>を被<sup>かぶ</sup>つて洋服に着換えたなり例刻に宅<sup>うち</sup>を出た。細君は何時もの通り帽子を持って夫を玄関まで送つて来たが、この時の彼には、それがただ形式だけを重んずる女としか受取れなかったので、彼はなお厭な心持がした。

外ではしきりに悪感おかんがした。舌が重々しくばさついで、熱のあ  
る人のように身体全体が倦怠けたるかった。彼は自分の脈を取って見  
て、その早いのに驚ろいた。指頭しとうに触れるピンピンいう音が、秒  
を刻む袂時計たもとどけいの音と錯綜さくそうして、彼の耳に異様な節奏を伝えた。そ  
れでも彼は我慢して、するだけの仕事を外でした。

## 十

彼は例刻に宅うちへ帰った。洋服を着換える時、細君は何時もの通  
り、彼の不断着ふだんぎを持ったまま、彼の傍そばに立っていた。彼は不快な



顔をしてそちらを向いた。

「床を取ってくれ。寐<sup>ね</sup>るんだ」

「はい」

細君は彼のいうがままに床を延べた。彼はすぐその中に入って寐た。彼は自分の風邪<sup>かぜ</sup>気の事を一口も細君にいわなかった。細君の方でも一向<sup>そこ</sup>其所に注意していない様子を見せた。それで双方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞<sup>ふさ</sup>いでうつらうつらしていると、細君が枕元へ来て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召<sup>めしや</sup>上がりですか」

「飯<sup>めし</sup>なんか食いたくない」

細君はしばらく黙っていた。けれどもすぐ立って部屋の外へ出て行こうとはしなかった。

「あなた、どうかなすったんですか」

健三は何にも答えずに、顔を半分ほど夜具の襟<sup>えり</sup>に埋<sup>うず</sup>めていた。

細君は無言のまま、そつとその手を彼の額の上に加えた。

晩になって医者<sup>いしゃ</sup>が来た。ただの風邪だろうという診察<sup>しんさ</sup>を下<sup>くだ</sup>し

て、水薬<sup>すいやく</sup>と頓服<sup>とんぷく</sup>を呉<sup>く</sup>れた。彼はそれを細君の手から飲<sup>の</sup>ましても

らった。

翌日<sup>あくるひ</sup>は熱<sup>あつ</sup>がなお高<sup>たか</sup>くなった。医者<sup>いしゃ</sup>の注意<sup>ちうい</sup>によって護謨<sup>ゴム</sup>の氷囊<sup>ひようのう</sup>を

彼の頭の上に載せた細君は、蒲団ふとんの下に差し込むニッケル製の器械を下女げじょが買ってくるまで、自分の手で落ちないようにそれを抑えていた。

魔に襲われたような気分が二、三日つづいた。健三の頭にはその間の記憶というものが殆んどない位であつた。正気に帰った時、彼は平気な顔をして天井を見た。それから枕元に坐っている細君を見た。そうして急にその細君の世話になつたのだという事を思い出した。しかし彼は何にもいわずにまた顔を背けてしまった。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。

「あなたどうなすつたんです」

「風邪を引いたんだって、医者がいっじゃないか」

「そりゃ解ってます」

会話はそれで途切れてしまった。細君は厭いやな顔をしてそれぎり部屋を出て行った。健三は手を鳴らしてまた細君を呼び戻した。

「己おれがどうしたというんだい」

「どうしたって、——あなたが御病氣だから、私わたくしだってこうして氷嚢を更かえたり、薬を注ついだりして上げるんじゃないか。

それをあっちへ行けの、邪魔なのって、あんまり……」

細君は後をいわずに下を向いた。

「そんな事をいった覚はない」

「そりや熱の高い時仰おっしやった事ですから、多分覚えちやいらっしやらないでしょう。けれども平生へいぜいからそう考えてさえいらっしやらなければ、いくら病氣だつて、そんな事を仰しやる訳がなと思いますわ」

こんな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの位な真実が潜んでいるだろうかと反省して見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑えつけたがる男であつた。事実の問題を離れて、単に論理の上から行くと、細君の方がこの場合も負けであつた。熱に浮かされた時、魔睡薬に酔つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思っている事ばかり物語るとは限らないのだから。しかしそ

うした論理は決して細君の心を服するに足りなかった。

「よござんす。どうせあなたは私を下女同様に取り扱うつもりでいらっしやるんだから。自分一人さえ好ければ構わないと思つて、……」

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしそうに見送った。彼は論理の権威で自己を伴いつわっている事にはまるで気が付かなかった。学問の力で鍛え上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底しんそこから大人しく従い得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

その晩細君は土鍋<sup>どなべ</sup>へ入れた粥<sup>かゆ</sup>をもつて、また健三の枕元<sup>すわ</sup>に坐つた。それを茶碗<sup>ちやわん</sup>に盛りながら、「御起<sup>おおき</sup>になりませんか」と訊<sup>き</sup>いた。

彼の舌にはまだ苔<sup>こけ</sup>が一杯生えていた。重苦しいような厚ぼったいような口の中へ物を入れる気には殆<sup>ほと</sup>んどなれなかった。それでも彼は何故<sup>なぜ</sup>だか床の上に起き返つて、細君の手から茶碗を受取るうとした。しかし舌障<sup>したざわ</sup>りの悪い飯粒<sup>はんりゅう</sup>が、ざらざらと咽喉<sup>のど</sup>の方へ滑り込んで行くだけなので、彼はたった一膳<sup>ぜん</sup>で口を拭<sup>ぬぐ</sup>ったなり、すぐ故<sup>もと</sup>の通り横になつた。

「まだ食気<sup>しょつき</sup>が出ませんね」

「少しも旨<sup>うま</sup>くない」

細君は帯の間から一枚の名刺を出した。

「こういう人が貴方<sup>あなた</sup>の寐<sup>ね</sup>ていらしゃるうちに来たんですが、御病気だから断って帰しました」

健三は寐ながら手を出して、鳥の子紙に刷ったその名刺を受取って、姓名を読んで見たが、まだ会った事も聞いた事もない人であつた。

「何時<sup>いつ</sup>来たのかい」

「たしか一昨日<sup>おととい</sup>でしたろう。ちよつと御話ししようと思つたんですが、まだ熱<sup>さ</sup>が下らないから、わざと黙っていました」



「まるで知らない人だな」

「でも島田の事でちよつと御主人に御目にかかりたいって来ただそうですよ」

細君はとくに島田という二字に力を入れてこういいながら健三の顔を見た。すると彼の頭にこの間途中で会った帽子を被<sup>かぶ</sup>らない男の影がすぐひらめいた。熱から覚めた彼には、それまでこの男の事を思い出す機会がまるでなかったのである。

「御前島田の事を知ってるのかい」

「あの長い手紙が御常<sup>おつね</sup>さんって女から届いた時、貴方が御話しなすつたじゃありませんか」

健三は何とも答えずに一旦下へ置いた名刺をまた取り上げて眺めた。島田の事をその時どれほど詳しく彼女に話したか、それが彼には不確<sup>ふたしか</sup>であつた。

「ありや何時だつたかね。よッぽど古い事だろう」

健三はその長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思い出して苦笑した。

「そうね。もう七年位になるでしょう。私<sup>あたし</sup>たちがまだ千本<sup>せんぽん</sup>通りにいた時分ですから」

千本通りというのは、彼らがその頃住んでいた或<sup>ある</sup>都会の外れにある町の名であつた。

細君はしばらくして、「島田の事なら、あなたに伺わないでも、御兄さんおあにいからも聞いて知ってますわ」といった。

「兄がどんな事をいったかい」

「どんな事って、——なんでも余り善くない人だっという話じゃありませんか」

細君はまだその男の事について、健三の心を知りたい様子であつた。しかし彼にはまた反対にそれを避けたい意向があつた。彼は黙って眼を閉じた。盆に載せた土鍋と茶碗を持って席を立つ前、細君はもう一度こういった。

「その名刺の名前の人はまだ来るそうですよ。いずれ御病気が御おな

癒<sup>お</sup>りになったらまた伺いますからって、帰って行ったそうですか  
ら」

健三は仕方なしにまた眼を開<sup>あ</sup>いた。

「来るだろう。どうせ島田の代理だと名乗る以上はまた来るに  
極<sup>きま</sup>ってるさ」

「しかしあなた御会いになつて？　もし来たら」

実をいうと彼は会いたくなかった。細君はなおの事夫をこの変  
な男に会わせたくなかった。

「御会いにならない方が好<sup>い</sup>いでしょう」

「会っても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我<sup>が</sup>だと取れた。健三はそれを厭<sup>いや</sup>だけれども正しい方法だから仕方がないのだと考えた。

## 十二

健三の病気は日ならず全快した。活字に眼を曝<sup>さら</sup>したり、万年筆を走らせたり、または腕組をしてただ考えたりする時が再び続くようになった頃、一度無駄足を踏ませられた男が突然また彼の玄関先に現われた。

健三は鳥の子紙に刷った吉田虎吉<sup>よしだとらきち</sup>という見覚<sup>みおぼえ</sup>のある名刺を受

取つて、しばらくそれを眺めていた。細君は小さな声で「御会いになりますか」と訊ねた。

「会うから座敷へ通してくれ」

細君は断りたさそうな顔をして少し躊躇していた。しかし夫の様子を見てとつた彼女は、何もいわずにまた書斎を出て行つた。

吉田というのは、でっぷり肥つた、かつぶくの好い、四十恰好の男であつた。縞の羽織を着て、その頃まで流行つた白縮緬の兵児帯にぴかぴかする時計の鎖を巻き付けていた。言葉使いから見ても、彼は全くの町人であつた。そうかといって、決して堅気の商人とは受取れなかつた。「なるほど」というべきところを、わ

ざと「なある」と引張ったり、「御尤も」の代りに、さも感服し  
たらしい調子で、「いかさま」と答えたりした。

健三には会見の順序として、まず吉田の身元から訊いてかかる  
必要があつた。しかし彼よりは能弁な吉田は、自分の方で聞かれ  
ない先に、素性の概略を説明した。

彼はもと高崎にいた。そうして其所にある兵營に出入して、糧  
秣を納めるのが彼の商買であつた。

「そんな関係から、段々将校方の御世話になるようになります  
て。その内でも柴野の旦那には特別御贔負になつたものですか  
ら」

健三は柴野という名を聞いて急に思い出した。それは島田の後妻の娘が嫁に行つた先の軍人の姓であつた。

「その縁故で島田を御承知なんですね」

二人はしばらくその柴野という士官について話し合つた。彼が今高崎にいない事や、もつと遠くの西の方へ転任してから幾年目になるという事や、相変らずの大酒たいしゆで家計があまり裕ゆたかでないという事や、すべてこれらは、健三に取つて耳新らしい報知たよりに違なかつたが、同時に大した興味を惹ひく話題にもならなかつた。この夫婦に対して何らの悪感あつかんも抱いだいていない健三は、ただそうかと思つて平氣に聞いているだけであつた。しかし話が本筋に入つ



て、いよいよ島田の事を持ち出された時彼は、自然厭<sup>いや</sup>な心持がした。

吉田はしきりにこの老人の窮迫の状を訴え始めた。

「人間があまり好過ぎるもんですから、つい人に騙<sup>だま</sup>されてみんな損<sup>す</sup>っちゃうんです。とても取れる見込のないのにむやみに金を出してやったり何<sup>なん</sup>かするもんですからな」

「人間が好過ぎるんでしょうか。あんまり慾<sup>よくば</sup>張るからじゃありませんか」

たとい吉田のいう通り老人が困窮してゐるとしたところで、健三にはこうより外に解釈の道はなかった。しかも困窮というから

してが既に怪しかった。肝心の代表者たる吉田も強いてその点は弁護しなかった。「あるいはそうかも知れませんか」といったなり、後は笑に紛らしてしまった。そのくせ月々若干<sup>なにがし</sup>か貢<sup>みつ</sup>いで遣<sup>や</sup>ってくれる訳には行くまいかという相談をすぐその後から持ち出した。

正直な健三はつい自分の経済事状を打ち明けて、この一面識しかない男に話さなければならなくなった。彼は自己の手に入る百二、三十円の月収が、どう消費されつつあるかを詳しく説明して、月々あとに残るものは零<sup>ゼロ</sup>だという事を相手に納得させようとした。吉田は例の「なある」と「いかさま」を時々使って、神妙

に健三の弁解を聴いた。しかし彼がどこまで彼を信用して、どこから彼を疑い始めているか、その点は健三にも分らなかった。ただ先方はどこまでも下手したでに出る手段を主眼としているらしく見えた。不穩の言葉は無論、強請ゆすりがましい様子は噫おくびにも出さなかった。

## 十三

これで吉田の持つて来た用件の片が付いたものと解釈した健三は、心のうちで暗あんに彼の歸るのを予期した。しかし彼の態度は明

らかにこの予期の裏を行つた。金の問題にはそれぎり触れなかつたが、毒にも薬にもならない世間話を何時までも続けて動かなかつた。そうして自然天然話頭わとうをまた島田の身の上に戻して来た。

「どんなものでしょう。老人も取る年で近頃は大変心細そうな事ばかりいつていますが、———どうかして元通りの御交際おつきあいは願えな  
いものでしょうか」

健三はちよつと返答に窮した。仕方なしに黙つて二人の間に置かれた烟草盆タバコぼんを眺めていた。彼の頭のなかには、重たそうに毛繻けじゆ子の洋傘すこうもりをさして、異様の瞳を彼の上に据えたその老人の面影が

ありありと浮かんた。彼はその人の世話になつた昔を忘れる訳に行かなかつた。同時に人格の反射から来るその人に対しての嫌悪けんおの情も禁ずる事が出来なかつた。両方の間に板挟みとなつた彼は、しばらく口を開き得なかつた。

「手前も折角こうして上がったものですから、これだけはどうぞ曲げて御承知を願いたいもので」

吉田の様子はいよいよ丁寧になつた。どう考えても交際つきあひのは厭いやでならなかつた健三は、またどうしてもそれを断わるのを不義理と認めなければ済まなかつた。彼は厭でも正しい方に従おうと思ひ極きわめた。

「そういう訳なら宜<sup>よろ</sup>しゅう御座います。承知の旨<sup>むね</sup>を向<sup>むこ</sup>へ伝えて下さい。しかし交際は致しても、昔のような関係ではとても出来ませんから、それも誤解のないように申し伝えて下さい。それから私<sup>わたし</sup>の今の状況では、私の方から時々出掛けて行って老人に慰藉<sup>いしや</sup>を与えるなんて事は六<sup>む</sup>ずかしいのですが……」

「するとまあただ御出入<sup>おでいり</sup>をさせて頂くという訳になりますな」  
健三には御出入という言葉を書くのが辛<sup>つら</sup>かった。そうだともそうでないともいいかねて、また口を閉じた。

「いえなにそれで結構で、——昔と今とは事情もまるで違ますから」

吉田は自分の役目が漸く済んだという顔付をしてこういった後、今まで持ち扱っていた烟草入を腰へさしたなり、さっさと歸って行つた。

健三は彼を玄関まで送り出すと、すぐ書斎へ入った。その日の仕事を早く片付けようという気があるので、いきなり机へ向つたが、心のどこかに引懸りが出来て、なかなか思う通りに抄取らなかつた。

其所へ細君がちよつと顔を出した。「あなた」と二返ばかり声を掛けたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君がそのまま黙って引込んだ後、健三は進まぬながら仕事を夕方ま

で続けた。

平生へいぜいよりは遅くなつて漸ゆづめしく夕食の食卓に着いた時、彼は始めて細君と言葉を換わした。

「先刻さつき来た吉田つて男は一体何なんですか」と細君が訊きいた。

「元高崎で陸軍の用達ようたしか何かしていたんだそうだ」と健三が答えた。

問答は固もとよりそれだけで尽きるはずがなかった。彼女は吉田と柴野との関係やら、彼と島田との間柄やらについて、自分に納得の行くまで夫から説明を求めようとした。

「どうせ御金か何か呉れっていうんでしよう」



「まあそうだ」

「それで貴方<sup>あなた</sup>どうなすって、——どうせ御断りになったでしょうね」

「うん、断った。断るより外に仕方がないからな」

二人は腹の中で、自分らの家<sup>うち</sup>の経済状態を別々に考えた。月々支出している、また支出しなければならない金額は、彼に取って随分苦しい労力の報酬であると同時に、それで凡<sup>すべ</sup>てを賄<sup>まかな</sup>って行く細君に取っても、少しも裕<sup>ゆたか</sup>なものとはいわれなかった。

健三はそれぎり座を立とうとした。しかし細君にはまだ訊ききた  
い事が残っていた。

「それで素直に帰って行っただんですか、あの男は。少し変ね」

「だって断られれば仕方がないじゃないか。喧嘩けんかをする訳にも行  
かないんだから」

「だけど、また来るんでしょう。ああして大人しく帰って置い  
て」

「来ても構わないさ」

「でも厭いやですわ、蒼蠅うるさくって」

健三は細君が次の間で先刻さつきの会話を残らず聴いていたものと察

した。

「御前聴いてたんだろう、悉皆<sup>すっかり</sup>」

細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかった。

「じゃそれで好<sup>い</sup>いじゃないか」

健三はこういったたなりまた立つて書斎へ行こうとした。彼は独断家であつた。これ以上細君に説明する必要は始めからないものと信じていた。細君もそうした点において夫の権利を認める女であつた。けれども表向<sup>おもてむき</sup>夫の権利を認めるだけに、腹の中には何時も不平があつた。事々<sup>ことごと</sup>について出て来る権柄<sup>けんぺい</sup>ずくな夫の態度は、彼女に取って決して心持の好いものではなかった。何故<sup>なぜ</sup>もう少し

打ち解けてくれないのかという気が、絶えず彼女の胸の奥に働いていた。そのくせ夫を打ち解けさせる天分も技倆も自分に充分具えていないという事実には全く無頓着であつた。

「あなた島田と交際つても好いと受合つていらしたようですね」

「ああ」

健三はそれがどうしたといった風の顔付をした。細君は何時でも此所まで来て黙ってしまうのを例にしていた。彼女の性質として、夫がこういう態度に出ると、急に厭気がさして、それから先一步も前へ出る気になれないのである。その不愛想な様子がまた

夫の氣質に反射して、益彼を権柄ますますづくにしがちであつた。

「御前や御前の家族に関係した事でないんだから、構わないじゃないか、己おれ一人で極きめたつて」

「そりや私わたくしに対して何も構って頂かなくつても宜よござんす。構つてくれつたつて、どうせ構って下さる方じゃないんだから、……」

学問をした健三の耳には、細君のいう事がまるで脱線であつた。そうしてその脱線はどうしても頭の悪い証拠としか思われなかつた。「また始まつた」という氣が腹の中でした。しかし細君はすぐ当の問題に立ち戻つて、彼の注意を惹ひかなければならない

ような事をいい出した。

「しかし御父さまに悪いでしょう。今になってあの人と御交際おつきあいいになっちゃあ」

「御父さまって己おれのおやじかい」

「無論貴方あなたの御父さまですわ」

「己のおやじはとうに死んだじゃないか」

「しかし御亡くなりになる前、島田とは絶交だから、向後こうご一切付つき合あいをしちゃならないって仰おつしやったそうじゃありませんか」

健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絶した当時の光景をよく覚えていた。しかし彼は自分の父に対してさほど情愛の籠こもった

優しい記憶を有<sup>も</sup>っていなかった。その上絶交<sup>うんぬん</sup>云々についても、そう嚴重にいい渡された覚<sup>おぼえ</sup>はなかった。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話したつもりはないがな」

「貴方じゃありません。御兄<sup>おあにい</sup>さんに伺ったんです」

細君の返事は健三に取って不思議でも何でもなかった。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を与えなかった。

「おやじは阿爺<sup>おやじ</sup>、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絶するだけの根拠がないんだから」

こういう切った健三は、腹の中でその交際<sup>つきあい</sup>が厭で厭で堪らない

のだという事実を意識した。けれどもその腹の中はまるで細君の胸に映らなかった。彼女はただ自分の夫がまた例の頑固を張り通して、徒らに皆なの意見に反対するのだとばかり考えた。

## 十五

健三は昔その人に手を引かれて歩いた。その人は健三のために小さい洋服を拵らえてくれた。大人さえあまり外国の服装に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師は子供の着るスタイルなどにはまるで頓着しなかった。彼の上着には腰のあたりに釦が二つ



並んでいて、胸は開いたままであった。霜降の羅紗ラシャも硬くごわごわして、極めて手触てざわりが粗あらかった。ことに洋袴ズボンは薄茶色に豎溝たてみぞの通った調馬師でなければ穿はかないものであった。しかし当時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。

彼の帽子もその頃の彼には珍らしかった。浅い鍋底なべぞこのような形をしたフェルトをすぽりと坊主頭ずきんへ頭巾かぶのように被るのが、彼に大した満足を与えた。例の如くその人に手を引かれて、寄席よせへ手品を見に行った時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚ろきながら心配そうに、再びわが手に帰った帽子を、何遍か撫なでまわして見た

事もあつた。

その人はまた彼のために尾の長い金魚をいくつも買つてくれた。武者絵、むしやえ錦絵、にしきえ二枚つづき三枚つづきの絵も彼のいうがままに買つてくれた。彼は自分の身体にからだあう緋緘ひおどしの鎧よろいと竜頭たつがしらの兜かぶとさえ持っていた。彼は日に一度位ずつその具足を身に着けて、金紙きんがみで拵さいはいえた采配を振り舞わした。

彼はまた子供の差す位な短かい脇差わきざしの所有者であつた。その脇差の目貫めぬきは、鼠ねずみが赤い唐辛子とうがらしを引いて行く彫刻で出来上つていた。彼は銀で作つたこの鼠と珊瑚さんごで拵さいはいえたこの唐辛子とを、自分の宝物のように大事がつた。彼は時々この脇差が抜いて見たく

なつた。また何度も抜こうとした。けれども脇差は何時<sup>い</sup>も抜けなかつた。——この封建時代の装飾品もやはりその人の好意で小さな健三の手に渡されたのである。

彼はまたその人に連れられて、よく船に乗つた。船にはきつと腰蓑<sup>こしみの</sup>を着けた船頭<sup>おど</sup>がいて網を打つた。いなだの鰯<sup>ぼう</sup>だのが水際まで来て跳ね躍<sup>おど</sup>る様が小さな彼の眼に白金<sup>しろがね</sup>のような光を与えた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕<sup>こ</sup>いで行つて、海鰐<sup>かいす</sup>というものまで捕つた。そういう場合には高い波が来て舟を揺り動かすので、彼の頭はすぐ重くなつた。そうして舟の中へ寐<sup>ね</sup>てしまふ事が多かつた。彼の最も面白<sup>ふ</sup>がつたのは河豚<sup>ぐ</sup>の網にかかつた時であつた。彼は杉<sup>すぎ</sup>

箸<sup>ばし</sup>で河豚の腹をかんから太鼓<sup>だいこ</sup>のように叩<sup>たた</sup>いて、その膨<sup>ふく</sup>れたり怒<sup>いか</sup>つたりする様子を見て楽しんだ。……

吉田と会見した後<sup>あと</sup>の健三の胸には、ふとこうした幼時の記憶が続々湧<sup>わ</sup>いて来る事があつた。凡<sup>すべ</sup>てそれらの記憶は、断片的な割に鮮明<sup>あざやか</sup>に彼の心に映るものばかりであつた。そうして断片的ではあるが、どれもこれも決してその人と引き離す事は出来なかつた。零碎<sup>れいさい</sup>の事実を手繰<sup>たぐ</sup>り寄せれば寄せるほど、種<sup>おのおの</sup>が無尽蔵にあるように見えた時、またその無尽蔵にある種<sup>おのおの</sup>の各自のうちには必ず帽子を披<sup>かぶ</sup>らない男の姿が織り込まれているという事を発見した時、彼は苦しんだ。

「こんな光景をよく覚えていくせに、何故<sup>なぜ</sup>自分の有<sup>も</sup>っていたその頃の心が思い出せないのだろう」

これが健三にとって大きな疑問になった。実際彼は幼少の時分これほど世話になった人に対する当時のわが心持というものをまるで忘れてしまった。

「しかしそんな事を忘れるはずがないんだから、ことによると始めからその人に対してだけは、恩義<sup>じぎ</sup>相応<sup>あう</sup>の情合<sup>じやうあひ</sup>が欠けていたのかも知れない」

健三はこうも考えた。のみならず多分この方だろうと自分を解釈した。

彼はこの事件について思い出した幼少の時の記憶を細君に話さなかつた。感情に脆いもろ女の事だから、もしそうでもしたら、あるいは彼女の反感を和らげるに都合が好かろうとさえ思わなかつた。

## 十六

待ち設けた日がやがて来た。吉田と島田とはある日の午後連れ立って健三の玄関に現れた。

健三はこの昔の人に対してどんな言葉を使って、どんな応対を

して好<sup>い</sup>いか解らなかつた。思慮なしにそれらを極<sup>き</sup>めてくれる自然の衝動が今の彼にはまるで欠けていた。彼は二十年余も会わない人と膝<sup>ひざ</sup>を突き合せながら、大した懐かしみも感じ得ずに、むしろ冷淡に近い受答えばかりしていた。

島田はかねて横風<sup>おうふう</sup>だという評判のある男であつた。健三の兄や姉は単にそれだけでも彼を忌み嫌っている位であつた。実は健三自身も心のうちでそれを恐れていた。今の健三は、単に言葉遣いの末でさえ、こんな男から自尊心<sup>きずん</sup>を傷けられるには、あまりに高過ぎると、自分を評価していた。

しかし島田は思ったよりも鄭寧<sup>ていねい</sup>であつた。普通初見<sup>しよけん</sup>の人が挨拶<sup>あいさつ</sup>

に用いる「ですか」とか、「ません」とかいうてにはで、言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないように見えた。健三はむかしその人から健坊けんぼう々々と呼ばれた幼い時分を思い出した。関係が絶えてからも、会いさえすれば、やはり同じ健坊々々で通すので、彼はそれを厭いやに感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「しかしこの調子なら好いいだろう」

健三はそれで、出来るだけ不快の顔を一人に見せまいと力つとめた。向うもなるべく穏かに帰るつもりと見えて、少しも健三の気を悪くするような事はいわなかった。それがために、当然双方の間に話題となるべき懐旧談なども殆ほとんど出なかった。従って談話は



ややともすると途切れがちになった。

健三はふと雨の降った朝の出来事を考えた。

「この間二度ほど途中で御目にかかりましたが、時々あの辺を御通りになるんですか」

「実はあの高橋の総領の娘が片付いている所がついこの先にあるもんですから」

高橋というのは誰の事だか健三には一向解らなかった。

「はあ」

「そら知ってるでしょう。あの芝しばの」

島田の後妻の親類が芝にあつて、其所そこの家は何でも神主かんぬしか坊主

だという事を健三は子供心に聞いて覚えているような気もした。  
しかしその親類の人には、要<sup>よう</sup>さんという彼とおない年位な男に  
二、三遍会ったぎりで、他<sup>ほか</sup>のものに顔を合せた記憶はまるでな  
かった。

「芝というと、たしか御藤<sup>おふじ</sup>さんの妹さんに当<sup>あた</sup>る方の御嫁にいら  
した所でしたね」

「いえ姉ですよ。妹ではないんです」

「はあ」

「要三<sup>ようぞう</sup>だけは死にましたが、あとの姉妹<sup>きょうだい</sup>はみんな好い所へ片付い  
てね、仕合せですよ。そら総領のは、多分知っておいでだろう、

——へ行つたんです」

——という名前はなるほど健三に耳新しいものではなかった。しかしそれはもうよほど前に死んだ人であつた。

「あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父さん叔父さんて重宝がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出来たものだから、殆ど毎日のように此所の前を通ります」

健三は昔この男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つてもらつた事をわれ知らず思い出した。たとい一銭でも二銭でも負けさせなければ物を買つた例のないこの人は、その時も僅か五厘の

釣銭つりを取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかった。董其昌とうきしやうの折手本おりでほんを抱えて傍そばに佇立たたずんでいる彼に取ってはその態度が如何いかにも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だろう」

健三はこう考えながら、島田の顔を見て苦笑を洩もらした。しかし島田は一向それに気が付かないらしかった。

## 十七

「でも御蔭さまで、本を遺のこして行つてくれたもんですから、あの

男が亡くなっても、あとはまあ困らないで、どうにかこうにか遣<sup>や</sup>つて行けるんです」

島田は――の作った書物を世の中の誰でもが知っていなければならぬはずだといった風の口調でこういった。しかし健三は不幸にしてその著書の名前を知らなかった。字<sup>じ</sup>引<sup>びき</sup>か教科書だろうとは推察したが、別に訊<sup>き</sup>いて見る気にもならなかった。

「本というものは実に有難いもので、一つ作って置くとそれが何時までも売れるんですからね」

健三は黙っていた。仕方なしに吉田が相手になって、何でも儲<sup>もつ</sup>けるには本に限るような事をいった。

「御祝儀は済んだが、——が死んだ時後あとが女だけだもんだから、実は私わたしが本屋に懸け合いましたね。それで年々いくらと極きめて、向うから収めさせるようにしたんです」

「へえ、大したもんですな。なるほどどうも学問をなさる時は、それだけ資金もとが要いるようで、ちよつと損な気もしますが、さて仕上げて見ると、つまりその方が利廻りの好いい訳になるんだから、無学のものはとても敵かないませんな」

「結局得ですよ」

彼らの応対は健三に何の興味も与えなかった。その上いくら相あい槌つちを打とうにも打たれないような変な見当へ向いて進んで行くば

かりであつた。手持無沙汰な彼は、やむをえず二人の顔を見比べながら、時々庭の方を眺めた。

その庭はまた見苦しく手入の届かないものであつた。何時緑をとつたか分らないような一本の松が、息苦しそうに蒼黒い葉を垣根の傍に茂らしている外に、木らしい木は殆どなかった。箒に馴染まない地面は小石交りに凸凹していた。

「こちらの先生も一つ御儲けになったら如何です」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない訳に行かなかった。仕方なしに「ええ儲けたいものですね」といって跋を合せた。

「なに訳はないんです。洋行まですりゃ」

これは年寄の言葉であつた。それがあたかも自分で学資でも出して、健三を洋行させたように聞こえたので、彼は厭いやな顔をした。しかし老人は一向そんな事に頓着とんじやくする様子も見えなかつた。

迷惑ていそうな健三の体ていを見ても澄あまいしていた。しまいに吉田が例の烟草タバコ入いれを腰へ差して、「では今日こんにちはこれで御暇おいとまを致いたす事にしましようか」と催促せうそくしたので、彼は漸しだく歸かへる氣になつたらしかつた。

二人を送り出してまたちよつと座敷へ戻つた健三は、再び座蒲ざぶと団だんの上に坐まつたまま、腕組うでぐみをして考えた。



「一体何のために来たのだろう。これじゃ他ひとを厭いとがらせに来るのと同じ事だ。あれで向むかは面白いのだろうか」

彼の前には先刻さつき島田の持って来た手土産てみやげがそのまま置いてあった。彼はぼんやりその粗末な菓子折を眺めた。

何にもいわずに茶碗ちやわんだの烟草盆を片付け始めた細君は、しまいに黙って坐っている彼の前に立った。

「あなたまだ其処そこに坐まっていていらっしゃるんですか」

「いやもう立っても好い」

健三はすぐ立上たちあがろうとした。

「あの人たちはまた来るんでしょうか」

「来るかも知れない」

彼はこう言い放ったまま、また書斎へ入った。一しきり箒で座敷を掃く音が聞えた。それが済むと、菓子折を奪<sup>と</sup>り合う子供の声が出た。凡<sup>すべ</sup>てがやがて静<sup>しずか</sup>になったと思う頃、黄昏<sup>たそがれ</sup>の空からまた雨が落ちて来た。健三は買おう買おうと思いつながら、ついまだ買わずにいるオヴァーシューの事を思い出した。

## 十八

雨の降る日が幾<sup>いく</sup>日も続いた。それがからりと晴れた時、染付け

られたような空から深い輝きが大地の上に落ちた。毎日鬱陶しい  
思いをして、縫針にばかり気をとられていた細君は、縁鼻へ出て  
この蒼い空を見上げた。それから急に箆笥の抽斗を開けた。

彼女が服装を改ためて夫の顔を覗きに來た時、健三は頬杖を突  
いたまま盆槍汚ない庭を眺めていた。

「あなた何を考えていらっしやるの」

健三はちよつと振り返って細君の余所行姿を見た。その刹那に  
爛熟した彼の眼はふとした新らし味を自分の妻の上に見出した。

「どこかへ行くのかい」

「ええ」

細君の答は彼に取って余りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの佗<sup>わ</sup>びしい我に歸った。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八釜<sup>やかま</sup>しくって御蒼蠅<sup>おうるさ</sup>いでしょうから」

その日曜の午後を健三は独り静かに暮らした。

細君の歸って来たのは、彼が夕飯<sup>ゆうめし</sup>を済ましてまた書斎へ引き取った後<sup>あと</sup>なので、もう灯<sup>あかり</sup>が点いてから一、二時間経っていた。

「ただ今」

遅くなりましたとも何ともいわない彼女の無愛嬌<sup>むあいきやう</sup>が、彼には気

に入らなかつた。彼はちよつと振り向いただけで口を利かなかつた。するとそれがまた細君の心に暗い影を投げる媒介なかだちとなつた。

細君もそのまま立つて茶の間の方へ行つてしまつた。

話をする機会はそれぎり二人の間に絶えた。彼らは顔さえ見れば自然何かいいなくなるような仲の好い夫婦でもなかつた。またそれだけの親しみを現わすには、御互が御互に取つてあまりに陳ちん腐過ふぎた。

二、三日経ってから細君は始めてその日外出した折の事を食事の時話題のばに上せた。

「此間宅こないだうちへ行ったら、門司もじの叔父おじに会いましたね。随分驚ろいち

まいしました。まだ台湾にいるのかと思ったら、何時の間にか帰って来ているんですもの」

門司の叔父というのは油断のならない男として彼らの間に知られていた。健三がまだ地方にいる頃、彼は突然汽車で遣<sup>や</sup>つて来て、急に入用<sup>いりよう</sup>が出来たから、是非とも少し都合してくれまいかと頼むので、健三は地方の銀行に預けて置いた貯金を些<sup>さ</sup>少<sup>しょう</sup>ながら用立てたら、立派に印紙を貼<sup>は</sup>った証文を後から郵便で送って来た。その中に「但し利子の儀は」という文句まで書き添えてあったので、健三はむしろ堅過ぎる人だと思ったが、貸した金はそれぎり戻って来なかった。

「今何をしているのかね」

「何をしているんだか分りやしません。何とかの会社を起すんで、是非健三さんにも賛成してもらいたいから、その内上る<sup>あが</sup>つもりだっっていってました」

健三にはその後を訊<sup>き</sup>く必要もなかった。彼が昔し金を借りられた時分にも、この叔父は何かの会社を建てているとかいうので彼はそれを本当にしていた。細君の父もそれを疑わなかった。叔父はその父を旨<sup>うま</sup>く説きつけて、門司まで引張って行った。そうしてこれが今建築中の会社だといって、縁もゆかりもない他人の建てている家を見せた。彼は実にこの手段で細君の父から何千かの資

本を捲き上げたのである。

健三はこの人についてこれ以上何も知りたがらなかった。細君もいうのが厭らしかった。しかし何時もの通り会話は其所で切れてしまわなかった。

「あの日はあまり好い御天気だったから、久しぶりで御兄さんの所へも廻って来ました」

「そうか」

細君の里は小石川台町で、健三の兄の家は市ヶ谷薬王寺前だから、細君の訪問は大した迂回でもなかった。



## 十九

「御兄おあにいさんに島田の来た事を話したら驚ろいていらっしやいましたよ。今更来られた義理じゃないんだって。健三もあんなものを相手にしなければ好いのにって」

細君の顔には多少諷諫ふうかんの意が現われていた。

「それを聞きに、御前わざわざ薬王寺前へ廻ったのかい」

「またそんな皮肉を仰おつしゃる。あなたはどうしてそう他ひとのする事を悪くばかり御取りになるんでしょう。妾わたくしあんまり御無沙汰ごぶさたをして済まないと思ったから、ただ歸りにちよつと伺っただけです

わ」

彼が滅多に行つた事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行くのは、つまり夫の代りに交際つきあいの義理を立てているようなものなので、いかな健三もこれには苦情をいう余地がなかった。

「御兄おあにいさんは貴夫あなたのために心配していらつしやるんですよ。ああいう人と交際つきあいだして、またどんな面倒が起らないとも限らないからって」

「面倒つてどんな面倒を指すのかな」

「そりゃ起つて見なければ、御兄おあにいさんにだつて分りつ子ないでしょうけれども、何しろ碌ろくな事はないと思つていらつしやるんで

しよう」

碌な事があるうとは健三にも思えなかった。

「しかし義理が悪いからね」

「だって御金を遣<sup>や</sup>って縁を切った以上、義理の悪い訳はないじゃありませんか」

手切の金は昔し養育料の名前<sup>もと</sup>の下に、健三の父の手から島田に渡されたのである。それはたしか健三が廿二の春であつた。

「その上その御金をやる十四、五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅<sup>うち</sup>へ引き取られていらしたんでしよう」

いくつの年からいくつの年まで、彼が全然島田の手で養育され

たのか、健三にも判然<sup>はつきり</sup>分らなかった。

「三つから七つまでですって。御兄<sup>おあにい</sup>さんがそう御仰<sup>おっしや</sup>いましたよ」

「そうかしら」

健三は夢のように消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼鏡<sup>めがね</sup>で見るような細かい絵が沢山出た。けれどもその絵にはどれを見ても日付がついていなかった。

「証文にちゃんとそう書いてあるそうですから大丈夫間違はないでしょう」

彼は自分の離籍に関した書類というものを見た事がなかった。

「見ない訳はないわ。きっと忘れていらっしやるんですよ」

「しかしハツで宅へ歸つたにしたところで復籍するまでは多少往来もしていたんだから仕方がないさ。全く縁が切れたという訳でもないんだからね」

細君は口を噤んだ。それが何故だか健三には淋しかった。

「己も実は面白くないんだよ」

「じゃ御止しになれば好いのに。つまらないわ、貴夫、今になつてあんな人と交際うのは。一体どういふ氣なんでしょう、先方は」

「それが己には些とも解らない。向でもさぞ詰らないだろうと思うんだがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思つて遣つて来たに違いないから、用心なくっちゃいけないっていつていらつしやいましたよ」

「しかし金は始めから断つちまつたんだから、構わないさ」

「だってこれから先何をいい出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初からこうした予感が働らいていた。其所そこを既に防ぎ止めたとはかり信じていた理に強い健三の頭に、微かすかな不安がまた新らしく萌きざした。

その不安は多少彼の仕事の上に即ついて廻まわった。けれども彼の仕事はまたその不安の影をどこかへ埋うづめてしまふほど忙いそがしかった。そうして島田が再び健三の玄関へ現れる前に、月は早くも末になった。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ会計簿を持って彼の前に出た。

自分の外で働いて取る金額の全部を挙げて細君の手に委ゆだねるのを例にしていた健三には、それが意外であつた。彼はいまだかつて月末に細君の手から支出の明細書めいさいがきを突き付けられた例ためしがなかつた。

「まあどうにかしているんだろう」

彼は常にこう考えた。それで自分に金の要いる時は遠慮なく細君に請求した。月々買う書物の代価だけでも随分の多額に上のぼる事があつた。それでも細君は澄ましていた。経済に暗い彼は時として細君の放漫をさえ疑うたぐった。

「月々の勘定はちゃんとして己おれに見せなければいけないぜ」

細君は厭いやな顔をした。彼女自身からいえば自分ほど忠実な経済家はどこにもいない気なのである。

「ええ」

彼女の返事はこれぎりであつた。そうして月末つきずえが来ても会計簿



はついに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好<sup>い</sup>い時はそれを黙認した。けれども悪い時は意地になつてわざと見せろと逼<sup>せま</sup>る事があつた。そのくせ見せられるとごちやごちやしてなかなか解らなかつた。たとい帳面づらは細君の説明を聴いて解るにしても、實際月に肴<sup>さかな</sup>をどれだけ食<sup>く</sup>たものか、または米がどれほど要<sup>い</sup>つたものか、またそれが高過ぎるのか、安過ぎるのか、更に見当が付かなかつた。

この場合にも彼は細君の手から帳簿を受取つて、ざつと眼を通しただけであつた。

「何か変つた事でもあるのかい」

「どうかして頂かないと……」

細君は目下の暮し向について詳しい説明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能く今日まで遣つて来られたものだね」

「実は毎月余らないんです」

余ろうとは健三にも思えなかった。先月末に古い友達すえが四、五

人でどこかへ遠足に行くとかいうので、彼にも勧誘の端書をよこした時、彼は二円の会費がないだけの理由で、同行を断つたおぼえ覚もあつた。

「しかしかつかつ位には行きそうなものだがな」

「行っても行かなくっても、これだけの収入で遣つて行くより仕

方がないんですけれども」

細君はいい悪<sup>にく</sup>そうに、箆<sup>たんす</sup>笥<sup>ひきだし</sup>の抽匣にしまつて置いた自分の着物と帯を質に入れた顛末<sup>てんまつ</sup>を話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼らの晴着を風呂敷へ包んで、こっそり外へ持って出たりまた持って入ったりしたのをよく目撃した。他に知らないように気を配りがちな彼らの態度は、あたかも罪を犯した日影者のように見えて、彼の子供心に淋<sup>さび</sup>しい印象を刻み付けた。こうした聯想<sup>れんそう</sup>が今の彼を特更<sup>ことせう</sup>に佗<sup>わ</sup>びしく思わせた。

「質を置いたって、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身いまだ質屋の暖簾<sup>のれん</sup>を潜<sup>くぐ</sup>った事のない彼は、自分より貧苦

の経験に乏しい彼女が、平気でそんな所へ出入でいりするはずがないと  
考えた。

「いいえ頼んだんです」

「誰に」

「山野のうちの御婆おばあさんにです。あすこには通いつけの質屋の帳  
面があつて便利ですから」

健三はその先を訊きかなかった。夫が碌な着物一枚さえ拵こしらえてや  
らないのに、細君が自分の宅うちから持ってきたものを質に入れて、  
家計の足たしにしなければならぬというのは、夫の恥に相違なかつ  
た。

健三はもう少し働らこうと決心した。その決心から来る努力が、月々幾枚かの紙幣に変形して、細君の手に渡るようになったのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の内隠袋うちかくしから出して封筒のまま畳の上へ放り出した。黙つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐその紙幣の出所でどころを知つた。家計の不足はかくの如くにして無言のうちに補なわれたのである。

その時細君は別に嬉しいうれ顔もしなかつた。しかしもし夫が優し

い言葉に添えて、それを渡してくれたなら、きっと嬉しい顔を  
する事が出来たろうにと思った。健三はまたもし細君が嬉しそ  
うにそれを受取ってくれたら優しい言葉も掛けられたろうに  
と考えた。それで物質的の要求に応ずべく工面されたこの金  
は、二人の間に存在する精神上の要求を充<sup>み</sup>たす方便として  
はむしろ失敗に帰してしまった。

細君はその折の物足らなさを回復するために、二、三日経  
つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵<sup>もよう</sup>えようと思うんですが、これはどう  
でしょう」

細君の顔は晴々はればれしく輝やいていた。しかし健三の眼にはそれが下手へたな技巧を交えているように映った。彼はその不純を疑がつた。そうしてわざと彼女の愛嬌あいきょうに誘われまいとした。細君は寒そうに座を立った。細君の座を立った後あとで、彼はなぜ自分の細君を寒がらせなければならぬ心理状態に自分が制せられたのかと考えて益不愉快ますますになった。

細君と口を利く次の機会が来た時、彼はこういった。

「己おれは決して御前の考えているような冷刻な人間じゃない。ただ自分の有もっている温かい情愛を堰せき止めて、外へ出られないように仕向けるから、仕方なしにそうするのだ」

「誰もそんな意地の悪い事をする人はいないじゃありませんか」

「御前はしょっちゅうしているじゃないか」

細君は恨めしそうに健三を見た。健三の論理ロジックはまるで細君に通じなかった。

「貴夫あなたの神経は近頃よっぽど変ね。どうしてもっと穏当わたくしに私を觀察して下さらないのでしょうか」

健三の心には細君の言葉に耳を傾かたむける余裕がなかった。彼は自分ひやに不自然な冷かさに対して腹立たしいほどの苦痛を感じていた。

「あなたは誰も何にもしないのに、自分一人で苦しんでいらっ



しやるんだから仕方がない」

二人は互に徹底するまで話し合う事のついに出来ない男女なんによのよ  
うな気がした。従って二人とも現在の自分を改める必要を感じ得  
なかった。

健三の新たに求めた余分の仕事は、彼の学問なり教育なりに  
取って、さして困難のものではなかった。ただ彼はそれに費やす  
時間と努力とを厭いとった。無意味に暇を潰つぶすという事が目下の彼に  
は何よりも恐ろしく見えた。彼は生きているうちに、何かし終おおせ  
る、またし終おおせなければならぬと考える男であつた。

彼がその余分の仕事を片付けて家に帰るときは何時でも夕暮に

なつた。

或日彼は疲れた足を急がせて、自分の家の玄関の格子を手荒く開けた。すると奥から出て来た細君が彼の顔を見るなり、「あなたあの人<sup>あ</sup>がまた来ましたよ」といった。細君は島田の事を始終あの人あの人と呼んでいたので、健三も彼女の様子と言葉から、留守のうちに誰が来たのかほぼ見当が付いた。彼は無言のまま茶の間へ上<sup>あ</sup>って、細君に扶<sup>たす</sup>けられながら洋服を和服に改めた。

彼が火鉢ひばちの傍そばに坐すわって、烟草タバコを一本吹かしていると、間もなく夕飯ゆうめしの膳ぜんが彼の前に運ばれた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。

「上あがったのかい」

細君には何が上ったのか解らない位この質問は突然であつた。ちよつと驚ろいて健三の顔を見た彼女は、返事を待ち受けている夫の様子から始めてその意味を悟さとつた。

「あの人ですか。——でも御留守でしたから」

細君は座敷へ島田を上げなかつたのが、あたかも夫の氣に障さわる事でもしたような調子で、言訳がましい答をした。

「上げなかつたのかい」

「ええ。ただ玄関でちよつと」

「何とかいつていたかい」

「とうに伺うはずだったけれども、少し旅行していたものだから御不沙汰ごぶさたをして済みませんって」

済みませんという言葉が一種の嘲弄ちやうろうのように健三の耳に響いた。

「旅行なんぞするのかな、田舎いなかに用のある身体からだとも思えないが。御前にその行った先を話したかい」

「そりや何ともいいませんでした。ただ娘の所で来てくれって頼まれたから行って来たっていいました。大方あの御縫おぬいさんて人の

宅<sup>うち</sup>なんでしょう」

御縫さんの嫁<sup>かたづ</sup>いた柴野<sup>しばの</sup>という男には健三もその昔会<sup>おぼえ</sup>った覚<sup>おぼえ</sup>が

あつた。柴野の今の任地先もこの間吉田から聞いて知っていた。

それは師団か旅団のある中国辺の或<sup>ある</sup>都会であつた。

「軍人なんですか、その御縫さんて人の御嫁に行った所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間<sup>ま</sup>を置いたあとでこんな問<sup>と</sup>を掛けた。

「能<sup>よ</sup>く知<sup>し</sup>ってるね」

「何時<sup>い</sup>か御兄<sup>おあにい</sup>さんから伺<sup>うかが</sup>いましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野と御縫さんの姿を並べて考えた。

柴野は肩の張った色の黒い人であつたが、眼鼻立めはなだちからいうとむしろ立派な部類に属すべき男に違なかつた。御縫さんはまたすらりとした恰好かつこうの好い女で、顔は面長おもながの色白という出来であつた。ことに美しいのは睫毛まつげの多い切長きれながのその眼のように思われた。彼らの結婚したのは柴野がまだ少尉か中尉の頃であつた。健三は一度その新宅の門を潜くぐった記憶を有もつていた。その時柴野は隊から歸つて来た身体を大きくして、長火鉢ながひばちの猫板ねこいたの上にある洋盃コップから冷酒ひやざけをぐいぐい飲んだ。御縫さんは白い肌をあらわに、鏡台の前で鬢びんを撫なでつけていた。彼はまた自分の分として取り配わけられた握にぎり鮓すしをしきりに皿の中から撮つまんで食べた。……

「御縫さんて人はよっぽど容色きりようが好いんですか」

「何故なぜ」

「だって貴夫あなたの御嫁にするって話があったんだそうじゃありませんか」

なるほどそんな話もない事はなかった。健三がまだ十五、六の時分、ある友達を往来へ待たせて置いて、自分一人ちよつと島田の家へ寄ろうとした時、偶然門前の泥溝どぶに掛けた小橋の上に立つて往来を眺めていた御縫さんは、ちよつと微笑しながら出合頭であいがしらの健三に会釈した。それを目撃した彼の友達ドイッは独乙語を習い始めの子供であつたので、「フラウ門に倚よって待つ」といって彼をひや

かした。しかし御縫さんは年齒としからいうと彼より一つ上であつた。その上その頃の健三は、女に対する美醜みしうの鑑別かんべつもなければ好こう悪おも有もたなかった。それから羞恥はにかみに似たような一種妙な情緒があつて、女に近寄りたがる彼を、自然の力で、護謨球ゴムだまのように、かえつて女から弾はじき飛ばした。彼と御縫さんとの結婚は、他ほかに面倒のあるなしを差措さしおいて、到底物にならないものとして放棄されてしまった。



「貴夫<sup>あなた</sup>どうしてその御縫さんて人を御貰<sup>おもら</sup>いにならなかったの」

健三は膳<sup>ぜん</sup>の上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕<sup>おど</sup>ろかされた人のように。

「まるで問題にやならない。そんな料簡は島田にあったただけなんだから。それに己<sup>おれ</sup>はまだ子供だったしね」

「あの人の本当の子じゃないんでしょう」

「無論さ。御縫さんは御藤<sup>おふじ</sup>さんの連れっ子だもの」

御藤さんというのは島田の後妻の名であった。

「だけど、もしその御縫さんて人と一所になっ  
ていらしたら、  
どうでしょう。今頃は」

「どうなってるか判わからないじゃないか、なって見なければ」

「でも殊ことによると、幸福かも知れませんか。その方が」

「そうかも知れない」

健三は少し忌々いまいましくなった。細君はそれぎり口を噤つぶんだ。

「何故なぜそんな事を訊きくのだい。詰つまらない」

細君は窘たしなめられるような気がした。彼女にはそれを乗り越す

だけの勇気がなかった。

「どうせ私わたくしは始めっから御氣に入らないんだから……」

健三は箸はしを放り出して、手を頭の中に突込んだ。そうして其所そこ

に溜たまっている雲脂ふけをごしごし落とし始めた。

二人はそれなり別々の室<sup>へや</sup>で別々の仕事をした。健三は御機嫌よくと挨拶<sup>あいさつ</sup>に来た子供の去った後で、例の如く書物を読んだ。細君はその子供を寐<sup>ね</sup>かした後で、昼の残りの縫物を始めた。

御縫さんの話がまた二人の間の問題になったのは、中一日置いた後<sup>あと</sup>の事で、それも偶然の切ツ懸けからであつた。

その時細君は一枚の端書を持って、健三の部屋へ這<sup>はい</sup>入つて来た。それを夫の手に渡した彼女は、何時ものようにそのまま立ち去ろうともせず、彼の傍<sup>そば</sup>に腰を卸した。健三が受取った端書を手にしたなり何時までも読みそうにしないので、我慢しきれなくなつた細君はついに夫を促した。

「あなたその端書は比田<sup>ひだ</sup>さんから来たんですよ」

健三は漸<sup>よう</sup>やく書物から眼を放した。

「あの人の事で何か用事が出来たんですって」

なるほど端書には島田の事で会いたいからちよつと来てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあった。わざわざ彼を呼び寄せ  
る失礼も鄭寧<sup>ていねい</sup>に詫<sup>わ</sup>びてあった。

「どうしたんでしょう」

「まるで判明<sup>わか</sup>らないね。相談でもなかりうし。こっちから相談を  
持ち懸けた事なんかまるでないんだから」

「みんなで交際<sup>つきあ</sup>っちやいけないって忠告でもなさるんじゃない」

て。御兄さんおあにいもいらつしやると書いてあるでしょう、其所そこに」

端書には細君のいった通りの事がちゃんと書いてあつた。

兄の名前を見た時、健三の頭にふとまた御縫さんの影が差し  
た。島田が彼とこの女を一所にして、後まで両家の関係をつなご  
うとした如く、この女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦に  
したいような希望を有もつていたらしかったのである。

「健ちゃんの宅うちとこんな間柄にならないとね。あたしも始終健  
ちゃんの家うちへ行かれるんだけれども」

御藤さんが健三にこんな事をいったのも、顧りみれば古い昔で  
あつた。

「だって御縫さんが今嫁<sup>かたう</sup>いてる先は元からの許嫁<sup>いいなずけ</sup>なんでしょう」

「許嫁でも場合によったら断る気だったんだろうよ」

「一体御縫さんはどっちへ行きたかったんでしよう」

「そんな事が判<sup>わか</sup>明<sup>か</sup>るもんか」

「じゃ御兄<sup>おあにい</sup>さんの方はどうなの」

「それも判明らんさ」

健三の子供の時分の記憶の中には、細君の問に応ぜられるような人情がかった材料が一つもなかった。

## 二十四

健三はやがて返事の端書を書いて承知の旨を答えた。そうして指定の日が来た時、約束通りまた津つの守坂かみざかへ出掛けた。

彼は時間に対して頗すこぶる正確な男であつた。一面において愚直に近い彼の性格は、一面においてかえつて彼を神経的にした。彼は途中で二度ほど時計を出して見た。實際今の彼は起きると寐ねるまで、始終時間に追ひ懸けられているようなものであつた。

彼は途々みちみち自分の仕事について考えた。その仕事は決して自分の思い通りに進行していなかつた。一步目的へ近付くと、目的はまた一步彼から遠ざかつて行つた。

彼はまた彼の細君の事を考えた。その当時強烈であつた彼女の

歇私的<sup>ヒステリー</sup>里は、自然と軽くなつた今でも、彼の胸になお暗い不安の影を投げてやまなかつた。彼はまたその細君の里の事を考えた。経済上の圧迫が家庭を襲おうとしているらしい気配が、船に乗つた時の鈍い動揺を彼の精神に与える種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏<sup>まと</sup>めて考えなければならなかつた。凡<sup>すべ</sup>てが頹<sup>たいはい</sup>廢の影であり凋落<sup>ちようらく</sup>の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考えなければならなかつた。

姉の家へ来た時、彼の心は沈んでいた。それと反対に彼の気は興奮していた。



「いやどうもわざわざ御呼び立て申して」と比田が挨拶あいさつした。これは昔の健三に対する彼の態度ではなかった。しかし変って行く世相のうちに、彼がひとり姉の夫たるこの人にだけ優者になり得たという誇りは、健三にとって満足であるよりも、むしろ苦痛であつた。

「ちよつと上がろうにも、どうにもこうにも忙がしくって遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も実は頼まれたんですけれども、貴方あなたと御約束があるから、断わつてやつとの事で今歸つて来たところで」

比田のいうところを黙って聴いていると、彼が変な女をその勤つとめ

先の近所に囲っているという噂はまるで嘘のようであつた。

古風な言葉で形容すれば、ただ算筆に達者だという事の外に、大した学問も才幹もない彼が、今時の会社で、そう重宝がられるはずがないのに。――健三の心にはこんな疑問さえ湧いた。

「姉さんは」

「それに御夏がまた例の喘息でね」

姉は比田のいう通り針箱の上に載せた括り枕に寄りかかつて、ぜいぜいいていた。茶の間を覗きに立った健三の眼に、その乱れた髪の毛がむごたらしく映つた。

「どうです」

彼女は頭を真直まっすぐに上る事さえ叶かなわないで、小さな顔を横にしたまま健三を見た。挨拶をしようと思う努力が、すぐ咽喉のどに障ったと見えて、今まで多少落ち付いていた咳嗽せきの発作が一度に來た。その咳嗽は一つがまだ済まないうちに、後から後から仕切りなしに出て来るので、傍はたで見えていても気が退ひけた。

「苦しそうだな」

彼は独り言のようにこう囁つぶやいて、眉まゆを顰ひそめた。

見馴れない四十恰好がっこうの女が、姉の後うしろから脊中せなかを撫さすっている傍に、一本の杉箸すぎばしを添えた水飴みずあめの入物が盆の上に載せてあった。女は健三に会釈した。

「どうも一昨日おとといからね、あなた」

姉はこうして三日も四日も不眠絶食の姿で衰ろえて行つたあと、また活作用の弾力で、じりじり元へ戻るのを、年来の習慣と  
していた。それを知らない健三ではなかったが、まのあたり目前この猛烈な  
咳嗽せきと消え入るような呼息遣いきづかいとを見ていると、病氣に罹かつた当人  
よりも自分の方がかえって不安で堪らなくなった。

「口を利こうとすると咳嗽を誘い出すのでしよう。静かにしてい  
らっしゃい。私はあっちへ行くから」  
わたし

発作の一仕切収まった時、健三はこういって、またもとの座敷  
へ歸つた。

## 二十五

比田は平氣な顔をして本を読んでいた。「いえなにまた例の持病ですから」といって、健三の慰問にはまるで取り合わなかった。同じ事を年に何度となく繰り返して行くうちに、自然と末枯れて来る氣の毒な女房の姿は、この男にとって毫も感傷の種にならないように見えた。實際彼は三十年近くも同棲して来た彼の妻に、ただの一つ優しい言葉を掛けた例のない男であつた。

健三の這入って来るのを見た彼は、すぐ読み懸けの本を伏せて、鉄縁の眼鏡を外した。

「今ちよつと貴方あなたが茶の間へ行つていらした間に、下くだらないものを読み出したんです」

比田と読書とくしょ——これはまた極めて似つかわしくない取合わせであつた。

「何ですか、それは」

「なに健ちゃんなんぞの読むもんじゃありません、古いもんで」  
比田は笑いながら、机の上に伏せた本を取つて健三に渡した。

それが意外にも『常山紀談じやうざんきだん』だったので健三は少し驚おどろろいた。それにしては自分の細君が今にも絶息せつしそうな勢で咳せき込んでいるのを、まるで余所事よそごとのように聴いて、こんなものを平気で読んで

いられるところが、如何にも能くこの男の性質をあらわしていた。

「私や旧弊だからこういう古い講談物が好きでしてね」

彼は『常山紀談』を普通の講談物と思っているらしかった。しかしそれを書いた湯浅常山ゆあさじょうざんを講釈師と間違えるほどでもなかった。

「やッぱり学者なんでしょうね、その男は。曲亭馬琴きよくていばきんとどっちでしょう。私や馬琴の『八犬伝』はっけんでんも持っているんだが」

なるほど彼は桐の本箱の中に、日本紙へ活版で刷った予約の『八犬伝』を綺麗きれいに重ね込んでいた。

「健ちゃんは『江戸名所図絵』を御持ちですか」

「いいえ」

「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げましょうか。なにしろ江戸といった昔の日本橋にほんばしや桜田さくらだがすっかり分るんだからね」

彼は床の間の上にある別の本箱の中から、美濃紙版みのがみの浅黄あさぎの表紙をした古い本を一、二冊取り出した。そうしてあたかも健三を

『江戸名所図絵』の名さえ聞いた事のない男のように取扱った。

その健三には子供の時分その本を蔵くらから引き摺ずり出して来て、頁ページから頁へと丹念に挿絵さしえを拾って見て行くのが、何よりの楽しみで



あつた時代の、懐かしい記憶があつた。中にも駿河町するがちようという所に描かいてある越後屋えちごやの暖簾のれんと富士山とが、彼の記憶を今代表する焼しょう点てんとなつた。

「この分ではとてもその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接関係のない本などを読んでいる暇は、薬にたくつても出て来こまい」

健三は心のうちでこう考えた。ただ焦燥あせりに焦燥つてばかりいる今の自分が、恨めしくもありまた気の毒でもあつた。

兄が約束の時間までに顔を出さないのです、比田はその間を繋つなぐためか、しきりに書物の話をつづけようとした。書物の事なら何い

時まで話していても、健三にとって迷惑にならないという自信でも持っているように見えた。不幸にして彼の知識は、『常山紀談』を普通の講談ものとして考える程度であった。それでも彼は昔し出た『風俗画報』を一冊残らず綴とじて持っていた。

本の話が尽きた時、彼は仕方なしに問題を変えた。

「もう来そうなもんですね、長ちやうさんも。あれほどいつてあるんだから忘れるはずはないんだが。それに今日は明けの日だから、遅くとも十一時頃までには帰らなきやならないんだから。何ならちよつと迎むかいに遣やりましょうか」

この時また変化が来たと見えて、火の着くように咳き入る姉の

声が茶の間の方で聞こえた。

## 二十六

やがて門口かどぐちの格子こうしを開けて、沓脱くつぬぎへ下駄げたを脱ぐ音がした。

「やっと来たようですぜ」と比田ひだがいった。

しかし玄関を通り抜けたその足音はすぐ茶の間へ這入はいった。

「また悪いの。驚ろいた。ちつとも知らなかった。何時いつから」

短かい言葉が感投詞のようにまた質問のように、座敷に坐すわって  
いる二人の耳に響いた。その声は比田の推察通りやっぱり健三の

兄であつた。

「長さん、先刻さつきから待つてゐるんだ」

性急な比田はすぐ座敷から声を掛けた。女房の喘息ぜんそくなどはどうなつても構わないといった風のその調子が、如何いかにもこの男の特性をよく現わしていた。「本当に手前勝手な人だ」とみんなからいわれるだけあつて、彼はこの場合にも、自分の都合より外に何にも考えていないように見えた。

「今行きますよ」

長太郎ちやうたろうも少し癩しやくだと見えて、なかなか茶の間から出て来なかつた。

「重湯おもゆでも少し飲んだら好いいでしょう。厭いや？　でもそう何にも食べなくっちゃ身体からだが疲れるだけだから」

姉が息苦しくって、受答えが出来かねるので、脊中せなかを撫さすっていた女が一口ごとに適宜な挨拶あいさつをした。平生へいぜい健三よりは親しくその宅うちへ出入でいりする兄は、見馴みなれないこの女とも近付ちかづきと見えた。そのせいか彼らの応対は容易に尽きなかった。

比田はぷりつと膨ふくれていた。朝起きて顔を洗う時のように、両手で黒い顔をごしごし擦こすった。しまいに健三の方を向いて、小さな声でこんな事をいった。

「健ちゃんあれだから困るんですよ。口ばかり多くってね。こっ

ちも手がなから仕方なしに頼むんだが」

比田の非難は明らかに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。

「何ですあの人は」

「そら梳<sup>すきて</sup>手の御勢<sup>おせい</sup>ですよ。昔し健ちゃんの遊<sup>あそ</sup>びに来る時分、よくいたじゃありませんか、宅に」

「へええ」

健三には比田の家<sup>うち</sup>でそんな女に会った覚<sup>おぼえ</sup>が全くなかった。

「知りませんね」

「なに知らない事があるもんですか、御勢だもの。あいつはね、

御承知の通りまことに親切で実意のある好い女なんだが、あれだから困るんです。喋舌しゃべるのが病なんだから」

よく事情を知らない健三には、比田のいう事が、ただ自分だけに都合のいい誇張のように聞こえるばかりで、大した感銘も与えなかった。

姉はまた咳せき出した。その発作が一段落片付くまでは、さすがの比田も黙っていた。長太郎も茶の間を出て来なかった。

「何だか先刻さつきより劇はげしいようですね」

少し不安になった健三は、そういいながら席を立とうとした。

比田は一も二もなく留めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見るとちよつと吃驚びっくりしますがね。私わたしなんざあもう年来馴なれっ子になつてゐるから平氣なもんですよ。實際またあれを一夕苦にしているようじゃ、とても今日こんにちまで一所に住んでゐる事は出来ませんからね」

健三は何とも答える訳に行かなかつた。ただ腹の中で、自分の細君が歇私ヒステリー的里の發作に冒された時の苦しい心持を、自然の対照として描き出した。

姉の咳嗽せきが一収ひとおさまり収つた時、長太郎は始めて座敷へ顔を出した。



「どうも済みません。もっと早く来るはずだったが、生憎<sup>あいにく</sup>珍らし  
く客があつたもんだから」

「来たか長さん待ってたほい。冗談じゃないよ。使でも出そうか  
と思つてたところです」

比田は健三の兄に向つてこの位な気安い口調で話の出来る地位  
にあつた。

## 二十七

三人はすぐ用談に取り掛つた。比<sup>ひ</sup>田<sup>だ</sup>が最初に口を開<sup>ひら</sup>いた。

彼はちよつとした相談事にも仔細しさいぶる男であつた。そうして仔細ぶればぶるほど、自分の存在が周囲から強く認められると考へてゐるらしかつた。「比田さん比田さんって、立てて置きさえすりゃ好いんだ」と皆みんななが蔭かげで笑つていた。

「時に長さんどうしたもんだらう」

「そう」

「どうもこりや天から筋が違ふんだから、健ちゃんに話をするまでもなからうと思ふんだがね、私わたしや」

「そうさ。今更そんな事を持ち出して来たって、こっちで取り合ふ必要もないだらうじゃないか」

「だから私も突つ跳ねたのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、まるで自分の殺した子供を、もう一返生かしてくれって、御寺様へ頼みに行くようなものだから御止しなさいって。だけど大將いくら何といっても、坐り込んで動かないんだからね、仕方がない。しかしあの男がああやって今頃私の宅へのんこのしゃあで遣って来るのも、実はというと、やっぱり昔し○の関係があつたからの事さ。だってそりゃ昔しも昔し、ずっと昔しの話でさあ。その上ただで借りやしまいしね、……」

「またただで貸す風でもなしね」

「そうさ。口じゃ親類付合だとか何とかいってゐるくせに、金にか

けちゃあかの他人より阿漕あこぎなんだから」

「来た時にそういつて遣れば好いのに」

比田と兄との談話はなかなか元へ戻って来なかった。ことに比田は其所そこに健三のいるのさえ忘れてしまったように見えた。健三は好加減いかげんに何とか口を出さなければならなくなった。

「一体どうしたんです。島田がこちらへでも突然伺ったんですか」

「いやわざわざ御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋舌しゃべって済みません。——じゃ長さん私から健ちゃんに一応その顛末てんまつを御話しする事にしようか」

「ええどうぞ」

話しは意外にも単純であつた。――ある日島田が突然比田の所へ来た。自分も年を取つて頼りにするものがいないので心細いという理由の下に、<sup>もと</sup>昔し通り島田姓に復歸してもらいたいからどうぞ健三にそう取り次いでくれと頼んだ。比田もその要求の突<sup>とつ</sup>飛<sup>ぴ</sup>なのに驚ろいて最初は拒絶した。しかし何といつても動かないので、ともかくも彼の希望だけは健三に通じようと受合つた。――ただこれだけなのである。

「少し変ですねえ」

健三にはどう考えても変としか思われなかつた。

「変だよ」

兄も同じ意見を言葉にあらわした。

「どうせ変にや違ない、何しろ六十以上になって、少しやきが廻ってるからね」

「慾よくでやきが廻りやしないか」

比田も兄も可笑おかしそうに笑ったが、健三は独りその仲間へ入る事が出来なかった。彼は何時までも変だと思ふ氣分に制せられていた。彼の頭から判断すると、そんな事は到底ありようはずがなかった。彼は最初に吉田が来た時の談話を思い出した。次に吉田と島田が一所に来た時の光景を思い出した。最後に彼の留守に旅

先から帰ったといつて、島田が一人で訪ねて来た時の言葉を思い出した。しかしどこをどう思い出しても、其所そこからこんな結果が生れて来きようとは考えられなかった。

「どうしても変ですね」

彼は自分のために同じ言葉をもう一度繰り返して見た。それから漸やっと気を換えてこういった。

「しかしそりや問題にやならないでしょう。ただ断りさえすりや好いんだから」

健三の眼から見ると、島田の要求は不思議な位理に合わなかった。従ってそれを片付けるのも容易であつた。ただ簡単に断りさえすれば済んだ。

「しかし一旦は貴方<sup>あなた</sup>の御耳まで入れて置かないと、私の落度<sup>わたくし</sup>になりますからね」と比田は自分を弁護するようにいった。彼はどこまでもこの会合を真面目<sup>まじめ</sup>なものにしなければ気が済まないらしかった。それで言う事も時によつて変化した。

「それに相手が相手ですからね。まかり間違えば何をするか分らないんだから、用心なくっちゃいけませんよ」

「焼が廻ってるなら構わないじゃないか」と兄が冗談半分に彼の



矛盾を指摘すると、比田はなお真面目になった。

「焼が廻ってるから怖いんです。なに先が当り前の人間なら、私<sup>わたし</sup>だつてその場ですぐ断つちまいますあ」

こんな曲折は会談中に時々起つたが、要するに話は最初に戻つて、つまり比田が代表者として島田の要求を断るという事になった。それは三人が三人ながら始めから予期していた結局なので、其所<sup>そこ</sup>へ行き着くまでの筋道は、健三から見ると、むしろ時間の空費に過ぎなかつた。しかし彼はそれに対して比田に礼を述べる義理があつた。

「いえ何御礼なんぞ御仰<sup>おっしゃ</sup>られると恐縮します」といった比田の方

はかえって得意であつた。誰が見ても宅<sup>うち</sup>へも歸らずに忙がしがつている人の様子とは受取れないほど、調子づいて来た。

彼は其所にある塩煎餅<sup>しおせんべい</sup>を取ってやたらにぼりぼり噛<sup>か</sup>んだ。そうしてその相間<sup>あいま</sup>々々には大きな湯呑<sup>ゆのみ</sup>へ茶を何杯も注<sup>つ</sup>ぎ易<sup>か</sup>えて飲んだ。

「相変らず能<sup>よ</sup>く食べますね。今でも鰻飯<sup>うなぎめし</sup>を二つ位遣<sup>や</sup>るんでしょ」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちゃんの見ている前で天ぷら蕎麦<sup>そば</sup>を五杯位ぺろりと片付けたもんでしたがね」

比田はその頃から食気くいけの強い男であつた。そうして余計食うのを自慢にしていた。それから腹の太いのを賞ほめられたがつて、時機たさえあれば始終叩たたいて見せた。

健三は昔しこの人に連れられて寄席よせなどに行つた歸りに、能く二人して屋台店やたいみせの暖簾のれんを潜くぐつて、鮎すしや天麩羅てんぷらの立食たちぐいをした當時を思い出した。彼は健三にその寄席で聴いたしかおどりとかいう三味線みせんの手を教えたり、またはさばさを読むという隠語などを習い覚えさせたりした。

「どうもやっぱり立食に限るようですね。私もこの年になるまで、段々方々食つて歩いて見たが。健ちゃん、一遍かるいざわ輕井沢で蕎麦

を食つて御覧なさい、騙だまされたと思つて。汽車の停とまつてゐるうちに、降りて食うんです、プラットフォームの上へ立つてね。さすが本場だけあつて旨うもうがすぜ」

彼は信心を名として能く方々遊び廻る男であつた。

「それよか、善光寺ぜんこうじの境内けいだいに元祖藤八拳指南所とうはちけんという看板が懸つていたには驚ろいたね、長さん」

「這はい入つて一つ遣つて来やしないか」

「だつて束修そくしゅうが要いるんだからね、君」

こんな談話を聞いていると、健三も何時か昔の我に歸つたような心持になった。同時に今の自分が、どんな意味で彼らから離れ

てどこに立っているかも明らかに意識しなければならなくなつた。しかし比田は一向そこに気が付かなかつた。

「健ちゃんとはたしか京都へ行つた事がありますね。彼所あそこに、ちんちらでんき皿持もてこ汁飲ましょつて鳴く鳥がいるのを御存じですか」などと訊きいた。

先刻さつきから落付おちついていた姉が、また劇はげしく咳せき出した時、彼は漸ようやく口を閉じた。そうしてさもなくさくさしたといわぬばかりに、左右の手の平を揃そろえて、黒い顔をのぞごしこす擦こすつた。

兄と健三はちよつと茶の間の様子を覗のぞきに立つた。二人とも発作の静まるまで姉の枕元すわに坐すわつていた後で、別々に比田の家を出

た。

## 二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控えている事を遂に忘れることが出来なくなった。この世界は平生へいぜいの彼にとって遠い過去のものであった。しかしざという場合には、突然現在に変化しなければならぬ性質を帯びていた。

彼の頭には願がんにんぼう仁坊主に似た比田の毬栗頭いがぐりあたまが浮いたり沈んだりした。猫のように願あごの詰った姉の息苦しく喘あえいでいる姿が薄暗く見

えた。血の気の竭つきかけた兄に特有なひすばった長い顔も出たり引込ひっこんだりした。

昔しこの世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から独り脱け出してしまった。そうして脱け出したまま永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久しぶりに過去の臭においを嗅かいだ。それは彼に取つて、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭いやらしさとを齎もたらす混合物であつた。

彼はまたその世界とはまるで関係のない方角を眺めた。すると其所そこには時々彼の前を横切る若い血と輝いた眼を有もつた青年がいた。彼はその人々の笑いに耳を傾むけた。未来の希望を打ち出す

鐘のように朗かなその響が、健三の暗い心を躍おどらした。

或日彼はその青年の一人に誘われて、池いけの端はたを散歩した帰りに、広ひろ小路こうじから切通きりどおしへ抜ける道を曲った。彼らが新らしく建てられた見番けんばんの前へ来た時、健三はふと思い出したように青年の顔を見た。

彼の頭の中には自分とまるで縁故のない或女の事が閃ひらめいた。その女は昔し芸者をしていた頃人を殺した罪で、二十年余あまりも牢屋ろうやの中で暗い月日を送った後あと、漸やっと世の中へ顔を出す事が出来るようになったのである。

「さぞ辛いつらだろう」



容色<sup>きりよう</sup>を生命とする女の身になったら、殆<sup>ほと</sup>んど堪えられない淋<sup>さび</sup>しみが其所<sup>そこ</sup>にあるに違ないと健三は考えた。しかしいくらでも春が永く自分の前に続いているとしか思わない伴<sup>つれ</sup>の青年には、彼の言葉が何ほどの効果にもならなかった。この青年はまだ二十三、四であつた。彼は始めて自分と青年との距離を悟つて驚ろいた。

「そういう自分もやっぱりこの芸者と同じ事なのだ」

彼は腹の中で自分と自分にこういい渡した。若い時から白髪が生えたがる性質<sup>たち</sup>の彼の頭には、気のせいかな頃めつきり白い筋が増して来た。自分はまだまだと思つているうちに、十年は何時の間にか過ぎた。

「しかし他事<sup>ひとごと</sup>じゃないね君。その実僕も青春時代を全く牢獄の裡<sup>うち</sup>で暮したのだから」

青年は驚ろいた顔をした。

「牢獄とは何です」

「学校さ、それから図書館さ。考えると両方ともまあ牢獄のようなものだね」

青年は答えなかった。

「しかし僕がもし長い間の牢獄生活をつづけなければ、今日<sup>こんにち</sup>の僕は決して世の中に存在していないんだから仕方がない」

健三の調子は半ば弁解的であつた。半ば自嘲<sup>じちようてき</sup>的であつた。過去

の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、その現在の自分の上に、是非とも未来の自分を築き上げなければならなかった。それが彼の方針であつた。そうして彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれどもその方針によつて前へ進んで行くのが、この時の彼には徒らに老ゆるという結果より外に何物をも持ち来さなように見えた。

「学問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」  
「そんな事はありません」

彼の意味はついに青年に通じなかつた。彼は今の自分が、結婚当時の自分と、どんなに變つて、細君の眼に映るだろうかを考え

ながら歩いた。その細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髪の手なども気の引けるほど抜ける事があつた。そうして今は既に三番目の子を胎内に宿していた。

## 三十

家へ帰ると細君は奥の六畳に手枕てまくらをしたなり寐ねていた。健三はその傍そばに散らばっている赤い片端きれはしだの物指ものさしだの針箱だのを見て、またかという顔をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起

きた。健三を送り出してからまた横になる日も少なくなかった。こうしてあくまで眠りを貪<sup>むさ</sup>ばらないと、頭が痺<sup>しび</sup>れたようになって、その日一日何事をしても判然<sup>はつきり</sup>しないというのが、常に彼女の弁解であつた。健三はあるいはそうかも知れないと思つたり、またはそんな事があるものかと考えたりした。ことに小言<sup>こごと</sup>をいったあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞寐<sup>ふてね</sup>をするんだ」

彼は自分の小言が、歇<sup>ヒステリー</sup>私<sup>リ</sup>的<sup>しょう</sup>里<sup>しょう</sup>性の細君<sup>しよ</sup>に對して、どう反応するかを、よく觀察してやる代りに、單なる面<sup>つら</sup>当<sup>あて</sup>のために、こうした不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釈して、苦々<sup>くさ</sup>しい囁<sup>ささや</sup>きを

口の内もで洩もらす事がよくあつた。

「何な故ぜ夜早く寐ねないんだ」

彼女は宵よつ張であつた。健三にこういわれる度に、夜は眼が冴さえて寐ねられないから起きているのだという答弁をきつとした。そうして自分の起きていたい時までには必ず起きて縫物の手をやめなかつた。

健三はこうした細君の態度を悪にくんだ。同時に彼女の歇ヒステリー私シ的里リを恐れた。それからもしや自分の解釈が間違つていはしまいかという不安にも制せられた。

彼は其所そこに立つたまま、しばらく細君の寐顔を見詰めていた。

肱ひじの上に載せられたその横顔はむしろ蒼白あおしろかった。彼は黙って立っていた。御住おすみという名前さえ呼ばなかった。

彼はふと眼を転じて、あらわな白い腕かいなの傍に放り出された一束ひとたばの書物かきものに気を付けた。それは普通の手紙の重なり合ったものでもなければ、また新らしい印刷物を一纏ひとまとめに括くくったものとも見えなかった。惣体そうたいが茶色がかって既に多少の時代を帯びている上に、古風なかんじん撚よりで丁寧な結び目がしてあった。その書ものの一端は、殆ほとんど細君の頭の下に敷かれていると思われる位、彼女の黒い髪で、健三の目を遮ぎっていた。

彼はわざわざそれを引き出して見る気にもならず、また眼を

蒼白<sup>あおしろ</sup>い細君<sup>ひたい</sup>の額の上に注いだ。彼女の頬<sup>ほお</sup>は滑り落ちるようにこけていた。

「まあ御瘦<sup>おや</sup>せなすった事」

久しぶりに彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚ろいたように、こんな評を加えた事があつた。その時健三は何故<sup>なぜ</sup>だかこの細君を瘦<sup>すべ</sup>せさせた凡<sup>すべ</sup>ての原因が自分一人にあるような心持がした。

彼は書斎に入った。

三十分も経つたと思う頃、門口<sup>かどぐち</sup>を開ける音がして、二人の子供が外から帰つて来た。坐<sup>すわ</sup>っている健三の耳には、彼らと子守との



問答が手に取るように聞こえた。子供はやがて馳<sup>か</sup>け込むように奥へ入った。其所ではまた細君が蒼蠅<sup>うるさ</sup>いといつて、彼らを叱<sup>しか</sup>る声があった。

それからしばらくして細君は先刻<sup>さつき</sup>自分の枕元にあつた一束の書ものを手に持ったまま、健三の前にあらわれた。

「先ほど御留守に御兄<sup>おあにい</sup>さんがいらつしやいましてね」

健三は万年筆の手を止めて、細君の顔を見た。

「もう帰ったのかい」

「ええ。今ちよつと散歩に出掛ましたから、もうじき帰りましょうって御止めたんですけれども、時間がないからって御上<sup>おあが</sup>りに

なりませんでした」

「そうか」

「何でも谷中<sup>やなか</sup>に御友達とかの御葬式があるんですって。それで急いで行かないと間に合わないから、上ってられないんだと仰<sup>おつし</sup>やいました。しかし帰りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、帰ったら待ってるようにいつてくれって、いい置いていらつしゃいました」

「何の用なのかね」

「やっぱりあの人の事なんだそうです」

兄は島田の事で来たのであつた。

## 三十一

細君は手に持った書付かきつけの束を健三の前に出した。

「これを貴夫あなたに上げてくれと仰おつしゃいました」

健三は怪訝けげんな顔をしてそれを受取った。

「何だい」

「みんなあの人に関係した書類なんだそうです。健三に見せたら参考になるだろうと思って、用筆ようだんす笥ひきだしの抽匣ひきだしの中にしまって置いたのを、今日きょう出して持って来たって仰おつしやいました」

「そんな書類があつたのかしら」

彼は細君から受取った一括<sup>ひとくく</sup>りの書付を手に載せたまま、ぼんやり時代の付いた紙の色を眺めた。それから何も意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにしてほぼ二寸<sup>すん</sup>もあつたが、風を通らない湿<sup>し</sup>気<sup>つけ</sup>た所に長い間放り込んであつたせい、虫に食われた一筋<sup>あと</sup>の痕が偶然健三の眼を懐古的にした。彼はその不規則な筋を指の先でざらざら撫<sup>な</sup>でて見た。けれども今更鄭寧<sup>ていねい</sup>に絡<sup>から</sup>げたかんじん撚<sup>より</sup>の結び目を解<sup>ほど</sup>いて、一々中を検<sup>あら</sup>ためる気も起らなかった。

「開けて見たって何が出て来るものか」

彼の心はこの一句でよく代表されていた。

「御父さまが後々<sup>のちのち</sup>のためにちゃんと一纏<sup>ひとまと</sup>めにして取<sup>お</sup>つて御置<sup>おき</sup>に

なつたんですって」

「そうか」

健三は自分の父の分別と理解力に対して大した尊敬を払っていなかった。

「おやじの事だからきつと何でもかんでも取って置いたんだらう」

「しかしそれもみんな貴夫に対する御親切からなんでしょう。あんな奴だから己おれのいなくなつた後のちに、どんな事をいつて来ないとも限らない、その時にはこれが役に立つって、わざわざ一纏めにおあにいして、御兄さんに御渡になつたんだそうですよ」

「そうかね、己は知らない」

健三の父は中気で死んだ。その父のまだ達者でいるずっと前から、彼はもう東京にいなかった。彼は親の死目しにめにさえ会わなかった。こんな書付が自分の眼に触れないで、長い間兄の手元に保管されていたのも、別段の不思議ではなかった。

彼は漸ようやく書類の結目を解といて一所に重なっているものを、一々ほごし始めた。手続き書と書いたものや、取り替かわせ一札の事と書いたものや、明治二十一年子ね一月約定金請取やくじようきんうけとりの証と書いた半紙二つ折の帳面やらが順々にあらわれて来た。その帳面のしまいには、右本日受取うけとり右月賦金かいざいあいにりそくづつことは皆済相成候事と島田の手蹟で書いて

黒い判がべたりと捺<sup>お</sup>してあつた。

「おやじは月々三円か四円ずつ取られたんだな」

「あの人ですか」

細君はその帳面を逆さまに覗<sup>のぞ</sup>き込んでいた。

「<sup>しめ</sup>めていくらになるかしら。しかしこの外にまだ一時に遣<sup>や</sup>つたものがあるはずだ。おやじの事だから、きっとその受取を取って置いたに違ない。どこかにあるだろう」

書付はそれからそれへと続々出て来た。けれども、健三の眼にはどれもこれもごちゃごちゃして容易に解らなかった。彼はやがて四つ折にして一纏めに重ねた厚みのあるものを取り上げて中を

開いた。

「小学校の卒業証書まで入れてある」

その小学校の名は時によって変っていた。一番古いものには第一大学区第五中学区第八番小学などという朱印が押してあった。

「何ですかそれは」

「何だか己も忘れてしまった」

「よっぽど古いものね」

証書のうちには賞状も二、三枚交<sup>まじ</sup>っていた。昇<sup>のぼ</sup>り竜と降<sup>くだ</sup>り竜で丸い輪<sup>りん</sup>廓<sup>かく</sup>を取った真中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に断ってあった。



「書物も貰<sup>もら</sup>った事があるんだがな」

彼は『勸善訓蒙<sup>かんぜんくんもう</sup>』だの『輿地誌略<sup>よちしりやく</sup>』だのを抱いて喜びの余り飛んで宅<sup>うち</sup>へ帰った昔を思い出した。御褒美<sup>ごほうび</sup>をもらう前の晩夢に見た蒼<sup>あお</sup>い竜と白い虎の事も思い出した。これらの遠いものが、平生<sup>へいぜい</sup>と違<sup>ちが</sup>って今の健三には甚だ近く見えた。

## 三十二

細君にはこの古臭い免状がなおの事珍<sup>めづ</sup>らしかった。夫<sup>いっさん</sup>の一旦下へ置いたのをまた取り上げて、一枚々々鄭寧<sup>ていねい</sup>に剥<sup>は</sup>繰<sup>ぐ</sup>って見た。

「変ですわね。下等小学第五級だの六級だのつて。そんなものがあつたんでしょうか」

「あつたんだね」

健三はそのまま外の書付ほかに手を着けた。読みにくい彼の父の手蹟が大いに彼を苦しめた。

「これを御覧、とても読む勇氣がないね。ただでさえ判明わからないところへ持つて来て、むやみに朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」

健三の父と島田との懸合かけあいについて必要な下書したがきらしいものが細君の手に渡された。細君は女だけあつて、綿密にそれを読み下くだし

た。

「貴夫あなたの御父さまはあの島田って人の世話をなすった事があるのね」

「そんな話は己おれも聞いてはいるが」

「此所ここに書いてありますよ。——同人幼少つとめむきにて勤向相成りがたく当方とうかたへ引き取り五力年間養育致候縁合そろえんあいを以てと」

細君の読み上げる文章は、まるで旧幕時代の町人が町奉行まちぶぎょうか何かへ出す訴状のように聞こえた。その口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に髣髴ほうふつした。その父から、將軍の鷹たか狩がりに行く時の模様などを、それ相当の敬語で聞かされた昔も思い

合された。しかし事実の興味が主として働らきかけている細君の方ではまるで文体などに頓着とんじやくしなかった。

「その縁故で貴夫はあの人の所へ養子に遣やられたのね。此所にそう書いてありますよ」

健三は因果な自分を自分で憐あわれんだ。平気な細君はその続きを読み出した。

「右健三三歳のみぎり養子に差遣さしつかわし置候処平吉儀妻常おきそこところへいきちぎさいつねと不和を生じ、遂に離別と相成候につき当時八歳の健三を当方へ引き取りこん今日にちまで十四力年間養育致し、——あとは真赤まっかでごちゃごちゃして読めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々に配合して後を読もうと企てた。健三は腕組をして黙って待っていた。細君はやがてくすくす笑い出した。

「何が可笑おかしいんだ」

「だって」

細君は何にもいわずに、書付を夫の方に向け直した。そうして人さし指の頭で、細かく割註わりちゆうのように朱で書いた所を抑えた。

「ちよつと其所そこを読んで御覧なさい」

健三は八の字を寄せながら、その一行を六むずかしそうに読み下した。

「取扱い所勤務中遠山藤と申す後家へ通じ合い候が事の起り。――

――何だ下らない」

「しかし本当なんでしょう」

「本当は本当さ」

「それが貴夫の八ツの時なのね。それから貴夫は御自分の宅へ御  
歸りになった訳ね」

「しかし籍を返さないんだ」

「あの人が？」

細君はまたその書付を取り上げた。読めない所はそのままにし  
て置いて、読める所だけ眼を通して、自分のまだ知らない事実

が出て来るだろうという興味が、少なからず彼女の好奇心を唆<sup>そそ</sup>つた。

書付のしまいの方には、島田が健三の戸籍を元通りにして置いて実家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印<sup>いんぎ</sup>形<sup>よう</sup>を濫用<sup>らんよう</sup>して金を借り散らした例などが挙げてあつた。

いよいよ手を切る時に養育料として島田に渡した金の証文も出て来た。それには、しかる上は健三離縁本籍と引替に当金——円御渡し被下<sup>くだされ</sup>、残金——円は毎月三十日限り月賦にて御差入<sup>おさしいれ</sup>のつもり御対談<sup>うんぬん</sup>云々と長たらしく書いてあつた。

「凡<sup>すべ</sup>て変挺<sup>へんてこ</sup>な文句ばかりだね」

「親類取扱人比田寅八<sup>ひだとらはち</sup>つて下に印が押してあるから、大方比田さんでも書いたんでしよう」

健三はついこの間会った比田の万事に心得顔な様子と、この証文の文句とを引き比べて見た。

### 三十三

葬式の帰りに寄るかも知れないといった兄は遂に顔を見せなかった。

「あんまり遅くなったから、すぐ御帰りになったんでしよう」



健三にはその方が便宜であつた。彼の仕事は前の日か前の晩を潰<sup>つぶ</sup>して調べたり考えたりしなければ義務を果す事の出来ない性質のものであつた。従つて必要な時間を他<sup>ひと</sup>に食い削られるのは、彼に取つて甚しい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏<sup>ひとまと</sup>めにして、元のかんじん撚<sup>より</sup>で括<sup>くく</sup>ろうとした。彼が指先に力を入れた時、そのかんじん撚はぷつりと切れた。

「あんまり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

「だつて書付の方は虫が食つてる位ですもの、貴<sup>あなた</sup>夫」

「そういえばそうかも知れない。何しろ抽斗ひきだしに投げ込んだなり、今日まで放はなつて置いたんだから。しかし兄貴も能よくまあこんなものを取とつて置いたものだね。困こつちや何でも売うるくせに」

細君は健三の顔を見て笑い出した。

「誰も買かい手がないでしょう。そんな虫の食くつた紙なんか」

「だがさ。能よく紙屑籠かみくずかごの中へ入れてしまわなかったという事さ」

細君は赤と白で撚ひつた細い糸を火鉢ひばちの抽斗から出して来て、其そ

所こに置かれた書類を新らしく絡からげた上、それを夫に渡した。

「己おれの方にやしまつて置く所がないよ」

彼の周囲は書物で一杯になっていた。手文庫には文殼ふみがらとノート

がぎっしり詰っていた。空地のあるのは夜具蒲団のしまつてある一間の戸棚だけであつた。細君は苦笑して立ち上つた。

「御兄さんは二、三日うちきつとまたいらっしゃいますよ」

「あの事でかい」

「それもそうですけれども、今日御葬式にいらっしゃる時に、袴が要るから借してくれって、此所で穿いていらしたんですもの。きつとまた返しにいらっしゃるに極つていますわ」

健三は自分の袴を借りなければ葬式の供に立てない兄の境遇を、ちよつと考えさせられた。始めて学校を卒業した時彼はその兄から貰ったべろべろの薄羽織を着て友達と一所に池の端で写真

を撮った事をまだ覚えていた。その友達いちにんの一人が健三に向つて、この中で一番先に馬車へ乗るものは誰たれだろうといった時に、彼は返事をしないで、ただ自分の着ている羽織を淋さびしそうに眺めた。その羽織は古い紹ろの紋付に違なかつたが、悪くいえば申し訳のために破けずにいる位な見すばらしい程度のものであつた。懇意な友人の新婚披露ひろうに招かれて星ほしが岡おかの茶寮さりように行った時も、着るものがないので、袴羽織とも凡すべて兄のを借りて間に合せた事もあつた。

彼は細君の知らないこんな記憶を頭の中に呼び起した。しかしそれは今の彼を得意にするよりもかえって悲しくした。今昔こんじやくの感

———そういう在来ありきたりの言葉で一番よく現せる情緒が自然と彼の胸に湧わいた。

「袴位ありそうなものだがね」

「みんな長い間に失くして御しまいなすったんでしよう」

「困るなあ」

「どうせ宅うちにあるんだから、要る時に貸して上げさいすりやそれで好いいでしょう。毎日使うものじゃなし」

「宅にある間はそれで好いいがね」

細君は夫に内所ないしよで自分の着物を質に入れたついこの間の事件を思い出した。夫には何時自分が兄と同じ境遇に陥らないものでも

ないという悲觀的な哲学があつた。

昔の彼は貧しいながら一人で世の中に立っていた。今の彼は切り詰めた余裕のない生活をしている上に、周囲のものからは、活力の心棒のように思われていた。それが彼には辛かった。自分のようなものが親類中で一番好くなっていると考えられるのはなおさら情ななさけかつた。

## 三十四

健三の兄は小役人であつた。彼は東京の真中にある或ある大きな局

へ勤めていた。その宏壯こうそうな建物のなかに永い間憐あわれな自分の姿を見出す事が、彼には一種の不調和に見えた。

「僕なんぞはもう老朽なんだからね。何しろ若くって役に立つ人が後から後からと出て来るんだから」

その建物のなかには何百という人間が日となく夜よとなく烈はげしく働らいていた。気力の尽きかけた彼の存在はまるで形のない影のようなものに違なかつた。

「ああ厭いやだ」

活動を好まない彼の頭には常にこんな観念が潜んでいた。彼は病身であつた。年齒としより早く老けた。年齒より早く干乾ひからびた。そ

うして色沢いろつやの悪い顔をしながら、死ににでも行く人のように働いた。

「何しろ夜寐ねないんだから、身体からだに障さってね」

彼はよく風邪かぜを引いて咳嗽せきをした。ある時は熱も出た。するとその熱が必ず肺病の前兆でなければならぬように彼を脅かした。

実際彼の職業は強壯な青年にとっても苦しい性質のものに違なかつた。彼は隔晩に局へ泊らせられた。そうして夜通し起きて働らかなければならなかつた。翌日あくるひの朝彼はぼんやりして自分の宅うちへ歸つて来た。その日一日は何をする勇氣もなく、ただぐたりと



寐て暮らす事さえあつた。

それでも彼は自分のためまた家族のために働らくべく余儀なくされた。

「今度は少し危険あぶないようだから、誰かに頼んでくれないか」

改革とか整理とかいう噂うわさのあるたびに、健三はよくこんな言葉を彼の口から聞かされた。東京を離れている時などは、わざわざ手紙で依頼して来た事も一返や二返ではなかった。彼はその都度つど誰それにといつて、わざわざ要路の人を指名した。しかし健三にはただ名前が知れているだけで、自分の兄の位置を保証してもらうほどの親しみのあるものは一人もなかった。健三は頼杖ほおづえを突い

て考えさせられるばかりであった。

彼はこうした不安を何度となく繰り返しながら、昔こしから今日こんにちまで同じ職務に従事して、動きもしなければ発展もしなかった。

健三よりも七つばかり年上な彼の半生は、あたかも変化を許さない器械しやうのようなもので、次第に消耗しょうりやうして行くより外には何の事実も認められなかった。

「二十四、五年もあんな事をしている間には何か出来そうなものだがね」

健三は時々自分の兄をこんな言葉で評したくなった。その兄の派出はでずき好で勉強嫌きんぎうであった昔も眼の前に見えるようであった。三味しやみ

線<sup>せん</sup>を弾<sup>ひ</sup>いたり、一絃<sup>いちげん</sup>琴<sup>きん</sup>を習<sup>し</sup>ったり、白玉<sup>しらたま</sup>を丸<sup>まる</sup>めて鍋<sup>なべ</sup>の中<sup>な</sup>へ放<sup>はな</sup>り込<sup>こ</sup>んだり、寒<sup>かん</sup>天<sup>てん</sup>を煮<sup>に</sup>て切溜<sup>きりだめ</sup>で冷<sup>ひや</sup>したり、凡<sup>すべ</sup>ての時<sup>とき</sup>間<sup>かん</sup>はそ<sup>の</sup>頃<sup>ころ</sup>の彼<sup>かれ</sup>に取<sup>と</sup>つて食<sup>く</sup>う事<sup>こと</sup>と遊<sup>あそ</sup>ぶ事<sup>こと</sup>ばかりに費<sup>つ</sup>やされていた。

「みんな自<sup>じ</sup>業<sup>ぎやう</sup>自得<sup>じとく</sup>だといえ<sup>ば</sup>、まあそんなものさね」

これが今<sup>いま</sup>の彼<sup>かれ</sup>の折々<sup>ひと</sup>他<sup>た</sup>に洩<sup>もら</sup>す述<sup>じゆ</sup>懐<sup>かい</sup>になる位<sup>くらい</sup>彼<sup>かれ</sup>は怠<sup>たい</sup>け者<sup>もの</sup>であつた。

兄<sup>あに</sup>弟<sup>てい</sup>が死<sup>し</sup>に絶<sup>こと</sup>えた後<sup>あと</sup>、自然<sup>しぜん</sup>健<sup>けん</sup>三<sup>さん</sup>の生<sup>なま</sup>家<sup>か</sup>の跡<sup>あと</sup>を襲<sup>襲</sup>ぐようになつた。彼は、父<sup>ちち</sup>が亡<sup>な</sup>くなるのを待<sup>まち</sup>つて、家<sup>いへ</sup>屋<sup>や</sup>敷<sup>しき</sup>をす<sup>す</sup>ぐ売<sup>う</sup>り払<sup>はら</sup>つてしまつた。それで元<sup>もと</sup>からある借<sup>か</sup>金<sup>きん</sup>を済<sup>な</sup>して、自<sup>みづか</sup>分<sup>ぶん</sup>は小<sup>こ</sup>さな宅<sup>うち</sup>へ這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つた。それから其<sup>そこ</sup>所<sup>こ</sup>に納<sup>な</sup>まり切<sup>き</sup>らない道<sup>みち</sup>具<sup>ぐ</sup>類<sup>るい</sup>を売<sup>う</sup>払<sup>はら</sup>つた。

間もなく彼は三人の子の父になった。そのうちで彼の最も可愛がっていた惣領の娘が、年頃になる少し前から悪性の肺結核に罹ったので、彼はその娘を救うために、あらゆる手段を講じた。しかし彼のなし得る凡ては残酷な運命に対して全くの徒勞に歸した。二年越煩った後で彼女が遂に斃れた時、彼の家の筆笥はまるで空になっていた。儀式に要る袴は無論、ちよつとした紋付の羽織さえなかった。彼は健三の外国で着古した洋服を貰って、それを大事に着て毎日局へ出勤した。

二、三日経って健三の兄は果して細君の予想通り袴はかまを返しに来た。

「どうも遅くなって御気の毒さま。有難う」

彼は腰板の上に双方の端はじを折返して小さく畳んだ袴を、風呂敷の中から出して細君の前に置いた。大の見栄坊みえぼうで、ちよつとした包物を持つのも厭いやがった昔に比べると、今の兄は全く色気が抜けていた。その代り膏氣あぶらつきもなかった。彼はばさばさした手で、汚れた風呂敷の隅つまを抓つかんで、それを鄭寧ていねいに折った。

「こりゃ好い袴だね。近頃拵うちつけえたの」

「いいえ。なかなかそんな勇氣はありません。昔からあるんで

す」

細君は結婚のときこの袴を着けて勿体<sup>もったい</sup>らしく坐<sup>すわ</sup>った夫の姿を思  
いだした。遠い所で極簡略<sup>ごく</sup>に行われたその結婚の式に兄は列席し  
ていなかった。

「へええ。そうかね。なるほどそういわれるとどこかで見たよう  
な気もするが、しかし昔のものはやっぱり丈夫なんだね。ちつと  
も敗<sup>いた</sup>んでいないじゃないか」

「滅多に穿<sup>は</sup>かないんですもの。それでも一人でいるうちに能<sup>よ</sup>くそ  
んな物を買う気になれたのね、あの人が。私<sup>わたくし</sup>今でも不思議だと思  
いますわ」

「あるいは婚礼の時に穿くつもりでわざわざ拵えたのかも知れないね」

二人はその時の異様な結婚式について笑いながら話し合った。

東京からわざわざ彼女を伴<sup>つ</sup>れて来た細君の父は、娘に振袖<sup>ふりそで</sup>を着せながら、自分は一通りの礼装さえ調<sup>ととの</sup>えていなかった。セルの単<sup>ひと</sup>衣<sup>え</sup>を着流しのままでしまいには胡坐<sup>あぐら</sup>さえ掻<sup>か</sup>いた。婆<sup>ばあ</sup>さん一人より外に誰も相談する相手のない健三の方ではなおの事困った。彼は結婚の儀式について全くの無方針であつた。もともと東京へ帰つてから貰<sup>もら</sup>うという約束があつたので、媒<sup>な</sup>酌<sup>こ</sup>人もその地にはいなかった。健三は参考のためこの媒酌人が書いて送ってくれた注意<sup>ちゅうい</sup>

書しよのようなものを読んで見た。それは立派な紙に楷書かいしよで認めしたたられたいか、いかめしいものには違ちがなかつたが、中には『東鑑あづまかみ』などが例に引いてあるだけで、何の實用にも立たなかつた。

「雌蝶めちようも雄蝶おちようもあつたもんじやないのよ貴方あなた。だいち御盃おさかずきの縁が欠けているんですもの」

「それで三々九度を遣やつたのかね」

「ええ。だから夫婦中ふうふなかがこんなにがたぴしするんでしょう」

兄は苦笑した。

「健三もなかなかの氣六きむずかしやだから、御住おすみさんも骨が折れるだろう」



細君はただ笑っていた。別段兄の言葉に取り合う気色けしきも見えなかった。

「もう帰りそうなものですがね」

「今日は待つてて例の事件を話して行かなくっちゃあ、……」

兄はまだその後をいおうとした。細君はふいと立って茶の間へ時計を見に這入はいった。其所そこから出て来た時、彼女はこの間の書類を手にしていた。

「これが要いるんでしょう」

「いえそれはただ参考までに持って来たんだから、多分要るまい。もう健三に見せてくれたんでしょう」

「ええ見せました」

「何とってたかね」

細君は何とも答えようがなかった。

「随分沢山色々な書付が這入っていますわね。この中には」

「御父さんが、今に何か事があるといけないうて、丹念に取って置いたんだから」

細君は夫から頼まれてその中の最も大切らしい一部分を彼のために代読した事はいわなかった。兄もそれぎり書類について語らなくなった。二人は健三の帰るまでの時間をただの雑談に費やした。その健三は約三十分ほどして帰って来た。

## 三十六

彼が何時<sup>い</sup>ももの通り服装を改めて座敷へ出た時、赤と白と撚<sup>よ</sup>り合せた細い糸で括<sup>く</sup>られた例の書類は兄の膝の上にあつた。

「先達<sup>せん</sup>では」

兄は油気の抜けた指先で、一度解きかけた糸の結び目を元の通りに締めた。

「今ちよつと見たらこの中には君に不必要なものが紛れ込んでいるね」

「そうですか」

この大事そうにしまい込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。兄はまた自分の弟がそれほど熱心にそれを調べていない事に気が付いた。

「御由およしの送籍願が這入つてゐるんだよ」

御由というのは兄の妻さいの名であつた。彼がその人と結婚する當時に必要であつた区長宛の願書が其所そこから出て来きようとは、二人とも思いがけなかつた。

兄は最初の妻さいを離別した。次の妻に死なれた。その二度目の妻が病氣の時、彼は大きく心配の様子もなく能く出歩よいた。病症が悪阻つわりだから大丈夫という安心もあるらしく見えたが、容体ようたいが陰悪

になつて後も、彼は依然としてその態度を改める様子がなかつたので、人はそれを氣に入らない妻つまに対する仕打とも解釈した。健三もあるいはそうだろうと思つた。

三度目の妻さいを迎える時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。しかし弟には一言いちごんの相談もしなかつた。それがため我がの強い健三の、兄に対する不平が、罪もない義姉あねの方にまで影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭いやだと主張して、氣の弱い兄を苦しめた。

「なんて捌さばけない人だろう」

陰で批評の口にするこうした言葉は、彼を反省させるよりもか

えって頑固かたくなにした。コンヴェンション習俗を重んずるために学問をしたような悪い結果に陥って自ら知らなかった彼には、とかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊へいがあつた。彼は慚愧ざんきの眼をもつて当時の自分を回顧した。

「送籍願が紛れ込んでいるなら、それを御返しするから、持って行ったら好いいでしょう」

「いいえ写しだから、僕も要らないんだ」

兄は紅白の糸に手も触れなかった。健三はふとその日附が知りたくなつた。

「一体何時頃でしたかね。それを区役所へ出したのは」

「もう古い事さ」

兄はこれだけいったぎりであつた。その唇には微笑の影が差した。最初も二返目も失敗しくじつて、最後にやっと自分の氣に入つた女と一所になつた昔を忘れるほど、彼は耄碌もろろくしていなかつた。同時にそれを口へ出すほど若くもなかつた。

「御幾年おいくつでしたかね」と細君が訊きいた。

「御由おすみですか。御由は御住さんと一つ違ですよ」

「まだ御若いのね」

兄はそれには何とも答えずに、先刻から膝ひざの上に置いた書類の帯を急に解き始めた。

「まだこんなものが這入<sup>はい</sup>っていたよ。これも君にや関係のないものだ。さつき見て僕もちよいと驚ろいたが、こら」

彼はごたごたした故紙の中から、何の雑作もなく一枚の書付を取り出した。それは喜代子<sup>きよこ</sup>という彼の長女の出産届の下書であつた。「右者<sup>みぎは</sup>本月二十三日午前十一時五十分出生致<sup>しめ</sup>し候<sup>そう</sup>」という文句の、「本月二十三日」だけに棒が引懸けて消してある上に、虫の食った不規則な線が筋違<sup>すじかい</sup>に入っていた。

「これも御父<sup>おとつ</sup>さんの手蹟<sup>て</sup>だ。ねえ」

彼はその一枚の反故<sup>ほご</sup>を大事らしく健三の方へ向け直して見せた。



「御覧、虫が食ってるよ。尤<sup>もつと</sup>もそのはずだね。出産届ばかりじゃない、もう死亡届まで出ているんだから」

結核で死んだその子の生年月を、兄は口のうちに静かに読んでいた。

## 三十七

兄は過去の人であった。華美<sup>はなやか</sup>な前途はもう彼の前に横<sup>よこた</sup>わっていなかった。何かに付けて後<sup>うしろ</sup>を振り返りがちな彼と対坐<sup>たいざ</sup>している健三は、自分の進んで行くべき生活の方向から逆に引き戻されるよ

うな気がした。

「淋<sup>さむ</sup>しいな」

健三は兄の道伴<sup>みちづれ</sup>になるには余りに未来の希望を多く持ち過ぎた。そのくせ現在の彼もかなりに淋<sup>さむ</sup>しいものに違<sup>ちが</sup>なかつた。その現在から順に推した未来の、当然淋<sup>さむ</sup>しかるべき事も彼にはよく解<sup>と</sup>っていた。

兄はこの間の相談通り島田の要求を断<sup>ことわ</sup>った旨<sup>さし</sup>を健三に話した。しかしどんな手続きでそれを断<sup>ことわ</sup>ったのか、また先方がそれに対してどんな挨拶<sup>あいさつ</sup>をしたのか、そういう細かい点になると、全く要領を得た返事をしなかつた。

「何しろ比田<sup>ひだ</sup>からそういつて来たんだから慥<sup>たしか</sup>だろう」

その比田が島田に会いに行つて話を付けたとも、または手紙で会見の始末を知らせて遣<sup>や</sup>つたとも、健三には判明<sup>わか</sup>らなかった。

「多分行つたんだろうと思うがね。それともあの人の事だから、手紙だけで済ましてしまつたのか。其所<sup>そこ</sup>はつい聴いて来るのを忘れたよ。尤<sup>もつと</sup>もあの後一返姉<sup>べん</sup>さんの見舞かたが行つた時にや、比田が相變らず留守だつたので、つい会う事が出来なかつたのさ。しかしその時姉さんの話じゃ、何でも忙がしいんで、まだそのまゝにしてあるようだっていつてたがね。あの男も随分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」

健三の知っている比田も無責任の男に相違なかった。その代り頼むと何でも引き受ける性質たちであつた。ただ他ひとから頭を下げて頼まれるのが嬉うれしくつて物を受合いたがる彼は、頼み方が気に入らないと容易に動かなかつた。

「しかしこんだの事なんざあ、島田がじかに比田の所へ持ち込んだんだからねえ」

兄は暗あんに比田自身が先方へ出向いて話し合を付けなければ義理の悪いような事をいった。そのくせ彼はこんな場合に決して自分で懸合事かけあいごとなどに出掛ける人ではなかった。少し気を遣つかわなければならぬ面倒が起ると必ず顔を背けた。そうして事情の許す限り

凝<sup>じっ</sup>と辛<sup>しん</sup>防<sup>ぼう</sup>して独り苦しんだ。健三にはこの矛盾が腹立たしくも可笑<sup>お</sup>しくもない代りに何となく気の毒に見えた。

「自分も兄弟だから他<sup>ひと</sup>から見たらどこか似ているのかも知れない」

こう思うと、兄を気の毒がるのは、つまり自分を気の毒がると同じ事にもなった。

「姉さんはもう好<sup>い</sup>いんですか」

問題を変えた彼は、姉の病気について経過を訊<sup>たず</sup>ねた。

「ああ。どうも喘息<sup>ぜんそく</sup>ってものは不思議だねえ。あんなに苦しんでいても直癒<sup>じきなお</sup>るんだから」

「もう話が出来ますか」

「出来るどころか、なかなか能く喋舌しゃべってね。例の調子で。――姉さんの考じゃ、島田は御縫おぬいさんの所へ行つて、智慧ちえを付けられて来たんだろうっていうんだがね」

「まさか。それよりあの男だからあんな非常識な事をいつて来るのだと解釈する方が適当でしょう」

「そう」

兄は考えていた。健三は馬鹿らしいという顔付をした。

「でなければね。きつと年を取って皆なから邪魔にされるんだろうって」

健三はまだ黙っていた。

「何しろ淋<sup>さむ</sup>しいには違いないだね。それもあいつの事だから、人情で淋しいんじゃない、慾<sup>よく</sup>で淋しいんだ」

兄はお縫さんの所から毎月彼女の母の方へ手宛<sup>てあて</sup>が届く事をどうしてか知っていた。

「何でも金鵒<sup>きんしゅく</sup>勲章の年金が何かを御藤<sup>おふじ</sup>さんが貰<sup>もら</sup>ってるんだとさ。だから島田もどこからか貰わなくっちゃ淋しくって堪らなくなつたんだろうよ。何しろあの位慾張<sup>よくば</sup>ってるんだから」

健三は慾で淋しがってる人に対して大した同情も起し得なかった。

## 三十八

事件のない日がまた少し続いた。事件のない日は、彼に取って沈黙の日に過ぎなかった。

彼はその間に時々己<sup>おの</sup>れの追憶を辿<sup>たど</sup>るべく余儀なくされた。自分の兄を気の毒がりつつも、彼は何時の間にか、その兄と同じく過去の人となった。

彼は自分の生命を両断しようとした。すると綺麗<sup>きれ</sup>に切り棄<sup>す</sup>てられべきはずの過去が、かえって自分を追掛<sup>おっか</sup>けて来た。彼の眼は行手を望んだ。しかし彼の足は後<sup>あと</sup>へ歩きがちであった。



そうしてその行き詰りには、大きな四角な家が建っていた。家には幅の広い階子段はしごだんのついた二階があつた。その二階の上も下も、健三の眼には同じように見えた。廊下で囲まれた中庭もまた真四角まっしかくであつた。

不思議な事に、その広い宅うちには人が誰も住んでいなかった。それを淋さみしいとも思わずにいられるほどの幼ない彼には、まだ家と  
いうものの経験と理解が欠けていた。

彼はいくつとなく続いている部屋だの、遠くまで真直まっすぐに見える廊下だのを、あたかも天井の付いた町のように考えた。そうして人の通らない往来を一人で歩く気でそこいら中馳かけ廻つた。

彼は時々表二階へ上つて、細い格子の間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛を掛けたりした馬が何匹も続いて彼の眼の前を過ぎた。路を隔てた真ん向うには大きな唐金の仏様があつた。その仏様は胡坐をかいて蓮台の上に坐つていた。太い錫杖を担いでいた、それから頭に笠を被つていた。

健三は時々薄暗い土間へ下りて、其所からすぐ向側の石段を下りるために、馬の通る往来を横切つた。彼はこうしてよく仏様へ攀じ上つた。着物の襷へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まったりして、後から肩に手が届くか、または笠に自分の頭が触れると、その先はもうどうする事も出来ずにまた下りて来た。

彼はまたこの四角な家と唐金の仏様の近所にある赤い門の家を覚えていた。赤い門の家は狭い往来から細い小路こうじを二十間も折れ曲はつて這入はいった突き当りにあつた。その奥は一面の高藪たかやぶで蔽おおわれていた。

この狭い往来を突き当って左へ曲ると長い下り坂があつた。健三の記憶の中に出てくるその坂は、不規則な石段で下から上まで畳み上げられていた。古くなつて石の位置が動いたためか、段の方々には凸凹でこぼこがあつた。石と石の罅隙すきまからは青草が風に靡なびいた。それでも其所は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿ぞうりばきのままで、何度かその高い石段を上のぼつたり下さがつたりした。

坂を下り尽すとまた坂があつて、小高い行手に杉の木立が蒼黒く見えた。丁度その坂と坂の間の、谷になつた窪地の左側に、また一軒の萱葺があつた。家は表から引込んでゐる上に、少し右側の方へ片寄つていたが、往来に面した一部分には掛茶屋のような雑な構が拵えられて、常には二、三脚の床几さえ体よく据えてあつた。

葭簀の隙から覗くと、奥には石で囲んだ池が見えた。その池の上には藤棚が釣つてあつた。水の上に差し出された両端を支える二本の棚柱は池の中に埋まっていた。周囲には躑躅が多かつた。中には緋鯉の影があちこちと動いた。濁った水の底を幻影のよう

に赤くするその魚を健三は是非捕りたいと思った。

或日彼は誰も宅にいない時を見計<sup>みはから</sup>つて、不細工な布袋竹<sup>ほていちく</sup>の先へ

一枚糸を着けて、餌<sup>えさ</sup>と共に池の中に投げ込んだら、すぐ糸を引く

気味の悪いものに脅かされた。彼を水の底に引っ張り込まなければ

ばやまないその強い力が二の腕まで伝った時、彼は恐ろしくなっ

て、すぐ竿<sup>さお</sup>を放り出した。そうして翌日<sup>あくるひ</sup>静かに水面に浮いている

一尺余<sup>しゃく</sup>りの緋鯉を見出した。彼は独り怖<sup>おそ</sup>がった。……

「自分はその時分誰と共に住んでいたのだろう」

彼には何らの記憶もなかった。彼の頭はまるで白紙のようなものであった。けれども理解力の索引に訴えて考えれば、どうしても

も島田夫婦と共に暮したといわなければならなかった。

## 三十九

それから舞台が急に変わった。淋<sup>さみ</sup>しい田舎<sup>いなか</sup>が突然彼の記憶から消えた。

すると表に櫺子<sup>れんじまど</sup>窓の付いた小さな宅<sup>うち</sup>が朧<sup>おぼろげ</sup>気に彼の前にあらわれた。門のないその宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。そうして右にも左にも折れ曲っていた。

彼の記憶がぼんやりしているように、彼の家も始終薄暗かつ

た。彼は日光とその家とを連想する事が出来なかった。

彼は其所で疱瘡をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、本  
疱瘡を誘い出したのだとかいう話であつた。彼は暗い櫛子のうち  
で転げ廻つた。惣身の肉を所嫌わず掻き撈つて泣き叫んだ。

彼はまた偶然広い建物の中に幼い自分を見出した。区切られて  
いるようで続いている仕切のうちには人がちらほらいた。空いた  
場所の畳だか薄縁だかが、黄色く光つて、あたりを伽藍堂の如く  
淋しく見せた。彼は高い所にいた。其所で弁当を食つた。そうし  
て油揚げの胴を干瓢で結えた稻荷鮎の恰好に似たものを、上から下  
へ落した。彼は勾欄につらまつて何度も下を覗いて見た。しかし

誰もそれを取ってくれるものはなかった。伴の大人はみんな正面に気を取られていた。正面ではぐらぐらと柱が揺れて大きな宅が潰れた。するとその潰れた屋根の間から、髭を生やした軍人が威張って出て来た。――その頃の健三はまだ芝居というものの観念を有っていなかったのである。

彼の頭にはこの芝居と外れ鷹とが何の意味なしに結び付けられていた。突然鷹が向うに見える青い竹藪の方へ筋違に飛んで行つた時、誰だか彼の傍にいるものが、「外れた外れた」と叫んだ。すると誰だかまた手を叩いてその鷹を呼び返そうとした。――健三の記憶は此所でふつりと切れていた。芝居と鷹とどっちを



先に見たのか、それさえ彼には不分明であつた。従つて彼が田圃や藪ばかり見える田舎に住んでいたのと、狭苦しい町内の往来に向いた薄暗い宅に住んでいたのと、どっちが先になるのか、それも彼にはよく判明らなかった。そうしてその時代の彼の記憶には、殆んど人というものの影が働らいていなかった。

しかし島田夫婦が彼の父母として明瞭に彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であつた。

その時夫婦は変な宅にいた。門口から右へ折れると、他の塀際に伝いに石段を三つほど上らなければならなかった。そこからは幅三尺ばかりの露地で、抜けると広くて賑やかな通りへ出た。左は

廊下を曲つて、今度は反対に二、三段下りる順になつていた。すると其所に長方形の広間があつた。広間に沿うた土間<sup>どま</sup>も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。その上を白帆<sup>しらほ</sup>を懸けた船が何艘<sup>なんぞう</sup>となく往<sup>い</sup>つたり来たりした。河岸<sup>かし</sup>には柵<sup>さく</sup>を結<sup>い</sup>つた中へ薪<sup>まき</sup>が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地<sup>あきち</sup>は、だらだら下<sup>さが</sup>りに水際まで続いた。石垣の隙間からは弁慶蟹<sup>べんけいがに</sup>がよく鋏<sup>はさみ</sup>を出した。

島田の家はこの細長い屋敷を三つに区切つたものの真中にあつた。もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の広間がその店になつていたらしく思われるけれども、その持主の何者で

あつたか、またどうして彼が其所を立ち退いたものか、それらは凡て健三の知識の外に横わる秘密であつた。

一頃その広い部屋をある西洋人が借りて英語を教えた事があつた。まだ西洋人を異人という昔の時代だったので、島田の妻の御常は、化物と同居でもしているように気味を悪がった。尤もこの西洋人は上靴を穿いて、島田の借りている部屋の縁側までのそのそ歩いてくる癖を有っていた。御常が癩の気味だとかいって蒼い顔をして寐ていると、其所の縁側へ立って座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、またはただ手真似だけか、健三にはまるで解っていないかつた。

## 四十

西洋人は何時の間にか去ってしまった。小さい健三がふと心付いて見ると、その広い室は既に扱所あつかいじよというものに変っていた。

扱所というのは今の区役所のようなものだった。みんなが低い机を一行に並べて事務を執っていた。テーブルや椅子いすが今日こんにちのように広く用いられない時分の事だったので、畳の上に長く坐すわるのが、それほどの不便でもなかったのだろう、呼び出されるものも、また自分から遣やって来るものも、悉く自分の下駄げたを土間どまへ脱ぎ捨てて掛り掛りの机の前へ畏かしこまった。

島田はこの扱所の頭かしらであつた。従つて彼の席は入口からずっと遠い一番奥の突当りつきあたに設けられた。其所そこから直角に折れ曲つて、河の見える櫺子窓れんじまどの際までに、人の数が何人いたか、机の数が幾脚あつたか、健三の記憶は慥たしかにそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居すまいと扱所とは、もとより細長い一つ家いえを仕切つたまでの事なので、彼は出勤しゅっきんといわず退出たいしゅつといわず、少なからぬ便宜を有もつていた。彼には天氣の好よい時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す臆劫おっくうを省く事が出来た。彼は自宅から縁側伝いで勤めに出た。そうして同じ縁側を歩いて宅うちへ歸つた。

こういう関係が、小さい健三を少なからず大胆にした。彼は

時々公けの場所へ顔を出して、みんなから相手にされた。彼は好い気になって、書記の硯箱すずりはこの中にある朱墨しゅすみを弄いじったり、小刀さやの鞘さやを払って見たり、他に蒼蠅ひと　うるさがられるような悪戯いたずらを続けざまにした。島田はまた出来る限りの専横をもって、この小暴君の態度を是認した。

島田は吝嗇りんしよくな男であつた。妻さいの御常は島田よりもなお吝嗇であつた。

「爪つめに火を点ともすつてえのは、あの事だね」

彼が実家に帰つてから後のち、こんな評が時々彼の耳に入いつた。しかし当時の彼は、御常が長火鉢ながひばちの傍そばへ坐つて、下女げじよに味噌汁おつけをよ

そつて遣るのを何の気もなく眺めていた。

「それじゃ何ぼ何でも下女が可哀かわいそうだ」

彼の実家のものは苦笑した。

御常はまた飯櫃おはちや御菜おかずの這入はいっている戸棚に、いつでも錠を卸お

ろした。たまに実家の父が訪ねて来ると、きつと蕎麦そばを取り寄せ

て食わせた。その時は彼女も健三も同じものを食った。その代り

飯時が来ても決して何時ものように膳ぜんを出さなかった。それを当

然のように思っていた健三は、実家へ引き取られてから、間食の

上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚ろいた。

しかし健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議な位寛

大であつた。外へ出る時は黄八丈きはちじょうの羽織はおりを着せたり、縮緬ちりめんの着物を  
買うために、わざわざ越後屋えちごやまで引つ張って行ったりした。そ  
の越後屋の店へ腰を掛けて、柄を扨より分けている間に、夕暮の時  
間が逼せまつたので、大勢の小僧が広い間口の雨戸を、両側から一度  
に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな声を揚げて泣  
き出した事もあつた。

彼の望む玩具おもちゃは無論彼の自由になつた。その中には写し絵の道  
具も交まじっていた。彼はよく紙を継ぎ合わせた幕の上に、三番叟さんぱそうの  
影を映して、烏帽子えぼし姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜  
こんだ。彼は新らしい独楽こまを買ってもらつて、時代を着けるため



に、それを河岸際かしぎわの泥溝どぶの中に浸けた。ところがその泥溝は薪積まきつ場の柵みばと柵さくとの間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は独楽の失くなるのが心配さに、日に何遍となく扱所の土間を抜けて行つて、何遍となくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹かにの穴を棒で突ツついた。それから逃げ損なつたものの甲を抑えて、いくつも生捕りいけどにして袂たもとへ入れた。……

要するに彼はこの吝嗇もちな島田夫婦に、よそから貰い受けた一人っ子として、異数の取扱いを受けていたのである。

しかし夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜んでいた。

彼らが長火鉢ながひばちの前で差向いに坐り合う夜寒よさむの宵などには、健三によくこんな質問を掛けた。

「御前の御父おとつさんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指ゆびさした。

「じゃ御前の御母おつかさんは」

健三はまた御常の顔を見て彼女を指さした。

これで自分たちの要求を一応満足させると、今度は同じような事を外の形で訊きいた。

「じゃ御前の本当の御父さんと御母さんは」

健三は厭々いやいやながら同じ答を繰り返すより外に仕方がなかった。

しかしそれが何故なぜだか彼らを喜ばした。彼らは顔を見合せて笑った。

或時はこんな光景が殆んど毎日のように三人の間に起った。或時は単にこれだけの問答では済まなかった。ことに御常は執濃しつこかった。

「御前はどこで生れたの」

こう聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門――高藪たかやぶで蔽おおわれた小さな赤い門の家うちを挙げて答えなければならな

かった。御常は何時この質問を掛けても、健三が差支なく同じ返事の出来るように、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であつた。けれども彼女はそんな事には一向頓着しなかつた。

「健坊、御前本当は誰の子なの、隠さずにそう御いい」

彼は苦しめられるような心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向うの聞きたがる返事を与えずに、わざと黙っていたくなつた。

「御前誰が一番好きだい。御父ッさん？ 御母さん？」

健三は彼女の意を迎えるために、向うの望むような返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のまま棒のように立ッてい

た。それをただ年齒としはの行かないためとのみ解釈した御常の觀察は、むしろ簡単に過ぎた。彼は心のうちで彼女のこうした態度を忌み悪にくんだのである。

夫婦は全力を尽して健三を彼らの専有物にしようと力つとめた。また事実上健三は彼らの専有物に相違なかった。従って彼らから大事にされるのは、つまり彼らのために彼の自由を奪われるのと同じ結果に陥った。彼には既に身体からだの束縛があつた。しかしそれよりもなお恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影響を投げた。

夫婦は何かに付けて彼らの恩恵を健三に意識させようとした。

それで或時は「御父ッさんが」という声を大きくした。或時はまた「御母さんが」という言葉に力を入れた。御父ッさんと御母さんを離れたただの菓子を食べたり、ただの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられていた。

自分たちの親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込たたもうとする彼らの努力は、かえって反対の結果をその子供の上に引き起した。健三は蒼蠅うるさがった。

「なんでそんなに世話を焼くのだろう」

「御父ッさんが」とか「御母さんが」とかが出るたびに、健三は己おのれ独りの自由を欲しがった。自分の買ってもらおう玩具おもちゃを喜んだ

り、錦絵にしきえを飽かず眺めたりする彼は、かえってそれらを買ってく  
れる人を嬉うれしがらなくなった。少なくとも両ふたつのものを綺麗きれに切  
り離して、純粹な楽みに耽ふけりたかった。

夫婦は健三を可愛かあいがっていた。けれどもその愛情のうちには変  
な報酬が予期されていた。金の力で美しい女を囲いっている人  
が、その女の好きなものを、いうがままに買ってくれるのと同じ  
ように、彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動  
する事が出来ずに、ただ健三の歡心を得うるために親切を見せなけ  
ればならなかった。そうして彼らは自然のために彼らの不純を罰  
せられた。しかも自みづから知らなかった。

## 四十二

同時に健三の氣質も損われた。順良な彼の天性は次第に表面から落ち込んで行つた。そうしてその陷欠を補うものは強情の二字に外ならなかつた。

彼の我儘<sup>わがまま</sup>には日増<sup>ひまし</sup>に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往来でも道端でも構わずに、すぐ其所<sup>そこ</sup>へ坐<sup>すわ</sup>り込んで動かなかつた。ある時は小僧の脊中<sup>せなか</sup>から彼の髪の毛を力に任せて撈<sup>むし</sup>り取つた。ある時は神社に放し飼<sup>はと</sup>の鳩をどうしても宅<sup>うち</sup>へ持つて歸るのだと主張してやまなかつた。養父母の寵<sup>ちやう</sup>を欲しいままに専有し



得る狭い世界の中に起きたり寐たりする事より外に何にも知らない彼には、凡ての他人が、ただ自分の命令を聞くために生きているように見えた。彼はいえば通るとばかり考えるようになった。

やがて彼の横着はもう一步深入りをした。

ある朝彼は親に起こされて、眠い眼を擦りながら縁側へ出た。

彼は毎朝寐起に其所から小便をする癖を有っていた。ところがその日は何時もより眠かったので、彼は用を足しながらつい途中で寐てしまった。そうしてその後を知らなかった。

眼が覚めて見ると、彼は小便の上に転げ落ちていた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かった。大通りから河岸の方へ滑り込んで

いる地面の中途に当るので、普通の倍ほどあつた。彼はその出来事のためにとうとう腰を抜かした。

驚ろいた養父母はすぐ彼を千住せんじゅの名倉なぐらへ伴つれて行つて出来るだけの治療を加えた。しかし強く痛められた腰は容易に立たなかつた。彼は醋すの臭のする黄色いどろどろしたものを毎日局部に塗つて座敷に寐ふていた。それが幾日いくか続いたか彼は知らなかつた。

「まだ立てないかい。立つて御覧」

御常は毎日のように催促した。しかし健三は動けなかつた。動けるようになってもわざと動かなかつた。彼は寐ながら御常のやきもきする顔を見てひそかに喜こんだ。

彼はしまいに立った。そうして平生へいぜいと何の異なる所なく其所いら中歩き廻った。すると御常の驚ろいて嬉うれしがりようが、如何いかにも芝居じみた表情に充ちていたので、彼はいつそ立たずにもう少し寐ていればよかったという氣になった。

彼の弱点が御常の弱点とまともに相搏あいうつ事も少なくはなかった。

御常は非常に嘘うそを吐く事の巧うまい女であつた。それからどんな場合でも、自分に利益があるとさえ見れば、すぐ涙を流す事の出来る重宝な女であつた。健三をほんの小供だと思つて氣を許していた彼女は、その裏面をすっかり彼に曝露ばくろして自みづから知らなかつ

た。

或日一人の客と相對して坐っていた御常は、その席で話題に上った甲のぼという女を、傍はたで聴いていても聴きづらいほど罵ののった、ところがその客が歸ったあとで、甲がまた偶然彼女を訪ねて来た。すると御常は甲に向つて、そらぞらしい御世辞を使い始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞ほめていた所だというような不必要な嘘まで吐ついた。健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」

彼は一徹な小供の正直をそのまま甲の前に披ひ瀝れした。甲の歸ったあとで御常は大變に怒おこった。

「御前と一所にいと顔から火の出るような思をしなくつちやならない」

健三は御常の顔から早く火が出れば好い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を忌み嫌う心が我知らず常にどこかに働らいていた。いくら御常から可愛がられても、それに酬いるだけの情合がこつちに出て来得ないような醜いものを、彼女は彼女の人格の中に蔵していたのである。そうしてその醜くいものを一番能く知っていたのは、彼女の懷に温められて育った駄々子に外ならなかったのである。

## 四十三

その中<sup>うち</sup>変な現象が島田と御常との間に起った。

ある晩健三がふと眼を覚まして見ると、夫婦は彼の傍<sup>そば</sup>ではげしく罵<sup>のの</sup>り合っていた。出来事は彼に取って突然であつた。彼は泣き出した。

その翌晩も彼は同じ争いの声で熟睡を破られた。彼はまた泣いた。

こうした騒がしい夜が幾つとなく重なって行くに連れて、二人の罵る声は次第に高まって来た。しまいには双方とも手を出し始

めた。打つ音、踏む音、叫ぶ音が、小さな彼の心を恐ろしがらせた。最初彼が泣き出すとやんだ二人の喧嘩けんかが、今では寐ねようが覚めようが、彼に用捨なく進行するようになった。

幼稚な健三の頭では何のために、ついぞ見馴みなれないこの光景が、毎夜深更に起るのか、まるで解釈出来なかった。彼はただそれを嫌った。道德も理非も持たない彼に、自然はただそれを嫌うように教えたのである。

やがて御常は健三に事実を話して聞かせた。その話によると、彼女は世の中で一番の善人であった。これに反して島田は大変な悪ものであった。しかし最も悪いのは御藤おふじさんであった。「あい

つが」とか「あの女が」とかいう言葉を使うとき、御常は口惜しくって堪まらないという顔付をした。眼から涙を流した。しかしそうした劇烈な表情はかえって健三の心持を悪くするだけで、外に何の効果もなかった。

「あいつは讐かたきだよ。御母おつかさんにも御前にも讐かたきだよ。骨を粉こにしても仇討かたきうちをしなくっちゃ」

御常は齒をぎりぎり噛かんだ。健三は早く彼女の傍を離れたいなつた。

彼は始終自分の傍にいて、朝から晩まで彼を味方にしたがる御常よりも、むしろ島田の方を好いた。その島田は以前と違って、



大抵は宅うちにいない事が多かった。彼の帰る時刻は何時も夜更よふけらしかった。従つて日中は滅多に顔を合せる機会がなかった。

しかし健三は毎晩暗い灯火ともしびの影で彼を見た。その陰悪な眼と怒いかりに顫ふるえる唇とを見た。咽喉のどから渦捲うずまく烟けむりのように洩もれて出るその憤りの声を聞いた。

それでも彼は時々健三を伴つれて以前の通り外へ出る事があつた。彼は一口も酒を飲まない代りに大変甘いものを嗜たしなんだ。ある晩彼は健三と御藤さんの娘の御縫おぬいさんとを伴にぎやれて、賑かな通りを散歩した歸りに汁粉屋しるこやへ寄つた。健三の御縫さんに会つたのはこの時が始めてであつた。それで彼らは碌ろくに顔さえ見合せなかつ

た。口はまるで利かなかった。

宅へ帰った時、健三は御常から、まず島田にどこへ伴れて行かれたかを訊きかれた。それから御藤さんの宅へ寄りはないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行ったという詰問を受けた。健三は島田の注意にかかわらず、事実をありのままに告げた。しかし御常の疑いはそれでもなかなか解けなかった。彼女はいろいろな鎌かまを掛けて、それ以上の事実を釣り出そうとした。

「あいつも一所なんだろう。本当を御いい。いえば御母おつかさんが好いものを上げるから御いい。あの女も行ったんだろう。そうだろう」

彼女はどうしても行つたといわせようとした。同時に健三はど  
うしてもいうまいと決心した。彼女は健三を疑<sup>うたぐ</sup>つた。健三は彼女  
を卑しんだ。

「じゃあの子に御父<sup>おとつ</sup>さんが何といたい。あの子の方に余計口  
を利ukai、御前の方にかい」

何の答もしなかった健三の心には、ただ不愉快の念のみ募つ  
た。しかし御常は其所<sup>そこ</sup>で留まる女ではなかった。

「汁粉屋で御前をどっちへ坐らせたい。右の方かい、左の方か  
い」

嫉妬<sup>しつと</sup>から出る質問は何時まで経つても尽きなかった。その質問

のうちに自分の人格を会釈なく露わして顧り見ない彼女は、十にも足りないわが養い子から、愛想を尽かされて毫も気が付かずにいた。

## 四十四

間もなく島田は健三の眼から突然消えて失くなった。河岸を向いた裏通りと賑かな表通りとの間に挟まっていた今までの住居も急にどこへか行ってしまった。御常とたった二人ぎりになった健三は、見馴れない変な宅の中に自分を見出だした。

その家の表には門口かどぐちに縄暖簾なわのれんを下げた米屋だか味噌屋みそやだかがあつた。彼の記憶はこの大きな店と、茹うでた大豆とを彼に連想せしめた。彼は毎日それを食った事をいまだに忘れずにいた。しかし自分の新らしく移った住居については何の影像イメジも浮かべ得なかつた。「時」は綺麗きれいにこの佻わびしい記念かたみを彼のために払い去つてくれた。

御常は会う人ごとに島田の話をした。口惜くやしい口惜くやしいといつて泣いた。

「死たんで崇たつてやる」

彼女の権幕は健三の心をますます彼女から遠ざける媒介なかだちとなる

に過ぎなかった。

夫と離れた彼女は健三を自分一人の専有物にしようとした。また専有物だと信じていた。

「これから御前一人が依怙たよりだよ。好いかい。確しつかりしてくれなくっちゃいけないよ」

こう頼まれるたびに健三はいい渋った。彼はどうしても素直な子供のように心持の好い返事を彼女に与える事が出来なかった。

健三を物にしようという御常の腹の中には愛に駆られる衝動よりも、むしろ慾よくに押し出される邪氣が常に働いていた。それが頑がんぜはない健三の胸に、何の理窟なしに、不愉快な影を投げた。しか

しその他の点について彼は全くの無我夢中であつた。

二人の生活は僅かの間しか続かなかつた。物質的の欠乏が原因になつたのか、または御常の再縁が現状の変化を余儀なくしたのか、年齒の行かない彼にはまるで解らなかつた。何しろ彼女はまた突然健三の眼から消えて失くなつた。そうして彼は何時の間にか彼の実家へ引き取られていた。

「考えるとまるで他の身の上のようだ。自分の事とは思えない」

健三の記憶に上せた事相は余りに今の彼と懸隔していた。それでも彼は他人の生活に似た自分の昔を思い浮べなければならなかつた。しかも或る不快な意味において思い浮べなければならな

かった。

「御常さんて人はその時にあの波多野とかいう宅へまた御嫁に行ったんでしょうか」

細君は何年前か夫の所へ御常から来た長い手紙の上書をまだ覚えていた。

「そうだろうよ。己も能く知らないが」

「その波多野という人は大方まだ生きてるんでしょうね」

健三は波多野の顔さえ見た事がなかった。生死などは無論考えの中になかった。

「警部だっというじゃありませんか」



「何んだか知らないね」

「あら、貴夫あなたが自分でそう御仰おっしやったくせに」

「何時いつ」

「あの手紙を私わたくしに御見せになつた時よ」

「そうかしら」

健三は長い手紙の内容を少し思い出した。その中には彼女が幼い健三の世話をした時の辛苦ばかりが並べ立ててあつた。乳がないので最初からおじやだけで育てた事だの、下性げしやうが悪くつて寐小ねしやう便べんの始末に困つた事だの、凡てすべそうした顛末てんまつを、飽きるほど委くわしく述べた中に、甲府こうふとかに在る親類の裁判官が、月々彼女に金を

送ってくれるので、今では大變仕合だしあわせと書いてあつた。しかし肝心の彼女の夫が警部であつたかどうか、其所そこになると健三には全く覺がなかつた。

「ことによると、もう死んだかも知れないね」

「生きているかも分りませんわ」

二人の間には波多野の事ともつかず、また御常の事ともつかず、こんな問答が取り換わされた。

「あの人の不意に遣やつて来たように、その女の人も、何時突然訪ねて来ないとも限らないわね」

細君は健三の顔を見た。健三は腕組をしたなり黙っていた。

## 四十五

健三も細君も御常の書いた手紙の傾向をよく覚えていた。彼女とはさして縁故のない人ですら、親切に毎月いくらかずつの送金をしてくれるのに、小さい時分あれほど世話になつて置きながら、今更知らん顔をしていられた義理でもあるまいといった風の筆意が、一頁ごとに見透かされた。

その時彼はこの手紙を東京にいる兄の許に送った。勤先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し気を付けるように先方へ注意してくれと頼んだ。兄からはすぐ返事が来た。もとも

と養家先を離縁になつて、他家へ嫁に行った以上は他人である、その上健三はその養家さえ既に出てしまった後なのだから、今になつて直接本人へ文通などされては困るという理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、その返事には書いてあつた。

御常の手紙はその後<sup>で</sup>ふつつり来なくなつた。健三は安心した。しかしどこかに心持の悪い所があつた。彼は御常の世話を受けた昔を忘れる訳に行かなかつた。同時に彼女を忌み嫌う念は昔の通り変らなかつた。要するに彼の御常に対する態度は、彼の島田に対する態度と同じ事であつた。そうして島田に対するよりも一層

嫌悪の念が劇<sup>はげ</sup>しかった。

「島田一人でもう沢山なところへ、また新らしくそんな女が遣<sup>や</sup>つて来られちゃ困るな」

健三は腹の中であつた。夫の過去について、それほど知識のない細君の腹の中はなおの事であつた。細君の同情は今その生家の方にばかり注がれていた。もとかかなりの地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活を続けた結果、漸々<sup>だんだん</sup>経済上の苦境に陥いつて来たのである。

健三は時々<sup>うち</sup>宅へ話しに来る青年と対坐<sup>たいざ</sup>して、晴々しい彼らの様子と自分の内面生活とを対照し始めるようになった。すると彼の

眼に映ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へ先へと歩いて行くように見えた。

或日彼はその青年の一人に向ってこういった。

「君らは幸福だ。卒業したら何になろうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考えているんだから」

青年は苦笑した。そうして答えた。

「それは貴方<sup>あなた</sup>がた時代の事でしょう。今の青年はそれほど呑気<sup>のんき</sup>でもありません。何<sup>なん</sup>になろうとか、何<sup>なに</sup>をしようとか思わない事は無論ないでしょうけれども、世の中が、そう自分の思い通りにならない事もまた能く<sup>よく</sup>承知<sup>しょうち</sup>していますから」

なるほど彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世<sup>せ</sup>知<sup>ち</sup>辛<sup>がら</sup>く  
なっていた。しかしそれは衣食住に関する物質的の問題に過ぎな  
かった。従って青年の答には彼の思わくと多少喰<sup>く</sup>い違った点が  
あった。

「いや君らは僕のように過去に煩<sup>わ</sup>さわれないから仕合せだとい  
うのさ」

青年は解しがたいという顔をした。

「あなただって些<sup>ちっ</sup>とも過去に煩<sup>わ</sup>さわされているようには見えませ  
んよ。やっぱり己<sup>おれ</sup>の世界はこれからだという所があるようです  
ね」

今度は健三の方が苦笑する番になった。彼はその青年に仏蘭西フランスのある学者が唱え出した記憶に関する新説を話した。

人が溺れおぼかかったり、または絶壁から落おちようとする間際に、よく自分の過去全体を一瞬間の記憶として、その頭に描き出す事があるという事実には、この哲学者は一種の解釈を下したのである。

「人間は平生へいぜい彼らの未来ばかり望んで生きているのに、その未来が咄嗟とっさに起ったある危険のために突然塞ふさがれて、もう己は駄目だと事が極きまると、急に眼を転じて過去を振り向くから、そこで凡すべての過去の経験が一度に意識に上のぼるのだというんだね。その説によると」



青年は健三の紹介を面白そうに聴いた。けれども事状を一向知らない彼は、それを健三の身の上に引き直して見る事が出来なかった。健三も一刹那いっせつなにわが全部の過去を思い出すような危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考えるほどの馬鹿でもなかった。

## 四十六

健三の心を不愉快な過去に捲まき込む端緒いとくちになった島田は、それから五、六日ほどして、ついにまた彼の座敷にあらわれた。

その時健三の眼に映じたこの老人は正しく過去の幽霊であつた。また現在の人間でもあつた。それから薄暗い未来の影にも相違なかつた。

「どこまでこの影が己おれの身体からだに付いて回るだろう」

健三の胸は好奇心の刺戟しげきに促されるよりもむしろ不安の漣漪さざなみに揺れた。

「この間比田ひだの所をちよつと訪ねて見ました」

島田の言葉遣はこの前と同じように鄭重ていちょうであつた。しかし彼が何で比田の家へ足を運んだのか、その点になると、彼は全く知らん顔をして澄ましていた。彼の口ぶりはまるで無沙汰見舞ぶさたかたが

たそつちへ用のあつたついでに立ち寄った人の如くであつた。

「あの辺<sup>へん</sup>も昔と違つて大分<sup>だいぶん</sup>変りましたね」

健三は自分の前に坐<sup>すわ</sup>っている人の真面目<sup>まじめ</sup>さの程度を疑<sup>うたぐ</sup>つた。果してこの男が彼の復籍を比田まで頼み込んだのだろうか、また比田が自分たちと相談の結果通り、断然それを拒絶したのであるか、健三はその明白な事実さえ疑わずにはいられた。かつた。

「もとはそら彼処<sup>あそこ</sup>に瀑<sup>たき</sup>があつて、みんな夏になると能<sup>よ</sup>く出掛けたものですがね」

島田は相手に頓着<sup>とんじやく</sup>なくただ世間話を進めて行つた。健三の方では無論自分から進んで不愉快な問題に触れる必要を認めないの

で、ただ老人の迹あとに跟ついて引つ張られて行くだけであつた。すると何時の間にか島田の言葉遣が崩れて来た。しまいには彼は健三の姉を呼び捨てずにし始めた。

「御夏おなつも年を取つたね。尤もつともう大分久しく会わないには違ないが。昔はあれでなかなか勝気な女で、能く私わたしに喰くつて掛つたり何なんかしたもののさ。その代り元々兄弟同様の間柄だから、いくら喧嘩けんかをしたって、仲の直るのもまた早いには早い。何しろ困ると助けてくれて能く泣き付いて来るんで、私わたしや可哀想かわいそうだからその度たんびにいくらかずつ都合して遣やつたよ」

島田のいう事は、姉が蔭で聴いていたらさぞ怒おこるだろうと思う

ように横柄おうへいであつた。それから手前勝手な立場からばかり見た歪ゆがんだ事実を他ひとに押し付けようとする邪氣に充ちていた。

健三は次第に言葉少すくなになつた。しまいには黙つたなり凝じつと島田の顔を見詰た。

島田は妙に鼻の下の長い男であつた。その上往来などで物を見るときは必ず口を開けていた。だからちよつと馬鹿のようであつた。けれども善良な馬鹿としては決して誰の眼にも映ずる男ではなかつた。落ち込んだ彼の眼はその底で常に反対の何物かを語つていた。眉まゆはむしろ険しかった。狭くて高い彼の額の上にある髪は、若い時分から左右に分けられた例ためしがなかつた。法印ほういんか何ぞの

ように常に後へ撫で付けられていた。

彼はふと健三の眼を見た。そうして相手の腹を読んだ。一旦横風の昔に返った彼の言葉遣がまた何時の間にか現在の鄭寧さに立ち戻って来た。健三に対して過去の己れに返ろう返ろうとする試みを遂に断念してしまった。

彼は室の内をきよろきよろ見廻し始めた。殺風景を極めたその室の中には生憎額も掛物も掛けていなかった。

「李鴻章の書は好きですか」

彼は突然こんな問を發した。健三は好きとも嫌ともいい兼ねた。

「好きなら上げてても好ござんす。あれでも価値にしたら今じや

よつぽどするでしょう」

昔し島田は藤田東湖ふじたとうこの偽筆に時代を着けるのだといって、白髪はくはつ蒼顔そうがん万死余云々ばんしのようんぬんと書いた半切はんせつの唐紙とうしを、台所の竈へっついの上に釣るしていた事があつた。彼の健三にくれるという李鴻章も、どこの誰が書いたものか頗るすこぶ怪しかった。島田から物を貰う気の絶対になつた健三は取り合わずにいた。島田は漸くようや歸つた。

## 四十七

「何しに來たんでしよう、あの人は」

目的<sup>あて</sup>なしにただ来るはずがないという感じが細君には強くあった。健三も丁度同じ感じに多少支配されていた。

「解らないね、どうも。一体魚<sup>さかな</sup>と獣<sup>けだもの</sup>ほど違うんだから」

「何が」

「ああいう人と己<sup>おれ</sup>などとはさ」

細君は突然自分の家族と夫との関係を思い出した。両者の間には自然の造った溝があつて、御互を離隔していた。片意地な夫は決してそれを飛び超えてくれなかった。溝を拵<sup>こしら</sup>えたものの方で、それを埋めるのが当然じゃないかといった風の気分で何時までも押し通していた。里ではまた反対に、夫が自分の勝手にこの溝を



掘り始めたのだから、彼の方で其所<sup>そこ</sup>を平<sup>たい</sup>にしたら好かろうという考えを有<sup>も</sup>っていた。細君の同情は無論自分の家族の方にあつた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出来ない偏窟<sup>へんくつ</sup>な学者だと解釈していた。同時に夫が里と調和しなくなった原因<sup>うち</sup>の中に、自分が主要素として這<sup>はい</sup>入っている事も認めていた。

細君は黙って話を切り上げようとした。しかし島田の方にばかり気を取られていた健三にはその意味が通じなかった。

「御前はそう思わないかね」

「そりゃあの人と貴夫<sup>あなた</sup>となら魚と獣位違<sup>ちが</sup>うでしょう」

「無論外の人と己と比較していやしない」

話はまた島田の方へ戻って来た。細君は笑いながら訊きいた。

「李鴻章の掛物をどうかいってたのね」

「己に遣やろうかっていうんだ」

「御止およしなさいよ。そんな物を貰ってまた後からどんな無心を持ち懸けられるかも知れないわ。遣るっていうのは、大方口の先だけなんでしょう。本当は買ってくれっていう気なんですよ、きつと」

夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買いたいものが沢山あった。段々大きくなって来る女の子に、相当の着物を着せて表へ出す事の出来ないのも、細君からいえば、夫の気の付かない心配に

違なかつた。二円五十銭の月賦で、この間拵えた雨合羽あまがつぱの代を、  
月々洋服屋に払っている夫も、あまり長閑のどかな心持になれようはず  
がなかつた。

「復籍の事は何にもいい出さなかつたようですね」

「うん何にもいわない。まるで狐きつねに抓つままれたようなものだ」

始めからこっちの気を引くためにわざとそんな突飛とっぴな要求を持  
ち出したものか、または真面目まじめな懸合かけあいとして、それを比田ひだへ持ち  
込んだ後あと、比田からきつぱり断られたので、始めて駄目さとだと覺つ  
たものか、健三にはまるで見当が付かなかつた。

「どつちでしょう」

「到底解らないよ、ああいう人の考えは」

島田は実際どっちでも遣りかねない男であつた。

彼は三日ほどしてまた健三の玄関を開けた。その時健三は書齋に灯火あかりを点つけて机の前に坐すわっていた。丁度彼の頭に思想上のある問題が一筋の端緒いとくちを見せかけた所であつた。彼は一瞬にそれを手近まで手繰たぐり寄せようとして骨を折つた。彼の思索は突然截たち切られた。彼は苦い顔をして室へやの入口に手を突いた下女げじょの方を顧みた。

「何もそう度々たびたび来て、他の邪魔ひとをしなくつても好さそうなものだ」

彼は腹の中でこう呟つぶやいた。断然面会を謝絶する勇氣を有もたない彼は、下女を見たなり少時しばらく黙っていた。

「御通し申しますか」

「うん」

彼は仕方なしに答えた。それから「御奥おくさんは」と訊たずねた。

「少し御気分が悪いと仰おつしゃって先刻さつきから伏せっていらっしやいます」

細君の寐ねるときは歇私ヒステリー的里の起った時に限るように健三には思えてならなかった。彼は漸ようやく立ち上った。

## 四十八

電氣燈のまだ戸こごとに点ともされない頃だったので、客間には例いつも  
の通り暗い洋燈ランプが点ついていた。

その洋燈は細長い竹の台の上に油壺あぶらうつぼを簞はめ込むように拵こしらえたも  
ので、鼓つづみの胴かっこうの恰形かっこうに似た平たい底が畳へ据わるように出来てい  
た。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心しん  
を出したり引つ込ましたりしながら灯火あかりの具合を眺めていた。彼  
は改まった挨拶あいさつもせず、「少し油煙がたまるようですね」と

いった。

なるほど火屋<sup>ほや</sup>が薄黒く燻<sup>くす</sup>ぶっていた。丸心<sup>まるじん</sup>の切方<sup>きりかた</sup>が平<sup>たいら</sup>に行かないところを、むやみに灯<sup>ひ</sup>を高くすると、こんな変調を来すのがこの洋燈の特徴であつた。

「換えさせましょう」

家には同じ型のものが三つばかりあつた。健三は下女<sup>げじよ</sup>を呼んで茶の間にあるのとり換えさせようとした。しかし島田は生返事をするぎりで、容易に煤<sup>すす</sup>で曇つた火屋から眼を離さなかつた。

「どういう加減だろう」

彼は独り言をいって、草花の模様だけを不透明に擦<sup>す</sup>つた丸い蓋<sup>かさ</sup>

の隙間を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、こんな事を能く気にするという点において、頗る几帳面な男に相違なかった。彼はむしろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金銭上の不潔癖の償いにでもなるように、座敷や縁側の塵を気にした。彼は尻をからげて、拭掃除をした。跣足で庭へ出て要らざる所まで掃いたり水を打ったりした。

物が壊れると彼はきつと自分で修復した。あるいは修復そうとした。それがためにどの位な時間が要つても、またどんな労力が必要になつて来ても、彼は決して厭わなかった。そういう事が彼



の性しやうにあるばかりでなく、彼には手に握った一銭銅貨の方が、時間や労力よりも遥かに大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅うちで出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」

損をするという事が彼には何よりも恐ろしかった。そうして目に見えない損はいくらしても解らなかった。

「宅うちの人はあんまり正直過ぎるんで」

御藤おふじさんは昔健三に向って、自分の夫を評するときに、こんな言葉を使った。世の中をまだ知らない健三にもその真実でない事はよく解っていた。ただ自分の手前、嘘うそと承知しながら、夫の品

性を取り繕うのだろうと善意に解釈した彼は、その時御藤さんに向って何にもいわなかった。しかし今考えて見ると、彼女の批評にはもう少し慥たしかな根底があるらしく思えた。

「必竟ひっきやう大きな損に気のつかない所が正直なんだろう」

健三はただ金銭上の慾よくを満たそうとして、その慾に伴なわない程度の幼稚な頭脳を精一杯に働らかせている老人をむしろ憐れに思った。そうして凹くぼんだ眼を今擦すり硝子ガラスの蓋の傍そばへ寄せて、研究でもする時のように、暗い灯を見詰めている彼を気の毒な人として眺めた。

「彼はこうして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたような一句を眼の前に味わった健三は、自分は果してどうして老ゆるのだろうかと考えた。彼は神と  
いう言葉が嫌であつた。しかしその時の彼の心にはたしかに神と  
いう言葉が出た。そうして、もしその神が神の眼で自分の一生を  
通して見たならば、この強慾な老人の一生と大した変りはないか  
も知れないという気が強くした。

その時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見えて、細長い火屋の  
中が、赤い火で一杯になった。それに驚ろいた彼は、また螺旋を  
逆に廻し過ぎたらしく、今度はただでさえ暗い灯火をなおの事暗  
くした。

「どうもどこか調子が狂ってますね」

健三は手を敲たたいて下女に新しい洋燈を持って来させた。

## 四十九

その晩の島田はこの前来た時と態度の上において何の異なる所もなかった。応対にはどこまでも健三を独立した人と認めるような言葉ばかり使った。

しかし彼はもう先達せんだつての掛物についてはまるで忘れているかの如くに見えた。李鴻章りこうしょうの李の字も口にしなかった。復籍の事はな

お更であつた。噫おくびにさえ出す様子を見せなかつた。

彼はなるべくただの話をしようとした。しかし二人に共通した興味のある問題は、どこをどう探しても落ちているはずがなかつた。彼のいう事の大部分は、健三に取つて全くの無意味から余り遠く隔へだたつているとも思えなかつた。

健三は退屈した。しかしその退屈のうちには一種の注意が徹とおつていた。彼はこの老人が或日或物を持つて、今より判明はつきした姿で、きっと自分の前に現れてくるに違ないという予覺に支配された。その或物がまた必ず自分に不愉快なもしくは不利益な形を具えているに違ないという推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながらかなり鋭どい緊張を感じた。そのせいか、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝子の蓋を通して油煙に燦ぶった洋燈の灯を眺めていた時とは全く変っていた。

「隙があつたら飛び込もう」

落ち込んだ彼の眼は鈍いくせに明らかにこの意味を物語っていた。自然健三はそれに抵抗して身構えなければならなくなった。

しかし時によると、その身構えをさらりと投げ出して、飢えたような相手の眼に、落付を与えて遣りたくなる場合もあった。

その時突然奥の間で細君の唸るような声がした。健三の神経はこの声に対して普通の人以上の敏感を有っていた。彼はすぐ耳を

峙<sup>そば</sup>だてた。

「誰か病氣ですか」と島田が訊<sup>き</sup>いた。

「ええ妻<sup>さい</sup>が少し」

「そうですか、それはいけませんね。どこが悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかった。何時どこから嫁に来た女かさえ知らないらしかった。従って彼の言葉にはただ挨拶<sup>あいさつ</sup>があるだけであつた。健三もこの人から自分の妻に対する同情を求めようとは思つていなかった。

「近頃は時候が悪いから、能<sup>よ</sup>く気を付けないといけませんね」

子供は疾<sup>と</sup>うに寐<sup>ね</sup>付いた後<sup>あと</sup>なので奥は寂<sup>しん</sup>としていた。下女<sup>げじょ</sup>は一番

懸け離れた台所の傍そばの三畳にいらしかった。こんな時に細君を  
たった一人で置くのが健三には何より苦しかった。彼は手を叩たたい  
て下女を呼んだ。

「ちよつと奥へ行つて奥さんの傍すわに坐つててくれ」

「へええ」

下女は何のためだか解らないといった様子をして間の襖ふすまを締め  
た。健三はまた島田の方を向き直った。けれども彼の注意はむし  
ろ老人を離れていた。腹の中で早く帰つてくれれば好いいと思うの  
で、その腹が言葉にも態度にもありありと現れた。

それでも島田は容易に立たなかった。話の接穂つぎほがなくなつて、



手持無沙汰<sup>ぶさた</sup>で仕方なくなつた時、始めて座蒲団<sup>ざぶとん</sup>から滑り落ちた。

「どうも御邪魔をしました。御忙がしいところを。いずれまたその内」

細君の病気については何事もいわなかつた彼は、沓脱<sup>くつぬぎ</sup>へ下りてからまた健三の方を振り向いた。

「夜分なら大抵御暇ですか」

健三は生返事をしたなり立っていた。

「実は少し御話したい事があるんですが」

健三は何の御用ですかとも聞き返さなかつた。老人は健三の手に持った暗い灯影<sup>ひかげ</sup>から、鈍い眼を光らしてまた彼を見上げた。そ

の眼にはやつぱりどこかに隙があつたら彼の懷に潜り込もうとい  
う人の悪い厭な色か動いていた。

「じゃ御免」

最後に格子こうしを開けて外へ出た島田はこういつてとうとう暗がり  
に消えた。健三の門には軒燈さえ点ついていなかった。

## 五十

健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立った。

「どうかしたのか」

細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲団ふとんの横からまたその眼みを見下した。おろ

襖ふすまの影に置かれた洋燈ランプの灯ひは客間のよりも暗かった。細君の眸ひとみがどこに向って注がれているのか能くよ分らない位暗かった。

「どうかしたのか」

健三は同じ問をまた繰り返さなければならなかった。それでも細君は答えなかった。

彼は結婚以来こういう現象に何度となく遭遇した。しかし彼の神経はそれに慣らされるには余りに鋭敏過ぎた。遭遇するたびに、同程度の不安を感じるのが常であつた。彼はすぐ枕元に腰を

卸した。

「もうあっちへ行っても好い。此所には己おれがいるから」

ぼんやり蒲団の裾すわに坐つて、退屈そうに健三の様子を眺めてい

た下女げじよは無言のまま立ち上った。そうして「御休みなさい」と敷

居の所へ手を突いて御辞儀をしたなり襖を立て切った。後には赤

い筋を引いた光るものが畳の上に残った。彼は眉まゆを顰ひそめながら下

女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢おんなを呼び返し

て小言こごとをいって渡すところを、今の彼は黙つて手に持ったまま、

しばらく考えていた。彼はしまいにその針をぶつりと襖に立て

た。そうしてまた細君の方へ向き直った。

細君の眼はもう天井を離れていた。しかし判然<sup>はつきり</sup>どこを見ているとも思えなかった。黒い大きな瞳子<sup>ひとみ</sup>には生きた光があつた。けれども生きた働きが欠けていた。彼女は魂と直接<sup>じか</sup>に繋<sup>つな</sup>がっていないような眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔<sup>ひとみ</sup>の向いた見当を眺めていた。

「おい」

健三は細君の肩を揺<sup>ゆ</sup>った。細君は返事をせずになだ首だけをそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其所<sup>そこ</sup>に夫の存在を認める何らの輝きもなかった。

「おい、己だよ。分るかい」

こういう場合に彼の何時でも用いる陳腐で簡略でしかもぞんざいなこの言葉のうちには、他にひと知れないで自分にばかり解といてい  
る憐憫れんびんと苦痛と悲哀があつた。それからひざ跪ひまずいて天にいの禱いのる時の  
誠と願もあつた。

「どうぞ口を利いてくれ。後生だから己の顔を見てくれ」

彼は心のうちでこういつて細君に頼むのである。しかしその痛  
切な頼みを決して口へ出していおうとはしなかった。感傷センチメンタル的な気  
分に支配されやすいくせに、彼は決して外表的デモンストラチヴになれない男で  
あつた。

細君の眼は突然平生へいぜいの我に歸かへつた。そうして夢から覚めた人の

ように健三を見た。

「あなた貴夫？」

彼女の声は細くかつ長かった。彼女は微笑しかけた。しかしまだ緊張している健三の顔を認めた時、彼女はその笑を止めた。

「あの人はもう帰ったの」

「うん」

二人はしばらく黙っていた。細君はまた頸くびを曲げて、傍そばに寐ねている子供の方を見た。

「能く寐ているのね」

子供は一つ床の中に小さな枕を並べてすやすや寐ていた。

健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。

「水で頭でも冷して遣<sup>や</sup>ろうか」

「いいえ、もう好<sup>よ</sup>ござんす」

「大丈夫かい」

「ええ」

「本当に大丈夫かい」

「ええ。貴夫ももう御休みなさい」

「己はまだ寐る訳に行かないよ」

健三はもう一遍書斎へ入って静かな夜<sup>よ</sup>を一人更<sup>ふ</sup>かさなければならなかった。



## 五十一

彼の眼が冴<sup>さ</sup>えている割に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の綱を中断された人のように、考察の進路を遮ぎる霧の中で苦しんだ。

彼は明日<sup>あした</sup>の朝多くの人より一段高い所に立たなければならぬ。憐<sup>あわ</sup>れな自分の姿を想い見た。その憐れな自分の顔を熱心に見詰めたり、または不得意な自分のいう事を真面目<sup>まじめ</sup>に筆記したりする青年に対して済まない気がした。自分の虚栄心や自尊心を傷<sup>きず</sup>けるのも、それらを超越する事の出来ない彼には大きな苦痛であつた。

「明日<sup>あした</sup>の講義もまた纏<sup>まと</sup>まらないのかしら」

こう思うと彼は自分の努力が急に厭<sup>いや</sup>になった。愉快に考えの筋道が運んだ時、折々何者にか煽動<sup>せんどう</sup>されて起る、「己<sup>おれ</sup>の頭は悪くない」という自信も己惚<sup>うぬぼれ</sup>も忽ち<sup>たちま</sup>消えてしまった。同時にこの頭の働らきを攪<sup>か</sup>き乱す自分の周囲についての不平も常時<sup>ふだん</sup>よりは高まつて来た。

彼はしまいに投げるように洋筆<sup>ペン</sup>を放り出した。

「もうやめだ。どうしても構わない」

時計はもう一時過ぎていた。洋燈<sup>ランプ</sup>を消して暗闇<sup>くらやみ</sup>を縁側伝いに廊下へ出ると、突当<sup>つきあた</sup>りの奥の間の障子一枚だけが灯<sup>ひ</sup>に映って明る

かった。健三はその一枚を開けて内に入った。

子供は犬ころのように塊かたまって寐ねていた。細君も静かに眼を閉じて仰向あおもむけに眠っていた。

音のしないように気を付けてその傍そばに坐すわった彼は、心持頸くびを延ばして、細君の顔を上から覗のぞき込んだ。それからそつと手を彼女の寐顔ねがおの上に翳かげした。彼女は口を閉じていた。彼の掌てのひらには細君の鼻の穴から出る生暖かい呼息いきが微かに感ぜられた。その呼息は規則正しかった。また穏やかだった。

彼は漸く出でした手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見なければまだ安心が出来ないという気が彼の胸を衝ついて起つ

た。けれども彼は直<sup>すぐ</sup>その衝動に打勝った。次に彼はまた細君の肩へ手を懸けて、再び彼女を揺<sup>ゆ</sup>り起そうとしたが、それもやめた。

「大丈夫だろう」

彼は漸く普通の人の断案に帰着する事が出来た。しかし細君の病氣に対して神経の鋭敏になっている彼には、それが何人<sup>なんびと</sup>もこういう場合に取りなければならない尋常の手続きのように思われたのである。

細君の病氣には熟睡が一番の薬であつた。長時間彼女の傍に坐つて、心配そうにその顔を見詰めている健三に何よりも有難いその眠りが、静かに彼女の<sup>まぶた</sup>瞼の上に落ちた時、彼は天から降る甘

露をまのあたり見るような気が常にした。しかしその眠りがまた余り長く続き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼がかえって不安の種になった。ついに睫毛まつげの鎖とぎしている奥を見るために、彼は正体たわいなく寐入った細君を、わざわざ揺ゆり起して見る事が折々あった。細君がもつと寐かして置いてくれれば好いいのにという訴えを疲れた顔色に現わして重い瞼を開くと、彼はその時始めて後悔した。しかし彼の神経はこんな気の毒な真似まねをしてまでも、彼女の実在を確かめなければ承知しなかったのである。

やがて彼は寐衣ねまきを着換えて、自分の床に入った。そうして濁りながら動いているような彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜

はその濁りを清めてくれるには余りに暗過ぎた、しかし騒がしいその動きを止めるには充分静かであつた。

あくるあさ翌朝彼は自分の名を呼ぶ細君の声で眼を覚ました。

「貴夫あなたもう時間ですよ」

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取った袂たもと時計とどけいを眺めていた。下女げじよが俎板まないたの上で何か刻む音が台所の方で聞こえた。

「婢おんなはもう起きてるのか」

「ええ。さつき先刻起しに行つたんです」

細君は下女を起して置いてまた床の中に這入はいつたのである。健

三はすぐ起き上がった。細君も同時に立った。

昨夜ゆうべの事は二人ともまるで忘れたように何にもいわなかった。

## 五十二

二人は自分たちのこの態度に対して何の注意も省察せいさつも払わなかった。二人は二人に特有な因果関係を有もっている事を冥々めいめいの裡うちに自覚していた。そうしてその因果関係が一切の他人には全く通じないのだという事も能く吞み込んでいた。だから事状を知らない第三者の眼に、自分たちがあるいは変に映りはしまいかという

疑念さえ起さなかった。

健三は黙って外へ出て、例の通り仕事をした。しかしその仕事の真際中に彼は突然細君の病気を想像する事があった。彼の眼の前に夢を見ているような細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立っている高い壇から降りて宅<sup>うち</sup>へ帰らなければならぬような気がした。あるいは今にも宅<sup>むかい</sup>から迎<sup>むか</sup>が来るような心持になった。彼は広い室<sup>へや</sup>の片隅<sup>かど</sup>にいて真ん向<sup>まへ</sup>うの突<sup>つき</sup>当<sup>あた</sup>りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向<sup>かぶと</sup>いて兜<sup>はち</sup>の鉢<sup>が</sup>金<sup>ね</sup>を伏せたような高い丸天井を眺めた。仮<sup>ヴァーニッシン</sup>漆で塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるように工夫したその天井は、小さい彼の心を



包むに足りなかった。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を並べて、神妙に彼のいう事を聴いている多くの青年の上に落ちた。そうしてまた卒然として現実に帰るべく彼らから余儀なくされた。

これほど細君の病気に悩まされていた健三は、比較的島田のために崇<sup>たた</sup>られる恐れを抱<sup>いだ</sup>かなかった。彼はこの老人を因<sup>いん</sup>業<sup>ごう</sup>で強<sup>ごう</sup>慾<sup>よく</sup>な男と思っていた。しかし一方ではまたそれらの性癖を充分發揮する能力がないものとしてむしろ見<sup>み</sup>縊<sup>くび</sup>つてもいた。ただ要<sup>い</sup>らぬ会談に惜い時間を潰<sup>つぶ</sup>されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の煩いになった。

「何をいつて来る気かしら、この次は」

襲われる事を予期して、暗あんにそれを苦にするような健三の口振くちぶりが、細君の言葉を促がした。

「どうせ分っているじゃありませんか。そんな事を気になさるより早く絶交した方がよっぽど得ですわ」

健三は心の裡で細君のいう事を肯うけがった。しかし口ではかえって反対な返事をした。

「それほど気にしちやいないさ、あんな者。もともと恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいって誰もいやしませんわ。けれども面倒臭めんどくさいにや違いないでしょう、いくら貴夫あなただつて」

「世の中にはただ面倒臭い位な単純な理由でやめる事の出来ないものがいくらでもあるさ」

多少片意地の分子を含んでいるこんな会話を細君と取り換わせた健三は、その次島田の来た時、例<sup>いつも</sup>よりは忙がしい頭を抱えているにもかかわらず、ついに面会を拒絶する訳に行かなかつた。

島田のちと話したい事があるといったのは、細君の推察通りやっぱり金の問題であつた。隙<sup>すき</sup>があつたら飛び込もうとして、この間から覘<sup>わい</sup>を付けていた彼は、何時まで待っても際限がないとでも思つたものか、機会のあるなしに頓着<sup>とんじゃく</sup>なく、ついに健三に肉薄<sup>にくはく</sup>し始めた。

「どうも少し困るので。外にどこといって頼みに行く所もない私<sup>わたし</sup>なんだから、是非一つ」

老人の言葉のどこかには、義務として承知してもらわなくっちゃ困るといった風の横着さが潜<sup>ひそ</sup>んでいた。しかしそれは健三の神経を自尊心の一角において傷<sup>いた</sup>め付けるほど強くも現<sup>あらわ</sup>われていなかった。

健三は立って書斎の机の上から自分の紙入を持って来た。一家の会計を司<sup>つかさ</sup>どっていない彼の財囊<sup>ざいのう</sup>は無論軽<sup>かろ</sup>かった。空のまま硯箱<sup>すずりばこ</sup>の傍<sup>そば</sup>に幾<sup>いく</sup>日も横たわっている事さえ珍<sup>めづ</sup>らしくはなかった。彼はその中から手に触れるだけの紙幣を攫<sup>つか</sup>み出して島田の前に置いた。

島田は変な顔をした。

「どうせ貴方あなたの請求通り上げる訳には行かないんです。それでもありったけ悉皆みんな上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。そうして彼の帰ったあとで、空の財布を客間へ放り出したまままた書斎へ入った。細君には金を遣やった事を一口もいわなかった。

## 五十三

翌日あくるひ例刻に帰った健三は、机の前に坐すわって、大事らしく何時も

の所に置かれた昨日きのうの紙入に眼を付けた。革で拵こしらえた大型のこの二つ折は彼の持物としてむしろ立派過ぎる位上等な品であった。彼はそれを倫敦ロンドンの最も賑にぎやかな町で買ったのである。

外国から持って帰った記念が、何の興味も惹ひかなくなりつつある今の彼には、この紙入も無用の長物と見える外はなかった。細君が何故なぜ丁寧なげにそれを元の場所へ置いてくれたのだろうかとさえ疑った彼は、皮肉な一瞥いちべつを空っぽうの入物に与えたぎり、手も触れずに幾日かを過ごした。

その内何かで金の要いる日が来た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れてくれ」

細君は右の手で物指ものさしを持ったまま夫の顔を下から見上げた。

「這はい入ってるはずですよ」

彼女はの間島田の帰ったあとで何事も夫から聴こうとしなかった。それで老人に金を奪とられたことも全く夫婦間の話題に上のぼっていなかった。健三は細君が事状を知らないでこういうのかと思つた。

「あれはもう遣やつちやつたんだ。紙入は疾とうから空っぽうになつてゐるんだよ」

細君は依然として自分の誤解に気が付かないらしかった。物指

を畳の上へ投げ出して手を夫の方へ差し延べた。

「ちよつと拝見」

健三は馬鹿々々しいという風をして、それを細君に渡した。細君は中を検<sup>あら</sup>ためた。中からは四、五枚の紙幣<sup>さつ</sup>が出た。

「そらやっぱり入ってるじゃありませんか」

彼女は手垢<sup>てあか</sup>の付いた皺<sup>しわ</sup>だらけの紙幣を、指の間に挟んで、ちよつと胸のあたりまで上げて見せた。彼女の挙動は自分の勝利に誇るものの如く微<sup>かす</sup>かな笑に伴<sup>とも</sup>なつた。

「何時入れたのか」

「あの人の帰った後です」



健三は細君の心遣を嬉しく思うよりもむしろ珍らしく眺めた。彼の理解している細君はこんな気の利いた事を滅多にする女ではなかったのである。

「己が内所で島田に金を奪られたのを気の毒とでも思ったものかしら」

彼はこう考えた。しかし口へ出してその理由を彼女に訊き糺して見る事はしなかった。夫と同じ態度をついに失わずにいた彼女も、自ら進んで己れを説明する面倒を敢てしなかった。彼女の填補した金はかくして黙って受取られ、また黙って消費されてしまった。

その内細君の御腹おなかが段々大きくなつて来た。起居たちいに重苦しそうな呼息いきをし始めた。気分も能くよく变化した。

「妾わたくし今度こんだはことによると助からないかも知れませんよ」

彼女は時々何に感じてかこういつて涙を流した。大抵は取り合わずにいる健三も、時として相手にさせられなければ済まなかつた。

「何故なぜだい」

「何故だかそう思われて仕方がないんですもの」

質問も説明もこれ以上には上る事のぼの出来なかつた言葉のうちに、ぼんやりした或ものが常に潜んでいた。その或ものは単純な

言葉を伝わって、言葉の届かない遠い所へ消えて行つた。鈴りんの音ねが鼓膜の及ばない幽かすかな世界に潜り込むように。

彼女は悪阻つわりで死んだ健三の兄の細君の事を思い出した。そうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二、三日食物が通らなければ滋養灌腸かんちようをするはずだった際どいところを、よく通り抜けたものだなどと考えると、生きてゐる方がかえって偶然のような気がした。

「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判する

と、全くの出鱈目<sup>でたらめ</sup>に過ぎなかった。彼は腹の中で苦笑した。

## 五十四

健三の気分にも上<sup>あ</sup>り下<sup>さ</sup>りがあった。出任せにもせよ細君の心を休めるような事ばかりはいつていなかった。時によると、不快そうに寐<sup>ね</sup>ている彼女の体<sup>てい</sup>たらくが癢<sup>しゃく</sup>に障<sup>さや</sup>って堪<sup>こ</sup>らなくなった。枕元に突<sup>つ</sup>立<sup>た</sup>ったまま、わざと慳<sup>けん</sup>貪<sup>どん</sup>に要<sup>い</sup>らざる用<sup>よう</sup>を命<sup>めい</sup>じて見<sup>み</sup>たりした。

細君も動<sup>うご</sup>かなかった。大きな腹<sup>はら</sup>を畳<sup>たた</sup>へ着<sup>き</sup>けたなり打<sup>う</sup>つとも蹴<sup>け</sup>る

とも勝手にしろという態度をとった。平生へいぜいからあまり口数を利かない彼女は益ますます沈黙を守って、それが夫の気を焦いらだ立たせるのを目の前に見ながら澄ましていた。

「つまりしぶといのだ」

健三の胸にはこんな言葉が細君すべの凡ての特色でもあるかのよう  
うに深く刻み付けられた。彼は外ほかの事をまるで忘れてしまわなければならなかった。しぶしぶといいという観念だけがあらゆる注意の焦点になって来た。彼はよそを真闇まっくらにして置いて、出来るだけ強烈な憎悪の光をこの四字の上に投げ懸けた。細君はまた魚か蛇のよう  
うに黙ってその憎悪を受取った。従って人目には、細君が何時で

も品格のある女として映る代りに、夫はどうしても氣違染みた癩か持もちとして評価されなければならなかった。

「貴夫あなたがそう邪慳じゃけんになさると、また歇私ヒステリー的里を起しますよ」

細君の眼からは時々こんな光が出た。こういうものか健三は非道どくその光を怖れた。同時に劇はげしくそれを悪にくんだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部うわべでは強しいて勝手にしろという風を装った。その強硬な態度のどこかに何時でも仮装に近い弱点があるのを細君は能よく承知していた。

「どうせ御産で死んでしまうんだから構やしない」

彼女は健三に聞えよがしに呟つぶやいた。健三は死んじまえといい

たくなつた。

或晩彼はふと眼を覺まして、大きな眼を開いて天井を見詰てる細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髪剃かみそりがあつた。彼女が黒檀エボニーの鞘さやに折り込まれたその刃を真直まっすぐに立てずに、ただ黒い柄えだけを握つていたので、寒い光は彼の視覚を襲わずに済んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髪剃を撈もぎ取つた。

「馬鹿な真似をするな」

こういうと同時に、彼は髪剃を投げた。髪剃は障子に簞はめ込んだ硝子ガラスに中あたつてその一部分を摧くだいて向う側の縁えんに落ちた。細君は

茫然<sup>ぼうぜん</sup>として夢でも見ている人のように一口も物をいわなかった。

彼女は本当に情に逼<sup>せま</sup>つて刃物三昧<sup>はものざんまい</sup>をする気なのだろうか、また

は病気の発作に自己の意志を捧げべく余儀なくされた結果、無我夢中で切れものを弄<sup>もてあ</sup>そぶのだろうか、あるいは単に夫に打ち勝と

うとする女の策略からこうして人を驚かすのだろうか、驚ろかす

にしてもその真意は果してどこにあるのだろうか。自分に対する

夫を平和で親切な人に立ち返らせるつもりなのだろうか、または

ただ浅墓な征服慾に駆<sup>い</sup>られてゐるのだろうか、——健三は床の中

で一つの出来事を五<sup>いつすじ</sup>条にも六<sup>むすじ</sup>条にも解釈した。そうして時々眠れ

ない眼をそつと細君の方に向けてその動静をうかがった。寐<sup>み</sup>てい



るとも起きているとも付かない細君は、まるで動かなかった。あたかも死を銜<sup>てら</sup>う人のようであつた。健三はまた枕の上でまた自分の問題の解決に立ち歸つた。

その解決は彼の実生活を支配する上において、学校の講義よりも遙かに大切であつた。彼の細君に対する基調は、全<sup>まったく</sup>その解決一つでちゃんと定められなければならなかつた。今よりずっと単純であつた昔、彼は一図に細君の不可思議な挙動を、病のためのみ信じ切つていた。その時代には発作の起るたびに、神の前に己<sup>おの</sup>れを懺悔<sup>ざんげ</sup>する人の誠を以て、彼は細君の膝下<sup>しつかひざま</sup>に跪<sup>ひざま</sup>ずいた。彼はそれを夫として最も親切でまた最も高尚な処置と信じていた。

「今だつてその原因が判然<sup>はつきり</sup>分りさえすれば」

彼にはこういう慈愛の心が充ち満ちていた。けれども不幸にしてその原因は昔のように単純には見えなかった。彼はいくらでも考えなければならなかった。到底解決の付かない問題に疲れて、とろとろと眠るとまたすぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかった。彼は昨夕<sup>ゆうべ</sup>の事について、ついに一言<sup>ひとこと</sup>も細君に口を利く機会を得なかった。細君も日の出と共にそれを忘れてしまったような顔をしていた。

こういう不愉快な場面あとの後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入はいって来た。二人は何時となく普通夫婦の利くような口を利き出した。

けれども或時の自然は全くの傍観者に過ぎなかった。夫婦はどこまで行っても背中合せのまままで暮した。二人の関係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向って生家へ帰れといった。細君の方ではまた帰ろうが帰るまいがこっちの勝手だという顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰り返して憚はばらなかつた。

「じゃ当分子供を伴つれて宅うちへ行っていていましょう」

細君はこういった一旦里へ歸つた事もあつた。健三は彼らの食料を毎月送つて遣るという条件の下に、また昔のような書生生活に立ち歸れた自分を喜んだ。彼は比較的広い屋敷に下女とたつた二人ぎりになつたこの突然の変化を見て、少しも淋しいとは思わなかつた。

「ああ晴々して好い心持だ」

彼は八畳の座敷の真中に小さな餉台ちやふだいを据えてその上で朝から夕方までノートを書いた。丁度極暑の頃だったので、身体からだの強くない彼は、よく仰向あおもむけになつてばかりと畳の上に倒れた。何時替えたとも知れない時代の着いたその畳には、彼の脊中せなかを蒸すような黄

色い古びが心<sup>しん</sup>まで透<sup>す</sup>っていた。

彼のノートもまた暑<sup>あつ</sup>かしいほど細かな字で書き下<sup>くだ</sup>された。蠅<sup>はえ</sup>の頭というより外に形容のしようないその草稿を、なるべくだけ余計<sup>いじ</sup>拵<sup>づ</sup>えるのが、その時の彼に取<sup>と</sup>っては、何よりの愉快であつた。そして苦痛であつた。また義務であつた。

巣<sup>す</sup>鴨<sup>がも</sup>の植木屋の娘とかいう下女は、彼のために二、三の盆栽を宅から持<sup>も</sup>つて来てくれた。それを茶の間の縁<sup>えん</sup>に置いて、彼が飯を食<sup>く</sup>う時給仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜こんだ。けれども彼女の盆栽を軽<sup>けい</sup>蔑<sup>べつ</sup>した。それはどこの縁日へ行<sup>い</sup>つても、二、三十銭出せば、鉢<sup>ひち</sup>ごと買<sup>か</sup>える安価な代<sup>しろ</sup>物<sup>もの</sup>だったのであ

る。

彼は細君の事をかつて考えずにノートばかり作っていた。彼女の里へ顔を出そうなどという気はまるで起らなかった。彼女の病氣に対する懸念も悉く消えてしまった。

「病氣になっても父母が付いているじゃないか。もし悪ければ何とかいって来るだろう」

彼の心は二人一所にいる時よりも遙はるかに平静であつた。

細君の關係者に会わないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも会いに行かなかった。その代り向うでも来なかった。彼はたった一人で、日中の勉強につづく涼しい夜を散歩に費やした。そう

して継布つぎのあたった青い蚊帳かやの中に入つて寐ねた。

一カ月あまりすると細君が突然遣つて来た。その時健三は日のかぎった夕暮の空の下に、広くもない庭先を逍遙あちこちしていた。彼の歩みが書斎の縁側の前へ来た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸しおりどの影から急に姿を現わした。

「貴夫故あなたもとのようになって下さらなくつて」

健三は細君の穿はいている下駄げたの表が変にささくれて、その後うしろの方が如何いかにも見苦しく擦すり減らされているのに気が付いた。彼は憐あわれになった。紙入の中から三枚の一円紙幣を出して細君の手に握にぎらせた。

「見つともないからこれで下駄でも買ったら好いだろう」

細君が帰ってから幾日いくか目か経った後のち、彼女の母は始めて健三を訪ずれた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一遍彼らを引取ってくれという主意を畳の上で布衍ふえんしたに過ぎなかった。既に本人に帰りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な挙動ふるまいであつた。彼は一も二もなく承知した。細君はまた子供を連れて駒込こまごめへ歸つて来た。しかし彼女の態度は里へ行く前と毫ごうも違つていなかった。健三は心のうちで彼女の母に騙だまされたような気がした。

こうした夏中の出来事を自分だけで繰り返して見るたびに、彼



は不愉快になった。これが何時まで続くのだろうかと考えたりした。

## 五十六

同時に島田はちよいちよい健三の所へ顔を出す事を忘れなかった。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれつきりだという懸念がなおさら彼を蒼蠅うるさくした。健三は時々書斎に入つて、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかった。

「いい紙入ですね。へええ。外国のものはやっぱりどこか違いま

すね」

島田は大きな二つ折を手にとって、さも感服したらしく、裏表を打返して眺めたりした。

「失礼ながらこれでどの位します。あちらでは」

「たしか十志シリングだったと思います。日本の金にすると、まあ五円位なものでしょう」

「五円？——五円は随分好い価ねですね。浅草あさくさの黒船町くろふねちやうに古くから私わたしの知ってる袋物屋があるが、彼所あそこならもつとずっと安く拵こしらえてくれますよ。こんだ要いる時にや、私が頼んで上げましょう」

健三の紙入は何時も充実していなかった。全く空虚かの時もあつ

た。そういう場合には、仕方がないので何時まで経っても立ち上がらなかった。島田も何かに事寄せて尻しりを長くした。

「小遣を遣やらないうちは帰らない。厭いやな奴だ」

健三は腹の内で憤った。しかしいくら迷惑を感じても細君の方から特別に金を取って老人に渡す事はしなかった。細君もその位な事ならといった風をして別に苦情を鳴らさなかった。

そうこうしているうちに、島田の態度が段々積極的になって来た。二十、三十と纏まとった金を、平氣に向うから請求せいきうし始めた。

「どうか一つ。私もこの年になって倚かかる子はなし、依怙たよりにするのは貴方あなた一人なんだから」

彼は自分の言葉遣いの横着さ加減にさえ気が付いていなかった。それでも健三がむっとして黙っていると、凹くぼんだ鈍い眼を狡こつ猾かつらしく動かして、じろじろ彼の様子を眺める事を忘れなかった。

「これだけの生活くらしをしていて、十や二十の金の出来ないはずはない」

彼はこんな事まで口へ出していった。

彼が帰ると、健三は厭な顔をして細君に向った。

「ありや成し崩しに己おれを侵蝕しんしょくする気なんだね。始め一度に攻め落そうとして断られたもんだから、今度は遠巻にしてじりじり寄っ

て来ようってんだ。実に厭な奴だ」

健三は腹が立ちさえすれば、よく実にとか一番とか大とかいう最大級を使って鬱憤うつぶんの一端を洩もらしたがる男であった。こんな点になると細君の方はしぶとい代りに大分落付だいぶんおちついていた。

「貴夫あなたが引つ掛るから悪いのよ。だから始めから用心して寄せ付けないようになされば好いのに」

健三はその位の事なら最初から心得ているといわぬばかりの様子を、むっとした頬ほおと唇とに見せた。

「絶交しようと思えば何時だって出来るさ」

「しかし今まで付合っただけが損になるじゃありませんか」

「そりゃ何の関係もない御前から見ればそうさ。しかし己は御前とは違うんだ」

細君には健三の意味が能く通じなかった。

「どうせ貴夫の眼から見たら、妾なんぞは馬鹿でしょうよ」

健三は彼女の誤解を正してやるのさえ面倒になった。

二人の間に感情の行違ゆきちがいでもある時は、これだけの会話すら交換されなかった。彼は島田の後影うしろかげを見送ったまま黙もくってすぐ書斎へ入った。そこで書物も読まず筆も執らずただ凝じつと坐すわっていた。細君の方でも、家庭と切り離されたようなこの孤独な人に何時いつまでも構けう気色しきを見せなかった。夫が自分の勝手に座敷牢ざしきろうへ入っ

るのだから仕方がない位に考えて、まるで取り合ずにいた。

## 五十七

健三の心は紙屑かみくずを丸めたようにくしゃくしゃした。時によると肝癰かんしゃくの電流を何かの機会に応じて外ほかへ洩もらさなければ苦しくって居いた堪たまれなくなつた。彼は子供が母に強請せびつて買つてもらつた草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴け飛とばして見たりした。赤ちやけた素焼すやきの鉢が彼の思い通りにがらがらと破われるのさえ彼には多少の満足になつた。けれども残酷むごたらしく摧くだかれたその花と莖

の憐れ<sup>あわ</sup>な姿を見るや否や、彼はすぐまた一種の果敢<sup>はか</sup>ない気分<sup>きぶん</sup>に打ち勝たれた。何にも知らない我子の、嬉<sup>うれ</sup>しがっている美しい慰みを、無慈悲に破壊したのは、彼らの父であるという自覚は、なおさら彼を悲しくした。彼は半ば自分の行為を悔いた。しかしその子供の前にわが非を自白する事は敢<sup>あえ</sup>てし得なかつた。

「己<sup>おれ</sup>の責任<sup>ひつぎよう</sup>じゃない。必竟<sup>ひつぎよう</sup>こんな氣違<sup>きちがひ</sup>じみた真似<sup>まね</sup>を己にさせるものは誰だ。そいつが悪いんだ」

彼の腹の底には何時でもこういう弁解が潜<sup>ひそ</sup>んでいた。

平静な会話は波だった彼の氣分を沈めるに必要であつた。しかし人を避ける彼に、その会話の届きようはずはなかつた。彼は一



人いて一人自分の熱で燻<sup>くす</sup>ぶるような心持がした。常でさえ有難くない保険会社の勧誘員などの名刺を見ると、大きな声をして罪もない取次の下女<sup>げじよ</sup>を叱<sup>しか</sup>った。その声は玄関に立っている勧誘員の耳にまで明らかに響いた。彼はあとで自分の態度を恥<sup>はじ</sup>た。少なくとも好意を以て一般の人類に接する事の出来ない己<sup>おの</sup>れを怒<sup>いか</sup>った。同時に子供の植木鉢を蹴飛ばした場合と同じような言訳を、堂々と心の裡<sup>うち</sup>で読み上げた。

「己<sup>おれ</sup>が悪いのじゃない。己の悪くない事は、仮令<sup>たと</sup>あの男に解<sup>い</sup>つていなくつても、己には能<sup>よ</sup>く解<sup>い</sup>っている」

無信心な彼はどうしても、「神には能く解<sup>い</sup>っている」という事

が出来なかった。もしそういい得たならばどんなに仕合せだろうという気さえ起らなかった。彼の道徳は何時でも自己に始まった。そうして自己に終るぎりであった。

彼は時々金の事を考えた。何故物質的の富を目標として今日まで働いて来なかったのだろうと疑う日もあった。

「己だって、専門にその方ばかり遣りや」

彼の心にはこんな己惚おのぼれもあった。

彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮し向に悩んでいるのを気の毒に思った。極めて低級な慾望で、朝から晩まで齷齪あくせくしているよう

な島田をさえ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。そうして金より外には何にも欲しくないのだ」

こう考えて見ると、自分が今まで何をして来たのか解らなくなつた。

彼は元来儲ける事の下手な男であつた。儲けられてもその方に使う時間を惜がる男であつた。卒業したてに、悉く他の口を断つて、ただ一つの学校から四十円貰つて、それで満足していた。彼はその四十円の半分を阿爺おやじに取られた。残る二十円で、古い寺の座敷を借りて、芋や油揚げあぶらげばかり食っていた。しかし彼はその間に

遂に何事も仕出かさなかった。

その時分の彼と今の彼とは色々な点において大分<sup>だいぶん</sup>変っていた。けれども経済に余裕<sup>ゆとり</sup>のないのと、遂に何事も仕出かさないのとは、どこまで行っても変りがなさそうに見えた。

彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうちどっちかに中途半端な自分を片付けたくなった。しかし今から金持になるのは迂闊<sup>うかつ</sup>な彼に取ってももう遅かった。偉くなろうとすればまた色々な塵<sup>ちり</sup>勞<sup>らう</sup>が邪魔をした。その塵勞の種をよくよく調べて見ると、やっぱり金のないのが大原因になっていた。どうして好<sup>い</sup>いか解らない彼はしきりに焦<sup>じ</sup>れた。金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼

に這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つて来るにはまだ大分間<sup>ま</sup>があつた。

## 五十八

健三は外国から歸つて来た時、既に金の必要を感じた。久しぶりにわが生れ故郷の東京に新らしい世帯を持つ事になつた彼の懷中には一片の銀貨さえなかつた。

彼は日本を立つ時、その妻子を細君の父に託した。父は自分の邸内にある小<sup>ち</sup>さな家を空けて彼らの住居<sup>すまい</sup>に充てた。細君の祖父母が亡くなるまでいたその家は狭いながらさほど見苦しくもなかつ

た。張交はりまぜの襖ふすまには南湖なんこの画えだの鵬齋ぼうさいの書だの、すべて亡くなつた人の趣味を偲しのばせる記念かたみと見るべきものさえ故もとの通り貼はり付けてあつた。

父は官吏であつた。大して派出はでな暮しの出来る身分ではなかつたけれども、留守中手元に預かつた自分の娘や娘の子に、苦しい思いをさせるほど窮してもいながつた。その上健三の細君へは月々いくらかの手当が公けから下りた。健三は安心してわが家族を後に遺した。

彼が外国にいるうち内閣が變つた。その時細君の父は比較的安ある全な閑職からまた引張出されて劇はげしく活動しなければならぬ或

位置に就いた。不幸にしてその新らしい内閣はすぐ倒れた。父は崩壊の渦の中に捲き込まれなければならなかった。

遠い所でこの変化を聴いた健三は、同情に充ちた眼を故郷の空に向けた。けれども細君の父の経済状態に関しては別に顧慮する必要のないものとして、殆んど心を悩ませなかった。

迂闊な彼は帰ってから其所に注意を払わなかった。また気も付かなかった。彼は細君が月々貰う二十円だけでも子供二人に下女を使つて充分遣つて行ける位に考えていた。

「何しろ家賃が出ないんだから」

こんな呑気な想像が、実際を見た彼の眼を驚愕で丸くさせた。

細君は夫の留守中に自分の不断着をことごとく着切つてしまつた。仕方がないので、しまいには健三の置いて行つた地味じみな男物を縫い直して身に纏まとつた。同時に蒲団ふとんからは綿が出た。夜具は裂けた。それでも傍そばに見ている父はどうして遣る訳にも行かなかつた。彼は自分の位地を失つた後あと、相場に手を出して、多くもない貯蓄ちちくを悉く亡くしてしまつたのである。

首の回らないほど高い襟カラを掛けて外国から歸つて来た健三は、この惨澹みじめな境遇に置かれたわが妻子を黙つて眺めなければならなかつた。ハイカラな彼はアイロニーのために手非道てひどく打ち据えられた。彼の唇は苦笑する勇氣さえ有もたなかつた。



その内彼の荷物が着いた。細君に指輪一つ買って来なかった彼の荷物は、書籍だけであつた。狭苦しい隠居所のなかで、彼はその箱の蓋ふたさえ開ける事の出来ないのを馬鹿らしく思った。彼は新しい家を探し始めた。同時に金の工面もしなければならなかった。

彼は唯一の手段として、今まで継続して来た自分の職を辞した。彼はその行為に伴なつて起る必然な結果として、一時いちじしきん賜金を受取る事が出来た。一年勤めれば役をやめた時に月給の半額をくれるという規定に従つて彼の手に入つたその金額は、無論大したものではなかつた。けれども彼はそれで漸やっと日常生活に必要な家

具家財を調えた。ととの

彼は僅わずばかりの金を懷かにして、或る古い友達と一所に方々の道具屋などを見て歩いた。その友達がまた品物の如何いかんにかかわらずむやみに価切ねぎり倒す癖を有っているので、彼はただ歩くために少なからぬ時間を費やさされた。茶盆、烟草タバコ盆、火鉢ひばち、井鉢どんぶり、眼に入るものはいくらでもあつたが、買えるのは滅多に出て来なかつた。これだけに負けて置けと命令するようについて、もし主人がその通りにしないと、友達は健三を店先に残したまま、さつさと先へ歩いて行つた。健三も仕方なしに後を追懸おっかけなければならなかつた。たまに愚図々々していると、彼は大きな声を出して遠く

から健三を呼んだ。彼は親切な男であつた。同時に自分の物を買うのか他の物を買うのか、その区別を弁えていないように猛烈な男であつた。

## 五十九

健三はまた日常使用する家具の外に、本棚だの机だのを新調しなければならなかつた。彼は洋風の指物を渡世にする男の店先に立つて、しきりに算盤を弾く主人と談判をした。

彼の詭えた本棚には硝子戸も後部も着いていなかった。塵埃の

積る位は懷中に余裕のない彼の意とする所ではなかった。木がよく枯れていないので、重い洋書を載せると、棚板が気の引けるほど撓しなった。

こんな粗末な道具ばかりを揃えるのにさえ彼は少からぬ時間を費やした。わざわざ辞職して貰もらった金は何時の間にかもうなくなっていた。迂闊うかつな彼は不思議そうな眼を開いて、索然たる彼の新居を見廻した。そうして外国にいる時、衣服を作る必要に逼せまられて、同宿の男から借りた金はどうして返して好いいか分らなくなってしまったように思い出した。

そこへその男からもし都合が付くなら算段してもらいたいとい

う催促状が届いた。健三は新らしく拵えた高い机の前に坐つて、少時彼の手紙を眺めていた。

僅の間とはいいいながら、遠い国で一所に暮したその人の記憶は、健三に取って淡い新しさを帯びていた。その人は彼と同じ学校の出身であつた。卒業の年もそう違わなかつた。けれども立派な御役人として、ある重要な事項取調のためという名義の下に、官命で遣つて来たその人の財力と健三の給費との間には、殆んど比較にならないほどの懸隔があつた。

彼は寢室の外に応接間も借りていた。夜になると襦子で作つた刺繍のある綺麗な寝衣を着て、暖かそうに暖炉の前で書物などを

読んでいた。北向の狭苦しい部屋で押し込められたように凝<sup>じっ</sup>と竦<sup>すく</sup>んでゐる健三は、ひそかに彼の境遇を羨<sup>うらや</sup>んだ。

その健三には昼食<sup>ちゆうじき</sup>を節約した憐<sup>あわ</sup>れな経験さえあつた。ある時の彼は表へ出た帰掛<sup>かえりがけ</sup>に途中で買ったサンドウィッチを食いながら、広い公園の中を目的<sup>めあて</sup>もなく歩いた。斜めに吹きかける雨を片々<sup>かたかた</sup>の手に持った傘で防<sup>よ</sup>けつつ、片々の手で薄く切った肉と麵<sup>パン</sup>麩<sup>ふ</sup>を何度にも頬張<sup>ほおば</sup>るのが非常に苦しかった。彼は幾たびか其所<sup>そこ</sup>にあるベンチへ腰<sup>おろ</sup>を卸そうとしては躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>した。ベンチは雨のために悉く濡<sup>ぬ</sup>れていたのである。

ある時の彼は町で買って来たビスケットの缶<sup>ひる</sup>を午<sup>ひる</sup>になると開い

た。そうして湯も水も吞のまずに、硬くて脆もろいものをぼりぼり噛かみ  
摧くだいては、生唾なまつばきの力で無理に嚙のみ下くだした。

ある時の彼はまた馭ぎよ者や労働者と一所に如何いわしい一膳飯屋いちぜんめしやで  
形かたばかりの食事を済ました。其所の腰掛の後部うしろは高い屏風びょうぶのよう  
に切立きつたっているので、普通の食堂の如く、広い室へやを一目に見渡す  
事は出来なかったが、自分と一列に並んでいるものの顔だけは自  
由に眺められた。それは皆な何時湯に入ったか分らない顔であつ  
た。

こんな生活をしている健三が、この同宿の男の眼にはさも気の  
毒に映ったと見えて、彼は能よく健三を午餐ひるめしに誘い出した。銭湯へ

も案内した。茶の時刻には向うから呼びに来た。健三が彼から金を借りたのはこうして彼と大分<sup>だいぶん</sup>懇意になつた時の事であつた。

その時彼は反故<sup>ほご</sup>でも棄<sup>す</sup>てるように無雑作な態度を見せて、五磅<sup>ポンド</sup>のバンクノートを二枚健三の手に渡した。何時返してくれとは無論いわなかつた。健三の方でも日本へ帰ったらどうにかなるだろう位に考えた。

日本へ歸つた健三は能くこのバンクノートの事を覚えていた。けれども催促状を受取るまでは、それほど急に返す必要が出て来<sup>き</sup>ようとは思わなかつた。行き詰つた彼は仕方なしに、一人の旧い<sup>ふる</sup>友達の所へ出掛けて行つた。彼はその友達の大した金持でない事



を承知していた。しかし自分よりも少しは融通の利く地位にある事も呑み込んでいた。友達は果して彼の請求を容れて、要るだけの金を彼の前に揃えてくれた。彼は早速それを外国で恩を受けた人の許へ返しに行った。新らしく借りた友達へは月に十円ずつの割で成し崩しに取ってもらう事に極めた。

## 六十

こんな具合にして漸と東京に落付いた健三は、物質的に見た自分の、如何にも貧弱なのに気が付いた。それでも金力を離れた他

の方面において自分が優者であるという自覚が絶えず彼の心に往來する間は幸福であつた。その自覚が遂に金の問題で色々に攪き乱されてくる時、彼は始めて反省した。平生何心なく身に着けて外へ出る黒木綿くろもめんの紋付さえ、無能力の証拠のように思われ出した。

「この己おれをまた強請せびりに来る奴がいるんだから非道ひどい」

彼は最も質たちの悪いその種の代表者として島田の事を考えた。

今の自分がどの方角から眺めても島田より好い社会的地位を占めているのは明白な事実であつた。それが彼の虚栄心に少しの反響も与えないのもまた明白な事実であつた。昔し自分を呼び捨て

にした人から今となつて鄭寧ていねいな挨拶あいさつを受けるのは、彼に取つて何の満足にもならなかつた。小遣こづかいの財源のように見込まれるのは、自分を貧乏人と見倣みなしている彼の立場から見て、腹が立つただけであつた。

彼は念のために姉の意見を訊たずねて見た。

「一体どの位困つてるんでしょうね、あの男は」

「そうさね。そう度々無心をいつて来るようじゃ、随分苦しいのかも知れないね。だけど健ちゃんだってそうそう他ひとにばかり貢みついでいた日にや際限がないからね。いくら御金が取れたつて」

「御金がそんなに取れるように見えますか」

「だって宅<sup>うち</sup>なんぞに比べれば、御前さん、御金がいくらでも取れる方じゃないか」

姉は自分の宅の活計<sup>くわい</sup>を標準にしていた。相変らず口数の多い彼女は、比田<sup>ひだ</sup>が月々貰<sup>もら</sup>うものを満足に持つて帰った例<sup>ためし</sup>のない事や、俸給の少ない割に交際費の要<sup>い</sup>る事や、宿直が多いので弁当代だけでも随分の額<sup>たか</sup>に上<sup>のぼ</sup>る事や、毎月の不足はやつと盆暮の賞与で間に合わせている事などを詳しく健三に話して聞かせた。

「その賞与だって、そつくり私<sup>あたし</sup>の手に渡してくれるんじゃないんだからね。だけど近頃じゃ私たち二人はまあ隠居見たようなもので、月々食料を彦<sup>ひこ</sup>さんの方へ遣<sup>や</sup>つて賄<sup>まか</sup>なつてもらつてゐるんだか

ら、少しは楽にならねりやならない訳さ」

養子と経済を別々にしながら一所の家に住んでいた姉夫婦は、自分たちの搗いた餅だの、自分たちの買った砂糖だのという特別な食物を有っていた。自分たちの所へ来た客に出す御馳走などもしっかりと自分たちの懷中から払う事に行っているらしかった。健三は殆んど考えの及ばないような眼付をして、極端に近い一種の個人主義の下に存在しているこの一家の経済状態を眺めた。しかし主義も理窟も有たない姉にはまたこれほど自然な現象はなかったのである。

「健ちゃんなんざ、こんな真似をしなくっても済むんだから好い

やあね。それに腕があるんだから、稼ぎさいすりゃいくらでも欲しいだけの御金は取れるしさ」

彼女のいう事を黙って聞いていると、島田などはどこへ行ったか分らなくなってしまうがちであつた。それでも彼女は最後に付け加えた。

「まあ好いやね。面倒臭めんどくさくなったら、その内都合の好い時に上げましようとか何とかいって帰してしまえば。それでも蒼蠅うるさいなら留守を御遣いよ。構う事はないから」

この注意は如何いかにも姉らしく健三の耳に響いた。

姉から要領を得られなかった彼はまた比田を捉つかまえて同じ質問

を掛けて見た。比田はただ、大丈夫というだけであつた。

「何しろ故もとの通りあの地面と家作かさくを有つてゐるんだから、そう困つていない事は慥たしかでさあ。それに御藤さんの方へは御縫おぬいさんの方がらちゃんちゃんと送金はあるしさ。何でも好い加減な事をいつて来るに違ないから放つて御置きなさい」

比田のいう事もやっぱり好い加減の範圍を脱し得ない上うわつ調子ちようしのものには相違なかつた。

しまいに健三は細君に向った。

「一体どういうんだろう、今の島田の実際の境遇っていうのは。姉に訊きいても比田に訊いても、本当の所が能よく分らないが」

細君は気のなさそうに夫の顔を見上げた。彼女は産に間もない大きな腹を苦しそうに抱えて、朱塗しゅぬりの船底枕ふなぞこまくらの上に乱れた頭を載せていた。

「そんなに気になさるなら、御自分で直じかに調べて御覧になるが好いいじゃありませんか。そうすればすぐ分るでしょう。御姉おあねさんだって、今あの人と交際つきあっていらっしやらないんだから、そんな確たしかな事の知れているはずがないと思いますわ」



「己<sup>おれ</sup>にはそんな暇なんかないよ」

「それじゃ放って御置きになればそれまででしょう」

細君の返事には、男らしくもないという意味で、健三を非難する調子があつた。腹で思っている事でもそうむやみに口へ出していわない性質<sup>たち</sup>に出来上つた彼女は、自分の生家<sup>さと</sup>と夫との面白くない間柄についてさえ、余り言葉に現わしてつべこべ并じ立てなかつた。自分と関係のない島田の事などはまるで知らないふりをして澄ましている日も少なくなかつた。彼女の持った心の鏡に映る神経質な夫の影は、いつも度胸のない偏窟<sup>へんくつ</sup>な男であつた。

「放って置け？」

健三は反問した。細君は答えなかった。

「今までだって放って置いてるじゃないか」

細君はなお答えなかった。健三はぷいと立って書斎へ入った。

島田の事に限らず二人の間にはこういう光景が能く繰り返された。その代り前後の関係で反対の場合も時には起った。――

「御縫さんが脊髄病せきずいびょうなんだそうだ」

「脊髄病じゃ六むずかしいでしょう」

「とても助かる見込はないんだとさ。それで島田が心配しているんだ。あの人しばのが死ぬと柴野おふじと御藤さんとの縁が切れてしまうから、今まで毎月送ってくれた例の金が来なくなるかも知れないっ

てね」

「可哀想かわいそうね今から脊髄病なんぞに罹かかっちゃ。まだ若いんでしよう」

「己おれより一つ上だって話したじゃないか」

「子供はあるの」

「何でも沢山あるような様子だ。幾人いくたりだか能く訊きいて見ないが」

細君は成人しない多くの子供を後へ遺して死に行く、まだ四十に充みたない夫人の心持を想像に描いた。間近に逼せまったわが産の結果も新たに氣遣われ始めた。重そうな腹を眼の前に見ながら、それほど心配もしてくれない男の気分が、情なさけなくもありまた羨うらやま

しくもあつた。夫はまるで気が付かなかつた。

「島田がそんな心配をするのも必竟は平生ひつきやうが悪いからなんだろうよ。何でも嫌われているらしいんだ。島田にいわせると、その柴野という男が酒食さけくらいで喧嘩けんか早くつぱやつて、それで何時まで経つても出世が出来なくつて、仕方がないんだそうだけれども、どうもそればかりじゃないらしい。やっぱり島田の方が愛想あいそを尽かされているに違ないんだ」

「愛想を尽かされなくつたつて、そんなに子供が沢山あつちやどうする事も出来ないでしょう」

「そうさ。軍人だから大方己と同じように貧乏しているんだろう」

よ」

「一体あの人はどうしてその御藤さんて人と——」

細君は少し躊躇ちゆうちゆうした。健三には意味が解らなかつた。細君はい直した。

「どうしてその御藤さんて人と懇意になつたんでしよう」

御藤さんがまだ若い未亡人びぼうじんであつた頃、何かの用で扱所あつかいじよへ出な

ければならない事の起つた時、島田はそういう場所へ出つけない

女一人を、氣の毒に思つて、色々親切に世話をして遣やつたのが、

二人の間に關係の付く始まりだと、健三は小さい時分に誰かから聴いて知っていた。しかし恋愛という意味をどう島田に応用して

好いか、今の彼には解らなかった。

「慾<sup>よく</sup>も手伝ったに違ないね」

細君は何ともいわなかった。

## 六十二

不治<sup>ふじ</sup>の病気に悩まされているという御縫さんについての報知<sup>たより</sup>が健三の心を和<sup>やわら</sup>げた。何年ぶりにも顔を合せた事のない彼とその人とは、度々会わなければならなかった昔でさえ、殆<sup>ほと</sup>んど親しく口を利いた例<sup>ためし</sup>がなかった。席に着くときも座を立つときも、大抵は

黙礼を取り換わせるだけで済ましていた。もし交際という文字をこんな間柄にも使い得るならば、二人の交際は極めて淡くそうして軽いものであった。強烈な好<sup>い</sup>印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁されていないその人の面影<sup>おもかげ</sup>は、島田や御常のそれよりも、今の彼に取って遙かに尊<sup>たつと</sup>かった。人類に対する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から唆<sup>そそ</sup>り得る点において。また漠然として散漫な人類を、比較<sup>はつきり</sup>的判明した一人の代表者に縮めてくれる点において。——彼は死のうとしているその人の姿を、同情の眼を開いて遠くに眺めた。

それと共に彼の胸には一種の利害心が働いた。何時起るかも知

れない御縫さんの死は、狡猾な島田にまた彼を強請る口実を与へるに違なかつた。明らかにそれを予想した彼は、出来る限りそれを避けたいと思つた。しかし彼はこの場合どうして避けるかの策略を講ずる男ではなかつた。

「衝突して破裂するまで行くより外に仕方がない」

彼はこう観念した。彼は手を拱いで島田の来るのを待ち受けた。その島田の来る前に突然彼の敵の御常が訪ねて来ようとは、彼も思い掛けなかつた。

細君は何時もの通り書斎に坐っている彼の前に出て、「あの波多野<sup>たの</sup>って御婆<sup>おばあ</sup>さんがとうとう遣<sup>や</sup>つて来ましたよ」といった。彼は



驚ろくよりもむしろ迷惑そうな顔をした。細君にはその態度が愚  
図々々している臆病おくびょうもののように見えた。

「御会いになりますか」

それは、会うなら会う、断るなら断る、早くどっちかに極きめた  
ら好かろうという言葉の遣つかい方であつた。

「会うから上げろ」

彼は島田の来た時と同じ挨拶あいさつをした。細君は重苦しそうに身を  
起して奥へ立った。

座敷へ出た時、彼は粗末な衣服を身に纏まとつて、丸まっちく坐つ  
ている一人の婆さんを見た。彼の心で想像していた御常とは全く

変っているその質朴な風采が、島田よりも遙かに強く彼を驚ろかした。

彼女の態度も島田に比べるとむしろ反対であつた。彼女はまるで身分の懸隔でもある人の前へ出たような様子で、鄭寧に頭を下げた。言葉遣も殷勤を極めたものであつた。

健三は小供の時分能く聞かされた彼女の生家の話を思い出した。田舎にあつたその住居も庭園も、彼女の叙述によると、善を尽し美を尽した立派なものであつた。床の下を水が縦横に流れているという特色が、彼女の何時でも繰り返す重要な点であつた。南天の柱——そういう言葉もまだ健三の耳に残っていた。しかし

小さい健三はその宏大な屋敷がどこの田舎にあるのかまるで知らなかった。それから一度も其所へ連れて行かれた覚えがなかった。彼女自身も、健三の知っている限り、一度も自分の生れたその大きな家へ歸った事がなかった。彼女の性格を臃氣ながら見抜くように、彼の批評眼がだんだん肥えて来た時、彼はそれもまた彼女の空想から出る例の法螺ではないかと考え出した。

健三は自分を出来るだけ富有に、上品に、そして善良に、見せたがったその女と、今彼の前に畏まって坐っている白髪頭の御婆さんとを比較して、時間の齎した対照に不思議そうな眼を注いだ。

御常は昔から肥<sup>ふと</sup>り肉<sup>じし</sup>の女であつた。今見る御常も依然として肥<sup>ふと</sup>っていた。どつちかという<sup>うたがわ</sup>と、昔よりも今の方がかえつて肥<sup>ふと</sup>ていはしまいかと疑<sup>うたがわ</sup>れる位であつた。それにもかかわらず、彼女は全く変化していた。どこから見ても田舎育ちの御婆さんであつた。多少誇張していえば、籠<sup>かご</sup>に入れた麦焦<sup>むぎこが</sup>しを背中<sup>しよ</sup>へ脊負<sup>しよ</sup>つて近在から出て来る御婆さんであつた。

## 六十三

「ああ変つた」

顔を見合せた刹那に双方は同じ事を一度に感じ合った。けれどもわざわざ訪ねて来た御常の方には、この変化に対する予期と準備が充分にあつた。ところが健三にはそれが殆んど欠けていた。従つて不意に打たれたものは客よりもむしろ主人であつた。それでも健三は大して驚ろいた様子を見せなかつた。彼の性質が彼にそうしろと命令する外に、彼は御常の技巧から溢れ出る戯曲的動作を恐れた。今更この女の遣る芝居を事新らしく観せられるのは、彼に取つて堪えがたい苦痛であつた。なるべくなら彼は先方の弱点を未然に防ぎたかつた。それは彼女のためでもあり、また自分のためでもあつた。

彼は彼女から今までの経歴をあらまし聞き取った。その間には人世と切り離す事の出来ない多少の不幸が相応に纏綿しているらしく見えた。

島田と別れてから二度目に嫁づいた波多野と彼女との間にも子が生れなかったので、二人は或所から養女を貰って、それを育てる事にした。波多野が死んで何年目にか、あるいはまだ生きている時分にか、それは御常もいわなかったが、その貰い娘に養子が来たのである。

養子の商売は酒屋であつた。店は東京のうちでも随分繁華な所にあつた。どの位な程度の活計をしていたものか能く分らない

が、困ったとか、窮したとかいう弱い言葉は御常の口を洩れなかつた。

その内養子が戦争に出て死んだので、女だけでは店が持ち切れなくなった。親子はやむをえずそれを畳んで、郊外近くに住んでいる或身縁みよりを頼りに、ずっと辺鄙へんぴな所へ引越した。其所そこで娘に二度目の夫が出来るまでは、死んだ養子の遺族へ毎年まいねん下がる扶助料だけで活計くわしを立てて行つた。……

御常の物語りは健三の予期に反してむしろ平静であつた。誇張した身ぶりだの、仰山な言葉遣だの、当込あてこみの台詞せりふだのは、それほど多く出て来なかつた。それにもかかわらず彼は自分とこの御婆おばあ

さんの間に、少しの気脈も通じていない事に気が付いた。

「ああそうですか、それはどうも」

健三の挨拶は簡単であつた。普通の受答えとしても短過ぎるこの一句を彼女に与えたぎりで、彼は別段物足りなさを感じ得なかつた。

「昔の因果が今でもやっぱり崇たつているんだ」

こう思った彼はさすがに好い心持がしなかつた。どっちかという泣きたがらない質たちに生れながら、時々は何故なぜ本当に泣ける人や、泣ける場合が、自分の前に出て来てくれないのかと考えるのが彼の持前であつた。



「己おれの眼は何時でも涙が湧わいて出るように出来ているのに」  
彼は丸まっちくなくなつて座蒲団ざぶとんの上に坐すわっている御婆さんの姿を熟視した。そうして自分の眼に涙を宿す事を許さない彼女の性格を悲しく観じた。

彼は紙入の中にあつた五円紙幣を出して彼女の前に置いた。

「失礼ですが、車へでも乗つて御帰り下さい」

彼女はそういう意味で訪問したのではないといつて一応辞退した上、健三からの贈りものを受け納めた。気の毒な事に、その贈り物の中には、疎うとい同情が入っているだけで、露あらわな真心は籠こもつていなかった。彼女はそれを能く承知しているように見えた。そ

うして何時の間にか離れ離れになった人間の心と心は、今更取り返しの付かないものだから、諦<sup>あきら</sup>めるより外に仕方がないという風にふるまった。彼は玄関に立って、御常の帰って行く後姿を見送った。

「もしあの憐<sup>あわれ</sup>な御婆さんが善人であつたなら、私は泣<sup>わたし</sup>く事が出来たろう。泣けないまでも、相手の心をもっと満足させる事が出来たろう。零落した昔しの養い親を引き取って死水<sup>しにみず</sup>を取って遣る事も出来たろう」

黙ってこう考えた健三の腹の中は誰も知る者がなかった。

## 六十四

「とうとう遣<sup>や</sup>つて来たのね、御婆<sup>おばあ</sup>さんも。今までは御爺<sup>おじい</sup>さんだけだったのが、御爺さんと御婆さんと二人になったのね。これから<sup>ふたあり</sup>は二人に崇<sup>たた</sup>られるんですよ、貴夫<sup>あなた</sup>は」

細君の言葉は珍らしく乾<sup>はし</sup>燥<sup>しゃ</sup>いでいた。笑談<sup>じょうだん</sup>とも付かず、冷評<sup>ひやかし</sup>とも付かないその態度が、感想に沈んだ健三の気分を不快に刺戟<sup>しげき</sup>した。彼は何とも答えなかった。

「またあの事をいったでしょう」

細君は同じ調子で健三に訊<sup>き</sup>いた。

「あの事は何だい」

「貴夫が小さいうち寐ね小便しょうべんをして、あの御婆さんを困らしたって事よ」

健三は苦笑さえしなかった。

けれども彼の腹の中には、御常が何故なぜそれをいわなかったかの疑問が既に横よこたわっていた。彼女の名前を聞いた刹那せつなの健三は、すぐその弁口に思い到いたった位、御常は能く喋しゃべ舌る女であつた。ことに自分を護まもる事に巧みな技倆ぎりようを有もっていた。他の口車ひとに乗せられやすい、また見え透いた御世辞おせじを嬉うれしがりがちな健三の実父は、何時でも彼女を賞ほめる事を忘れなかった。

「感心な女だよ。だいち身上持しんしょうもちが好いいからな」

島田の家庭に風波の起った時、彼女はあるだけの言葉を父の前に並べ立てた。そうしてその言葉の上にまた悲しい涙と口惜くやしい涙とを多量に振り掛けた。父は全く感動した。すぐ彼女の味方になつてしまった。

御世辞が上手だという点において健三の父は彼の姉をも大変可かあ愛あいがつていた。無心に来られるたんびに、「そうそうは己おれだつて困るよ」とか何とかいいながら、いつか入用いりようだけの金子きんすは手文庫から取出されていた。

「比田はあんな奴だが、御夏が可愛想かわいそうだから」

姉の帰った後で、父は何時でも弁解らしい言葉を傍はたのものに聞こえるようにいった。

しかしこれほど父を自由にした姉の口先は、御常に比べると遙かに下手へたであつた。真まことしやかという点において遠く及ばなかつた。実際十六、七になつた時の健三は、彼女と接触した自分以外のもので、果してその性格を見抜いたものが何人あるだろうか  
と、一時疑つて見た位、彼女の口は旨うまかつた。

彼女に会うときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分この口にあつた。

「御前を育てたものはこの私わたしだよ」

この一句を二時間でも三時間でも布<sup>ふ</sup>衍<sup>えん</sup>して、幼少の時分恩になつた記憶をまた新らしく復習させられるのかと思うと、彼は辟<sup>へ</sup>易<sup>ぎ</sup>した。

「島田は御前の敵<sup>かたき</sup>だよ」

彼女は自分の頭の中に残っているこの古い主観を、活動写真のように誇張して、また彼の前に露<sup>さら</sup>け出すに極<sup>きま</sup>っていた。彼はそれにも辟易しない訳に行かなかつた。

どっちを聴くにしても涙が交<sup>まじ</sup>るに違なかつた。彼は裝飾的に使用されるその涙を見るに堪えないような心持がした。彼女は話す時に姉のような大きな声を出す女ではなかつた。けれども自分の

必要と思う場合には、その言葉に厭<sup>いや</sup>らしい強い力を入れた。円朝<sup>えんちよう</sup>の人情<sup>にんじようばなし</sup>嚙<sup>か</sup>に出て来る女が、長い火箸<sup>ひばし</sup>を灰の中に突き刺し突き刺し、他<sup>ひと</sup>に騙<sup>だま</sup>された恨<sup>うらみ</sup>を述べて、相手を困らせるのとほぼ同じ態度でまた同じ口調であつた。

彼の予期が外れた時、彼はそれを仕合せと考えるよりもむしろ不思議に思う位、御常<sup>ごじよう</sup>の性格が牢<sup>ろう</sup>として崩すべからざる判明<sup>はつきり</sup>した一種の型になつて、彼の頭のどこかに入っていたのである。

細君は彼のために説明した。

「三十年<sup>ぢか</sup>近くにもなる古い事じゃありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでしょう。それに大抵の人はもう忘れて



しまいまさあね。それから人間の性質だって長い間には少しずつ  
変って行きますからね」

遠慮、忘却、性質の変化、それらのものを前に並べて考えて見  
ても、健三には少しも合点がてんが行かなかった。

「そんな淡泊あっさりした女じゃない」

彼は腹の中でこういわなければどうしても承知が出来なかつ  
た。

御常を知らない細君はかえって夫の執拗しつおうを笑った。

「それが貴方あなたの癖だから仕方がない」

平生彼女へいせいの眼に映る健三の一部分はたしかにこうなのであった。ことに彼と自分の生家さととの関係について、夫のこの悪い癖へきが著るしく出ているように彼女は思っていた。

「己おれが執拗なのじゃない、あの女が執拗なのだ。あの女と交際つきあった事のない御前には、己の批評の正しさ加減が解らないからそんなあべこべをいうのだ」

「だって現に貴夫あなたの考えていた女とはまるで違った人になって貴夫の前へ出て来た以上は、貴夫の方で昔の考えを取り消すのが当

然じゃありませんか」

「本当に違った人になったのなら何時でも取り消すが、そうじゃないんだ。違ったのは上部<sup>うわべ</sup>だけで腹の中は故<sup>もと</sup>の通りなんだ」

「それがどうして分るの。新らしい材料も何にもないのに」

「御前に分らないでも己にはちゃんと分ってるよ」

「随分独断的ね、貴夫も」

「批評が中<sup>あた</sup>ってさえいれば独断的で一向差支<sup>さしつかえ</sup>ないものだ」

「しかしもし中<sup>おぼあ</sup>っていないなければ迷惑する人が大分<sup>だいぶん</sup>出て来るでしょう。あの御婆<sup>おばあ</sup>さんは私<sup>わたくし</sup>と関係のない人だから、どうしても構いませんけれども」

健三には細君の言葉が何を意味しているのか能く解った。しかし細君はそれ以上何もいわなかった。腹の中で自分の父母兄弟を弁護している彼女は、表向夫とおもてむきと遣り合って行ける所まで行く気はなかった。彼女は理智に富んだ性質ではなかった。

「面倒臭い」

少し込み入った議論の筋道を辿らなければならなくなると、彼女はきつとこういつて当面の問題を投げた。そうして解決を付けるまで進まないために起る面倒臭さは何時までも辛抱した。しかしその辛抱は自分自身に取って決して快よいものではなかった。健三から見るとなおさら心持が悪かった。

「執拗しつおうだ」

「執拗しつおうだ」

二人は両方で同じ非難の言葉を御互の上に投げかけ合った。そうして御互に腹の中にある蟠わだかまりを御互の素振そぶりから能く読んだ。しかもその非難に理由のある事もまた御互に認め合わなければならなかった。

我慢な健三は遂に細君の生家へ行かなくなった。何故行かないとも訊きかず、また時々行ってくれとも頼まずにただ黙っていた細君は、依然として「面倒臭うちい」を心の中に繰り返すぎりで、少しもその態度を改めようとしなかった。

「これで沢山だ」

「己もこれで沢山だ」

また同じ言葉が双方の胸のうちでしばしば繰り返された。

それでも護謨紐ゴムひものように弾力性のある二人の間柄には、時によ

り日によって多少の伸縮のびちぢみがあつた。非常に緊張して何時切れるか

分らないほどに行き詰つたかと思うと、それがまた自然の勢で

徐々そろそろ元へ戻つて来た。そうした日和ひよりの好い精神状態が少し継続す

ると、細君の唇から暖かい言葉が洩もれた。

「これは誰の子？」

健三の手を握つて、自分の腹の上に載せた細君は、彼にこんな

問を掛けたりした。その頃細君の腹はまだ今のようには大きくなかった。しかし彼女はこの時既に自分の胎内に蠢めき掛けていた生の脈搏を感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭に伝えようとしたのである。

「喧嘩をするのはつまり両方が悪いからですね」

彼女はこんな事もいった。それほど自分が悪いと思っていない頑固な健三も、微笑するより外に仕方がなかった。

「離れればいくら親しくつてもそれぎりになる代りに、一所にさえすれば、たとい敵同志でもどうにかこうにかなるものだ。つまりそれが人間なんだろう」

健三は立派な哲理でも考え出したように首を捻<sup>ひね</sup>った。

## 六十六

御常や島田の事以外に、兄と姉の消息も折々健三の耳に入っ  
た。

毎年<sup>まいとし</sup>時候が寒くなるときつと身体<sup>からだ</sup>に故障の起る兄は、秋口から  
また風邪<sup>かぜ</sup>を引いて一週間ほど局を休んだ揚句、気分の悪いのを押  
して出勤した結果、幾日<sup>いくか</sup>経つても熱が除<sup>と</sup>れないで苦しんでいた。  
「つい無理をするもんだから」



無理をして月給の寿命を長くするか、養生をして免職の時期を早めるか、彼には二つの内どっちかを<sup>えら</sup>択ぶより外に仕方がないように見えたのである。

「どうも<sup>ろくま</sup>肋膜らしいっていうんだがね」

彼は心細い顔をした。彼は死を恐れた。肉の消滅について何人<sup>なんびと</sup>よりも強い<sup>いふ</sup>畏怖の念を抱<sup>いだ</sup>いていた。そうして何人よりも強い速度で、その肉塊を減らして行かなければならなかった。

健三は細君に向っていった。――

「もう少し平気で休んでいられないものかな。責<sup>せ</sup>めて熱の失<sup>な</sup>くなら  
るまでも好<sup>い</sup>いから」

「そうしたいのは山々なんでしょうけれども、やッぱりそうは出来ないんでしょう」

健三は時々兄が死んだあとの家族を、ただ活計くわしの方面からのみ眺める事があつた。彼はそれを残酷ながら自然の眺め方として許していた。同時にそういう観察から逃のがれる事の出来ない自分に対して一種の不快を感じた。彼は苦い塩を嘗なめた。

「死にやしまいな」

「まさか」

細君は取り合わなかった。彼女はただ自分の大きな腹を持て余してばかりいた。生家さとと縁故のある産婆が、遠い所から俤くねに乗っ

て時々遣<sup>やっ</sup>て来た。彼はその産婆が何をしに来て、また何をして帰って行くのか全く知らなかった。

「腹でも揉<sup>も</sup>むのかい」

「まあそうです」

細君ははかばかしい返事さえしなかった。

その内兄の熱がころりと除<sup>と</sup>れた。

「御祈<sup>ごきとう</sup>祷をなすったんですって」

迷信家の細君は加持<sup>かじ</sup>、祈<sup>かみ</sup>祷、占<sup>しん</sup>い、神<sup>じん</sup>信心、大抵の事を好いていた。

「御前が勧めたんだろう」

「いいえそれが私わたくしなんぞの知らない妙な御祈祷なのよ。何でも髪かみ剃そりを頭の上へ載せて遣るんですって」

健三には髪剃の御蔭で、しこじらした体熱が除れようとも思えなかった。

「気のせいで熱が出るんだから、気のせいでそれがまた直すぐ除れるんだろうよ。髪剃でなくったって、杓子しゃくしでも鍋蓋なべぶたでも同じ事さ」

「しかしいくら御医者なほの薬を飲んでも癒なほらないもんだから、試しに遣って見たらどうだろうって勧められて、とうとう遣る気になったんですって、どうせ高い御祈祷代を払ったんじゃないんでしょう」

健三は腹の中で兄を馬鹿だと思った。また熱の除れるまで薬を飲む事の出来ない彼の内状を気の毒に思った。髪剃の御蔭でも何でも熱が除れさえすればまず仕合せだとも思った。

兄が癒ると共に姉がまた喘息ぜんそくで悩み出した。

「またかい」

健三は我知らずこういつて、ふと女房の持病を苦にしない比田の様子を想い浮べた。

「しかし今度は何時こんだもより重いんですって。ことによると六むずかしいかも知れないから、健三に見舞に行くようにそういつてくれって仰おつしやいました」

兄の注意を健三に伝えた細君は、重苦しそうに自分の尻しりを畳の上に着けた。

「少し立っていると御腹おなかの具合が変になって来て仕方がないんです。手なんぞ延ばして棚に載っているものなんかとても取れやしません」

産せまが逼るほど妊婦は運動すべきものだ位に考えていた健三は意外な顔をした。下腹部だの腰の周囲の感じがどんなに退儀であるかは全く彼の想像の外ほかにあつた。彼は活動を強しいる勇氣も自信も失なつた。

「私とても御見舞には参れませんか」

「無論御前は行かなくつても好い。己が行くから」

## 六十七

その頃の健三は宅<sup>うち</sup>へ帰ると甚しい倦怠<sup>けんたい</sup>を感じた。ただ仕事をした結果とばかりは考えられないこの疲労が、一層彼を出不精にした。彼はよく昼寐<sup>ひるね</sup>をした。机に倚<sup>よ</sup>つて書物を眼の前に開けている時ですら、睡魔に襲われる事がしばしばあつた。愕然<sup>がくぜん</sup>として仮寐<sup>うたたね</sup>の夢から覚めた時、失われた時間を取り返さなければならぬという感じが一層強く彼を刺撃<sup>しげき</sup>した。彼は遂に机の前を離れる事が

出来なくなつた。括り付けられた人のように書齋に凝としていた。彼の良心はいくら勉強が出来なくつても、いくら愚図々々していても、そういう風に凝と坐っていると彼に命令するのである。

かくして四、五日は徒らに過ぎた。健三が漸く津の守坂へ出掛けた時は六ずかしいかも知れないといった姉が、もう回復期に向つていた。

「まあ結構です」

彼は尋常の挨拶をした。けれども腹の中では狐にでも抓まれたような気がした。



「ああ、でも御蔭さまでね。——姉さんなんざあ、生きていたってどうせ他の厄介になるばかりで何の役にも立たないんだから、好い加減な時分に死ぬと丁度好いんだけど、やっぱり持って生れた寿命だと見えてこればかりは仕方がない」

姉は自分のいう裏を健三から聴きたい様子であつた。しかし彼は黙って烟草タバコを吹かしていた。こんな些細ささいの点にも姉弟きょうだいの氣風の相違は現われた。

「でも比田のいるうちは、いくら病身でも無能やぐぎでも私あたしが生きていて遣やらないと困るからね」

親類は亭主孝行という名で姉を評し合っていた。それは女房の

心尽しなどに対して余りに無頓着過ぎる比田を一方に置いてこの姉の態度を見ると、むしろ気の毒な位親切だったからである。

「あたし私や本当に損な生れ付でね。良人とはまるであべこべなんだから」

姉の夫思いは全く天性に違なかった。けれども比田が時として理の徹とおらない我儘わがままをいい募るように、彼女は訳の解らない実意立じついだてをしてかえって夫を厭いやがらせる事があった。それに彼女は縫針ぬいはりの道を心得ていなかった。手習てなういをさせても遊芸を仕込んでも何一つ覚える事の出来なかった彼女は、嫁に来てから今日こんにちまで、ついぞ夫の着物一枚縫った例ためしがなかった。それでいて彼女は人一倍勝気

な女であつた。子供の時分強情を張つた罰として土蔵の中に押し込められた時、小用こように行きたいから是非出してくれ、もし出さなければ倉の中で用を足すが好いかといつて、網戸の内外うちそとで母と論判をした話はいまだに健三の耳に残つていた。

そう思うと自分とは大変懸け隔つたようであり、その実どこか似通つた所のあるこの腹違はらちがひの姉の前に、彼は反省を強しいられた。

「姉はただ露骨なだけなんだ。教育の皮を剥むけば己おれだつて大した変りはないんだ」

平生へいせいの彼は教育の力を信じ過ぎていた。今の彼はその教育の力でどうする事も出来ない野生的な自分の存在を明らかに認めた。

かく事実の上において突然人間を平等に視た彼は、不断から輕蔑けいべつしていた姉に対して多少極きまりの悪い思をしなければならなかった。しかし姉は何にも気が付かなかった。

「御住おすみさんはどうです。もう直生じきれるんだろう」

「ええ落おつこちそうな腹をして苦しがつています」

「御産は苦しいもんだからね。私あたしも覚があるが」

久しく不妊性と思われていた姉は、片付いて何年目かになって始めて一人の男の子を生んだ。年齒としを取ってからういざんの初産だったの  
で、当人も傍はたのものも大分心配だいふした割に、それほどの危険もなく  
胎児を分娩ぶんべんしたが、その子はすぐ死んでしまった。

「軽はずみをしないように用心おしよ。——宅でも彼子<sup>あれ</sup>がいたら少しは依怙<sup>たより</sup>になるんだがね」

## 六十八

姉の言葉には昔し亡くしたわが子に対する思い出の外に、今の養子に飽き足らない意味も含まれていた。

「彦ちゃんがもう少し確乎<sup>しつかり</sup>していてくれると好い<sup>い</sup>んだけども」  
彼女は時々傍<sup>はた</sup>のものにこんな述懐を洩<sup>も</sup>らした。彦ちゃんは彼女の予期するような大した働き手でないにせよ、至極<sup>しごく</sup>穏やかな好人

物であつた。朝っぱらから酒を飲まなくっちゃいけない人だという噂<sup>うわさ</sup>を耳にした事はあるが、その他の点<sup>た</sup>について深い交渉を有<sup>も</sup>たない健三には、どこが不足なのか能<sup>よ</sup>く解らなかつた。

「もう少し御金を取ってくれと好いんだけどもね」

無論彦ちゃんは養父母を樂に養えるだけの収入を得ていなかつた。しかし比田も姉も彼を育てた時の事を思えば、今更そんな贅<sup>ぜい</sup>沢<sup>たく</sup>のいえた義理でもなかつた。彼らは彦ちゃんをどこの学校へも入れて遣<sup>や</sup>らなかつた。僅<sup>わずか</sup>ばかりでも彼が月給を取るようになったのは、養父母に取つてむしろ僥倖<sup>ぎやうひん</sup>といわなければならなかつた。健三は姉の不平に対して眼に見えるほどの注意を払いかねた。昔

し死んだ赤ん坊については、なおの事同情が起らなかった。彼はその生顔いきがおを見た事がなかった。その死顔しにがおも知らなかった。名前さえ忘れてしまった。

「何とかいいましたね、あの子は」

「作太郎さくたろうさ。あすここに位牌いはいがあるよ」

姉は健三のために茶の間の壁を切り抜いて拵こしらえた小さい仏壇を指し示した。薄暗いばかりでなく小汚こぎたないその中には先祖からの位牌が五つ六つ並んでいた。

「あの小さい奴がそうですか」

「ああ、赤ん坊のだからね、わざと小さく拵こしらえたんだよ」

立って行って戒名かいみょうを読む気にもならなかった健三は、やはり故もとの所に坐すわったまま、黒塗くろぬりの上に金字で書いた小形の札のようなものを遠くから眺めていた。

彼の顔には何の表情もなかった。自分の二番目の娘が赤痢に罹かかって、もう少しで命を奪とられるところだった時の心配と苦痛さえ聯想れんそうし得なかった。

「姉さんもこんなじゃ何時ああなるか分らないよ、健ちゃん」  
彼女は仏壇から眼を放して健三を見た。健三はわざとその視線を避けた。

心細い事を口にしながら腹の中では決して死ぬと思っていない



彼女のいい草には、世間並の年寄と少し趣を異にしている所があつた。慢性の病気が何時までも継続するように、慢性の寿命がまた何時までも継続するだろうと彼女には見えたのである。

其所<sup>そこ</sup>へ彼女の癩性<sup>かんしょう</sup>が手伝つた。彼女はどんなに氣息<sup>いきぐる</sup>苦しくつても、いくら他<sup>ひと</sup>から忠告されても、どうしても居<sup>い</sup>ながら用を足そうといわなかつた。這<sup>は</sup>うようにしてでも厠<sup>かわや</sup>まで行つた。それから子供の時から習慣で、朝はきつと肌<sup>はだぬぎ</sup>拔になつて手水<sup>ちようず</sup>を遣<sup>つか</sup>つた。寒い風が吹こうが冷たい雨が降ろうが決してやめなかつた。

「そんな心細い事をいわずに、出来るだけ養生をしたら好いでしよう」

「養生はしているよ。健ちゃんから貰<sup>もら</sup>う御小遣の中で牛乳だけはきつと飲む事に極<sup>き</sup>めているんだから」

田舎<sup>いなか</sup>ものが米の飯を食うように、彼女は牛乳を飲むのが凡<sup>すべ</sup>ての養生でもあるかのような事をいった。日に日に損なわれて行くわが健康を意識しつつ、この姉に養生を勧める健三の心の中<sup>うち</sup>にも、「他事<sup>ひとごと</sup>じゃない」という馬鹿らしさが遠くに働<sup>はたら</sup>いていた。「私も近頃<sup>わたし</sup>は具合が悪くってね。ことによると貴方<sup>あなた</sup>より早く位牌になるかも知れませんよ」

彼の言葉は無論根のない笑談<sup>じょうだん</sup>として姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと笑った。しかし自ら健康を損<sup>みづか</sup>いつつあると確<sup>たしか</sup>

に心得ながら、それをどうする事も出来ない境遇に置かれた彼は、姉よりもかえって自分の方を憐あわれんだ。

「己のは黙って成し崩しに自殺するのだ。気の毒だといってくれるものは一人もありやしない」

彼はそう思って姉の凹くぼみ込んだ眼と、瘦こけた頬ほおと、肉のない細い手とを、微笑しながら見ていた。

## 六十九

姉は細かい所に気の付く女であつた。従つて細かい事にまでよ

く好奇心を働らかせたがった。一面において馬鹿正直な彼女は、一面においてまた変な廻りまわ気きを出す癖もを有もっていた。

健三が外国から帰って来た時、彼女は自家の生計について、他の同情に訴え得るような憐れあわっぽい事実を彼の前に並べた。しまいに兄の口を借りて、いくらでも好いいから月々自分の小遣として送ってくれまいかという依頼を持ち出した。健三は身分相応な額を定めた上、また兄の手を経て先方へその旨を通知してもらう事にした。すると姉から手紙が来た。長ちやうさんの話では御前さんが月々いくらくらい私わたしに遣やるという事だが、実際御前さんの、呉れろといった金高かねだかはどの位なのか、長さんに内所ないしょでちよつと知らせ

てくれないかと書いてあつた。姉はこれから毎月中取次なかとつぎをする役に当るかも知れない兄の心事を疑ぐつたのである。

健三は馬鹿々々しく思った。腹立しくも感じた。しかし何より先に浅間あさましかつた。「黙っている」と怒鳴り付けて遣りたくなつた。彼の姉に宛あてた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、こうした彼の気分を能く現よわしていた。姉はそれぎり何ともいって来なかつた。無筆むひつな彼女は最初の手紙さえ他に頼んで書いてもらったのである。

この出来事が健三に対する姉を前よりは一層遠慮がちにした。何でも蚊きでも訊きたがる彼女も、健三の家庭については、当り障

りのない事の外、多く口を開かなかった。健三も自分ら夫婦の間柄を彼女の前で問題にしようなどとはかつて想い<sup>いた</sup>到らなかった。

「近頃御住さんはどうだい」

「まあ相変わらずです」

会話はこの位で切り上げられる場合が多かった。

間接に細君の病気を知っている姉の質問には、好奇心以外に、親切から来る懸念も大分<sup>だいぶん</sup>交っていた。しかしその懸念は健三に取って何の役にも立たなかった。従って彼女の眼に見える健三は、何時も親しみがたい無<sup>ぶ</sup>愛<sup>あい</sup>想<sup>そう</sup>な変人に過ぎなかった。

淋<sup>さみ</sup>しい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せて北へ北へと歩

いて行つた。そうしてついぞ見た事もない新開地のような汚ない、町の中へ入つた。東京で生れた彼は方角の上において、自分の今踏んでいる場所を能く弁わえていた。けれども其所そこには彼の追憶を誘いざなう何物も残つていなかった。過去の記念が悉く彼の眼から奪うわれてしまつた大地の上を、彼は不思議そうに歩いた。

彼は昔あつた青田と、その青田の間を走る真直な径まっすぐ こみちとを思い出した。田の尽る所には三、四軒の藁わら葺ぶ屋根きやねが見えた。菅笠すががさを脱いで床しょうぎ几ぎに腰を掛けながら、心太こころ太を食っている男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のように広い紙漉場かみすきばがあつた。其所を折れ曲つて町つづきへ出ると、狭い川に橋が懸つていた。川の左右は高い

石垣で積み上げられているので、上から見下す水の流れには存外の距離があつた。橋の袂たもとにある古風な銭湯の暖簾のれんや、その隣の八百屋おやの店先に並んでいる唐茄子とうなすなどが、若い時の健三によく広重ひろしげの風景画を聯想れんそうさせた。

しかし今では凡てすべのものが夢のように悉く消え失せていた。残っているのはただ大地ばかりであつた。

「何時こんなに変わったんだろう」

人間の変つて行く事にのみ氣を取られていた健三は、それよりも一層劇はげしい自然の変り方に驚ろかされた。

彼は子供の時分比田ひだと将棋を差した事を偶然思いだした。比田



は盤に向うと、これでも所沢ところざわの藤吉とうきちさんの御弟子だからなというのが癖であつた。今の比田も将棋盤を前に置けば、きつと同じ事をいいそうな男であつた。

「己おれ自身ひつきようは必竟ひつきようどうなるのだらう」

衰ろえるだけで案外変らない人間のさまと、変るけれども日に栄えて行く郊外の様子とが、健三に思いがけない対照の材料を与えた時、彼は考えない訳に行かなかつた。

元氣のない顔をして宅へ歸つて来た彼の様子がすぐ細君の注意を惹いた。

「御病人はどうなの」

あるゆる人間が何時か一度は到着しなければならぬ最後の運命を、彼女は健三の口から判然聞こうとするように見えた。健三は答を与える先に、まず一種の矛盾を意識した。

「何もう好いんだ。寐てはいるが危篤でも何でもないんだ。まあ兄貴に騙されたようなものだね」

馬鹿らしいという気が幾分か彼の口振に出た。

「騙されてもその方がいくら好いか知れやしませんわ、貴夫。も

しもの事でもあつて御覧なさい、それこそ……」

「兄貴が悪いんじゃない。兄貴は姉に騙されたんだから。その姉はまた病気に騙されたんだ。つまり皆な騙されているようなものさ、世の中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩らつたつて、決して騙されないんだからね」

「やっぱり宅にいないの」

「いるもんか。尤も非道く悪かつた時はどうだか知らないが」

健三は比田の振下げている金時計と金鎖の事を思い出した。兄はそれを天麩羅てんぷらだろうといつて陰で評していたが、当人はどこまでも本物らしく見せびらかしたがつた。金着せきんぎにせよ、本物にせ

よ、彼がどこでいくらで買ったのか知るものは誰もなかった。こういう点に掛けては無頓着むとんじやくでいられない性分の姉も、ただ好い加減にその出処を推察するに過ぎなかった。

「月賦で買ったに違ないよ」

「ことによると質の流れかも知れない」

姉は聴かれもしないのに、兄に向って色々な説明をした。健三には殆ど問題にならない事が、彼らの間に想像の種を幾個いくつでも卸した。そうされればされるほどまた比田は得意らしく見えた。健三が毎月送る小遣さえ時々借りられてしまうくせに、姉はついに夫の手元に入る、または現在手元にある、金高きんだかを決して知る事が

出来なかった。

「近頃は何でも債券を二、三枚持っているようだよ」

姉の言葉はまるで隣の宅の財産でもいい中<sup>あ</sup>てるように夫から遠ざかっていた。

姉をこういう地位に立たせて平気にいる比田は、健三から見ると領解しがたい人間に違なかった。それがやむをえない夫婦関係のように心得て辛抱している姉自身も健三には分らなかった。しかし金銭上あくまで秘密主義を守りながら、時々姉の予期に釣り合わないようなものを買ひ込んだり着込んだりして、妄<sup>みだ</sup>りに彼女を驚ろかせたがる料簡<sup>りょうけん</sup>に至っては想像さえ及ばなかった。妻に対

する虚栄心の発現、焦<sup>じ</sup>らされながらも夫<sup>うで</sup>を腕利<sup>きき</sup>と思う妻の満足。

——この二つのものだけでは到底充分な説明にならなかった。

「金の要<sup>い</sup>る時も他人、病気の時も他人、それじゃただ一<sup>いっ</sup>所<sup>しょ</sup>にいるだけじゃないか」

健三の謎<sup>なぞ</sup>は容易に解けなかった。考える事の嫌<sup>きら</sup>な細君<sup>きよ</sup>はまた何という評も加えなかった。

「しかし己<sup>おれ</sup>たち夫婦も世間から見れば随分変ってるんだから、そう他<sup>ひと</sup>の事ばかりとやかくいっちゃんられないかも知れない」

「やっぱり同なじ事ですわ。みんな自分だけは好いと思ってるんだから」

健三はすぐ癢しゃくに障さやった。

「御前でも自分じゃ好いつもりでいるのかい」

「いますとも。貴夫あなたが好いと思っていらっしゃる通りに」

彼らの争いは能よくこういう所から起った。そうして折角穩やかに静まっている双方の心を攪かき乱した。健三はそれを慎みの足りない細君の責せめに歸した。細君はまた偏窟で強情な夫のせいだとばかり解釈した。

「字が書けなくっても、裁縫しでとが出来なくっても、やっぱり姉のよ  
うな亭主孝行な女の方が己は好きだ」

「今時そんな女がどこの国にいるもんですか」

細君の言葉の奥には、男ほど手前勝手なものはないという大きな反感が横よこわっていた。

## 七十一

筋道の通った頭を有もっていない彼女には存外新らしい点があった。彼女は形式的な昔風の倫理観に囚とらわれるほど嚴重な家庭に人とならなかった。政治家を以て任じていた彼女の父は、教育に関して殆ほとんど無定見であつた。母はまた普通の女のように八釜やかましく子供を育て上る性質たでなかつた。彼女は宅うちにいて比較的自由な空



気を呼吸した。そうして学校は小学校を卒業しただけであつた。彼女は考えなかつた。けれども考えた結果を野性的に能く感じていた。

「単に夫という名前が付いているからというだけの意味で、その人を尊敬しなくてはならないと強いられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられるだけの実質を有った人間になつて自分の前に出て来るが好い。夫という肩書などではなくつても構わないから」

不思議にも学問をした健三の方はこの点においてかえつて旧式であつた。自分は自分のために生きて行かなければならないとい

う主義を実現したがりがら、夫のためにのみ存在する妻を最初から仮定して憚<sup>はば</sup>からなかった。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根<sup>おおね</sup>は此所<sup>ここ</sup>にあった。

夫と独立した自己の存在を主張しようとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。ややともすると、「女のくせに」という気になった。それが一段劇<sup>はげ</sup>しくなると忽ち<sup>たちま</sup>「何を生意気な」という言葉に変化した。細君の腹には「いくら女だって」という挨拶<sup>あいさつ</sup>が何時でも貯<sup>たくわ</sup>えてあった。

「いくら女だって、そう踏み付にされて堪<sup>たま</sup>るものか」

健三は時として細君の顔に出るこれだけの表情を明かに読んだ。

「女だから馬鹿にするのではない。馬鹿だから馬鹿にするのだ、尊敬されたければ尊敬されるだけの人格を拵<sup>こしら</sup>えるがいい」

健三の論理<sup>ロジック</sup>は何時の間にか、細君が彼に向って投げる論理<sup>ロジック</sup>と同じものになってしまった。

彼らはかくして円<sup>まる</sup>い輪の上をぐるぐる廻<sup>まわ</sup>って歩いた。そうしていくら疲れても気が付かなかった。

健三はその輪の上にはたりと立ち留<sup>どま</sup>る事があつた。彼の留<sup>どま</sup>る時は彼の激昂<sup>げつこう</sup>が静まる時に外ならなかった。細君はその輪の上でふ

と動かなくなる事があつた。しかし細君の動かなくなる時は彼女の沈滞が融<sup>と</sup>け出す時に限っていた。その時健三は漸<sup>よう</sup>く怒号をやめた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携えて談笑しながら、やはり円い輪の上を離れる訳に行かなかつた。

細君が産をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。生憎<sup>あいにく</sup>留守だつた彼は、夕暮に帰ってから細君にその話を聞いて首を傾むけた。

「何か用でもあつたのかい」

「ええ少し御話ししたい事があるんですって」

「何だい」

細君は答えなかった。

「知らないのかい」

「ええ。また二、三日うちに上<sup>あが</sup>つて能く御話をするからつて歸りましたから、今度参<sup>じか</sup>つたら直に聞いて下さい」

健三はそれより以上何もいう事が出来なかった。

久しく細君の父を訪ねないでいた彼は、用事のあるなしにかかわらず、向うがわざわざこ<sup>き</sup>っちへ出掛けて来ようなどとは夢にも予期しなかった。その不審<sup>いつも</sup>が例より彼の口数を多くする原因になった。それとは反対に細君の言葉はかえつて常よりも少なかった。しかしそれは彼がよく彼女において発見する不平や無愛嬌<sup>むあいきやう</sup>か

ら来る寡言<sup>かげん</sup>とも違っていた。

夜は何時の間にやら全くの冬に変化していた。細い燈火<sup>ともしび</sup>の影を凝<sup>じつ</sup>と見詰めていると、灯<sup>ひ</sup>は動かないで風の音だけが烈<sup>はげ</sup>しく雨戸に当った。ひゅうひゅうと樹木の鳴るなかに、夫婦は静かな洋燈<sup>あかり</sup>を間に置いて、しばらく森<sup>しん</sup>と坐<sup>すわ</sup>っていた。

## 七十二

「今日<sup>きょう</sup>父が来ました時、外套<sup>がいとう</sup>がなくなつて寒そうでしたから、貴方<sup>あなた</sup>の古いのを出して遣<sup>や</sup>りました」

田舎<sup>いなか</sup>の洋服屋で拵<sup>こしら</sup>えたその二重廻<sup>にじゅうまわ</sup>しは、殆<sup>ほと</sup>んど健三の記憶から消えかかっている位古かった。細君がどうしてまたそれを彼女の父に与えたものか、健三には理解出来なかった。

「あんな汚らしいもの」

彼は不思議というよりもむしろ恥かしい気がした。

「いいえ。喜こんで着て行きました」

「御父<sup>おとつ</sup>さんは外套を有<sup>も</sup>っていないのかい」

「外套どころじゃない、もう何にも有っちゃいないんです」

健三は驚ろいた。細い灯<sup>ひ</sup>に照らされた細君の顔が急に憐<sup>あわ</sup>れに見えた。

「そんなに窮こまっているのかなあ」

「ええ。もうどうする事も出来ないんですって」

口数の寡すくない細君は、自分の生家に関する詳しい話を今まで夫の耳に入れずに通して来たのである。職に離れて以来の不如意を薄々知うすうすていながら、まさかこれほどとも思わずにいた健三は、急に眼を転じてその人の昔を見なければならなかった。

彼は絹帽シルクハットにフロックコートで勇ましく官邸せきもんの石門を出て行く細君の父の姿を鮮やかに思い浮べた。堅木かたぎを久きゆうの字形じがたに切り組んで作ったその玄関ゆかの床は、つるつる光って、時によると馴なれない健三の足を滑らせた。前に広い芝生しばふを控えた応接間を左へ折れ曲る



と、それと接続つづいて長方形の食堂があつた。結婚する前健三は其所こで細君の家族のものと一緒に晚餐ばんさんの卓に着いた事をいまだに覚えていた。二階には畳が敷いてあつた。正月の寒い晩、歌留多カルタに招かれた彼は、そのうちの一間で暖たかい宵を笑い声の裡うちに更ふかした記憶もあつた。

西洋館に続いて日本建にほんだても一棟付ひとむねいていたこの屋敷には、家族の外に五人の下女げじよと二人の書生が住んでいた。職務柄客の出入でいりの多いこの家の用事には、それだけの召仕めしつかいが必要かも知れなかつたが、もし経済が許さないとすれば、その必要も充みたされるはずはなかつた。

健三が外国から帰って来た時ですら、細君の父はさほど困っているようには見えなかった。彼が駒込こまごめの奥に住居すまいを構えた当座、彼の新宅を訪ねた父は、彼に向ってこういった。――

「まあ自分の宅うちを有もつという事が人間にはどうしても必要ですね。しかしそう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々せいぜい貯蓄を心掛けたら好いいでしょう。二、三千円の金を有っていないと、いざという場合に、大変困るもんだから。なに千円位出来ればそれで結構です。それを私わたしに預けて御置きなされると、一年位経つうちには、じき倍にして上げますから」

貨殖の道に心得の足りない健三はその時不思議の感に打たれ

た。

「どうして一年のうちに千円が二千円になり得るだろう」

彼の頭ではこの疑問の解決がとても付かなかった。利慾を離れる事の出来ない彼は、驚愕きょうがくの念を以て、細君の父にのみあつて、自分には全く欠乏している、一種の怪力かいりよくを眺めた。しかし千円拵こしらえて預ける見込の到底付かない彼は、細君の父に向つてその方法を訊きく気にもならずについ今日こんにちまで過ぎたのである。

「そんなに貧乏するはずがないだろうじゃないか。何ぼ何だつて」

「でも仕方ありませんわ、廻まわり合あわせだから」

産という肉体の苦痛を眼前に控えている細君の氣息遣はただで  
さえ重々おもおもしかった。健三は黙って気の毒そうなの腹と光沢つやの悪  
いその頬ほおとを眺めた。

昔し田舎で結婚した時、彼女の父がどこからか浮世絵風の美人  
を描かいた下等な団扇うちわを四、五本買って持ってきたので、健三はそ  
の一本をぐるぐる廻しながら、随分俗なものだと評したら、父は  
すぐ「所相応だろう」と答えた事があつたが、健三は今自分がそ  
の地方で作った外套を細君の父に遣って、「阿爺おやじ相応だろう」と  
いう気にはとてもなれなかった。いくら困なまけつたつてあんなものを  
と思うとむしろ情なさけなくなつた。

「でもよく着られるね」

「見つともなくつても寒いよりは好いでしょう」

細君は淋<sup>さび</sup>しそうに笑った。

## 七十三

中一日置いて彼が来た時、健三は久しぶりで細君の父に会った。

年輩からいっても、経歴から見ても、健三より遥かに世間馴れた父は、何時も自分の娘婿に対して鄭<sup>てい</sup>寧<sup>ねい</sup>であつた。或時は不自然

に陥る位鄭寧過ぎた。しかしそれが彼を現わす凡てではなかった。裏側には反対のものが所々に起伏していた。

官僚式に出来上った彼の眼には、健三の態度が最初から頗る横着に見えた。超えてはならない階段を無躑に飛び越すようにも思われた。その上彼はむやみに自ら任じているらしい健三の高慢ちきな所を喜ばなかった。頭にある事を何でも口外して憚らない健三の無作法も気に入らなかった。乱暴とより外に取りようのない一徹一図な点も非難の標的になった。

健三の稚気を輕蔑した彼は、形式の心得もなく無茶苦茶に近付いて来ようとする健三を表面上鄭寧な態度で遮った。すると二人

は其所<sup>そこ</sup>で留<sup>とど</sup>まつたなり動けなくなつた。二人は或る間隔を置いて、相手の短所を眺めなければならなかつた。だから相手の長所も判明<sup>はつきり</sup>と理解する事が出来悪<sup>にく</sup>くなつた。そうして二人とも自分の有<sup>も</sup>つてゐる欠点の大部分には決して気が付かなかつた。

しかし今の彼は健三に対して疑<sup>うたがい</sup>もなく一時的の弱者であつた。

他<sup>ひと</sup>に頭を下げる事の嫌<sup>きらひ</sup>な健三は窮迫の結果、余儀なく自分の前に出て来た彼を見た時、すぐ同じ眼で同じ境遇に置かれた自分を想像しない訳に行かなかつた。

「如何<sup>いか</sup>にも苦しいだろう」

健三はこの一念に制せられた。そうして彼の持ち来<sup>きた</sup>した金策談

に耳を傾むけた。けれども好<sup>い</sup>顔はし得なかつた。心のうちでは好い顔をし得ないその自分を呪<sup>のろ</sup>っていた。

「金の話だから好い顔が出来ないんじゃない。金とは独立した不愉快のために好い顔が出来ないのです。誤解してはいけません。

私はこんな場合に敵討<sup>かたきうち</sup>をするような卑怯<sup>ひきよう</sup>な人間とは違<sup>わ</sup>ます」

細君の父の前にこれだけの弁解がしたくつて堪らなかつた健三は、黙つて誤解の危険を冒すより外に仕方がなかつた。

このぶつきら<sup>おちつ</sup>棒な健三に比べると、細君の父はよほど鄭寧であつた。また落付<sup>おちつ</sup>いていた。傍<sup>はた</sup>から見れば遙に紳士らしかつた。

彼は或人の名を挙げた。



「向うでは貴方あなたを知ってるといいますが、貴方も知ってるんでしょうね」

「知っています」

健三は昔し学校にいた時分にその男を知っていた。けれども深い交際つきあいはなかった。卒業して独乙ドイッへ行つて歸つて来たら、急に職業あがえをして或ある大きな銀行へ入ったとか人の噂うわさに聞いた位より外に、彼の消息は健三に伝わっていなかった。

「まだ銀行にいるんですか」

細君の父は點頭うなずいた。しかし二人がどこでどう知り合になつたのか、健三には想像さえ付かなかった。またそれを詳しく訊きいて

見たところが仕方がなかった。要点はただその人が金を貸してくれるか、くれないかの問題にあった。

「で当人のいうには、貸しても好い、好いが慥たしかな人を証人に立ててもらいたいとこういんです」

「なるほど」

「じゃ誰を立てたら好いのかと聞くと、貴方ならば貸しても好いと、向うでわざわざ指名した訳なんです」

健三は自分自身を慥なものと認めるには躊躇ちゆうちゆうしなかった。しかし自分自身の財力に乏しい事も職業の性質上他ひとに知れていなければならぬはずだと考えた。その上細君の父は交際範囲の極めて

広い人であつた。平生<sup>へいぜい</sup>彼の口にする知合<sup>しりあい</sup>のうちには、健三よりどの位世間から信用されて好いか分らないほど有名な人がいくらでもいた。

「何故<sup>なぜ</sup>私の判が必要なんでしょう」

「貴方なら貸そうというのです」

健三は考えた。

## 七十四

彼は今日<sup>こんにち</sup>まで証書を入れて他<sup>ひと</sup>から金を借りた経験のない男で

あつた。つい義理で判を捺ついて遣やつたのが本もとで、立派な腕を有もちながら、生涯社会の底に沈んだまま、藻搔もがき通しに藻搔もがいている人の話は、いくら迂闊うかつな彼の耳にもしばしば伝えられていた。彼は出来るなら自分の未来に関わるような所作を避けたいと思つた。しかし頑固な彼の半面にはいたって気の弱い煮え切らない或物が能よく働らきたがつた。この場合断然連印を拒絶するのは、彼に取つて如何いかにも無情で、冷刻で、心苦しかった。

「私でなくっちゃいけないのでしょうか」

「貴方あなたなら好いいというんです」

彼は同じ事を二度訊きいて同じ答えを二度受けた。

「どうも変ですね」

世事に疎い彼は、細君の父がどこへ頼んでも、もう判を押してくれるものがないので、しまいには仕方なしに彼の所へ持つて来たのだという明白な事情さえ推察し得なかった。彼は親しく交際つきあつた事もないその銀行家からそれほど信用されるのがかえって怖くなつた。

「どんな目に逢わされるか分りやしない」

彼の心には未来における自己の安全という懸念が充分に働いた。同時にただそれだけの利害心でこの問題を片付けてしまうほど彼の性格は単純に出来ていなかった。彼の頭が彼に適当な解決

を与えるまで彼は逡巡<sup>しゅんじゅん</sup>しなければならなかった。その解決が最後に来た時ですら、彼はそれを細君の父の前に持ち出すのに多大の努力を払った。

「印を捺<sup>お</sup>す事はどうも危険ですからやめたいと思います。しかしその代り私の手で出来るだけの金を調<sup>ととの</sup>えて上げましょう。無論貯蓄のない私の事だから、調えるにしたところで、どうせどこからか借りるより外に仕方がないのですが、出来るなら証文を書いた判を押したりするような形式上の手続きを踏む金は借りたくないのです。私の有<sup>も</sup>っている狭い交際の方面で安全な金を工面した方が私には心持が好いのですから、まずそっちの方を一つ中<sup>あた</sup>って

見ましよう。無論御入用おいりようだけの額たかは駄目です。私の手で調のえる以上、私の手で返さなければならぬのは無論の事ですから、身分不相当の借金は出来ません」

いくらでも融通が付けば付いたただけ助かるといった風の苦しい境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強しいなかった。

「どうぞそれじゃ何分」

彼は健三の着古した外套に身を包んで、寒い日の下を歩いて帰って行った。書齋で話を済めた健三は、玄関からまた同じ書齋に戻ったなり細君の顔を見なかった。細君も父を玄関に送り出した時、夫と並んで沓脱くつぬぎの上に立っただけで、遂に書齋へは入って

来なかった。金策の事は黙々のうちに二人に了解されていたが  
ら、遂に二人の間の話題に上らずにしまった。

けれども健三の心には既に責任の荷があった。彼はそれを果す  
ために動かなければならなかった。彼は世帯を持つときに、火鉢  
や烟草盆タバコぼんを一所に買って歩いてもらった友達の宅うちへまた出掛け  
た。

「金を貸してくれないかね」

彼は藪やぶから棒に質問を掛けた。金などを有っていない友達は驚  
ろいた顔をして彼を見た。彼は火鉢に手を翳かざしながら友達の前に  
逐一事情を話した。



「どうだろう」

三年間支那のある学堂で教鞭きょうべんを取っていた頃に蓄えた友達の金は、みんな電鉄か何かの株に変形していた。

「じゃ清水しみずに頼んで見てくれないか」

友達の妹婿に当る清水は、下町のかなり繁華な場所で、病院を開いていた。

「さあどうかなあ。あいつもその位な金はあるだろうが、動かせるようになってるかしら。まあ訊いて見てやろう」

友達の好意は幸い徒勞むだにならずに済んだ。健三の借り受けた四百円の金が、細君の父の手に入ったのは、それから四、五日経つ

て後の事であつた。

## 七十五

「己おれは精一杯の事をしたのだ」

健三の腹にはこういう安心があつた。従つて彼は自分の調達ちようだつした金の価値について余り考えなかつた。さぞ嬉うれしがるだろうとも思わない代りに、これ位の補助が何の役に立つものかという氣も起さなかつた。それがどの方面にどう消費されたかの問題になると、全くの無知識で澄ましていた。細君の父も其所そこまで内状を打

ち明けるほど彼に接近して来なかった。

従来の牆壁しょうへきを取り払うにはこの機会があまりに脆弱過ぎた。せいじやくもしくは二人の性格があまりに固着し過ぎていた。

父は健三よりも世間的に虚栄心の強い男であつた。なるべく自分を他ひとに能く了解させようと力つとめるよりも、出来るだけ自分の価値を明るい光線に触あてさせたがる性質たちであつた。従つて彼を囲繞いにようする妻子近親に対する彼の様子は幾分か誇大に傾むきがちであつた。

境遇が急に失意の方面に一転した時、彼は自分の平生へいぜいを顧みない訳に行かなかつた。彼はそれを糊塗ことするため、健三に向つて能あた

う限りさあらぬ態度を装った。それで遂に押し通せなくなった揚句、彼はとうとう健三に連印を求めたのである。けれども彼がどの位の負債にどう苦しめられているかという巨細こさいの事實は、遂に健三の耳に入いらなかった。健三も訊きかなかった。

二人は今までの距離を保ったままで互に手を出し合った。一人が渡す金を一人が受け取った時、二人は出した手をまた引き込めた。傍はたでそれを見ていた細君は黙って何ともいわなかった。

健三が外国から帰った当座の二人は、まだこれほどに離れていなかった。彼が新宅を構えて間もない頃、彼は細君の父がある鉱山事業に手を出したという話を聞いて驚ろいた事があった。

「山を掘るんだって？」

「ええ、何でも新らしく会社を拵しらえるんだそうです」

彼は眉まゆを顰ひそめた。同時に彼は父の怪力かいりよくに幾分かの信用を置いていた。

「旨うまく行くのかね」

「どうですか」

健三と細君との間にこんな簡単な会話が取り換わされた後のち、彼はその用事を帯びて北国ほっこくのある都会へ向けて出発したという父の報知を細君から受け取った。すると一週間ばかりして彼女の母が突然健三の所へ遣やつて来た。父が旅先で急に病気に罹かったので、

これから自分も行かなければならないと思うが、それについて旅費の都合は出来まいかというのが母の用向ようむきであつた。

「ええええ旅費位どうでもして上あますから、すぐ行つて御上なさ  
い」

宿屋に寐ねている苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心しんから  
気の毒に思つた健三は、自分のまだ見た事もない遠くの空の佗わ  
びしさまで想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が来ただけで、詳しい事はまるで分りませんのです  
から」

「じゃなお御心配でしょう。なるべく早く御立ちになる方が好い

でしょう」

幸いにして父の病気は軽かった。しかし彼の手を着けかけたという鉱山事業はそれぎり立消たちぎえになってしまった。

「まだ何にも見付からないのかね、口は」

「あるにはあるようですけれども旨つまく纏まとらないんですって」

細君は父がある大きな都会の市長の候補者になった話をして聞かせた。その運動費は財力のある彼の旧友の一人が負担そろうしてくれているようであつた。しかし市の有志家は何名か打ち揃そろつて上京した時に、有名な政治家のある伯爵はくしやくに会つて、父の適不適を問ひ訊ただしたら、その伯爵がどうも不向ふむきだろうと答えたので、話はそれ

ぎりでやめになったのだそうである。

「どうも困るね」

「今に何とかなるでしょう」

細君は健三よりも自分の父の方を遥かに余計信用していた。健

三も例の怪力かいりよくを知らないではなかった。

「ただ気の毒だからそういうだけさ」

彼の言葉に嘘うそはなかった。

## 七十六



けれどもその次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の關係がもう變つていた。自ら進んで母に旅費を用立った女婿は、一歩退ぞかなければならなかった。彼は比較的遠い距離に立って細君の父を眺めた。しかし彼の眼に漂よう色は冷淡でも無頓着でもなかった。むしろ黒い瞳から閃めこうとする反感の稲妻であつた。力めてその稲妻を隠そうとした彼は、やむをえずこの鋭どく光るものに冷淡と無頓着の仮装を着せた。

父は悲境にいた。まのあたり見る父は鄭寧であつた。この二つのものが健三の自然に圧迫を加えた。積極的に突掛る事の出来ない彼は控えなければならなかった。単なる無愛想の程度で我慢す

べく余儀なくされた彼には、相手の苦しい現状と慇懃<sup>いんぎん</sup>な態度とが、かえってわが天真の流露を妨げる邪魔物になった。彼からいえば、父はこういう意味において彼を苦しめに來たと同じ事であつた。父からいえば、普通の人としてさえ不都合に近い愚劣な応対ぶりを、自分の女婿に見出すのは、堪えがたい馬鹿らしさに違なかつた。前後と関係のないこの場だけの光景を眺める傍觀者の眼にも健三はやはり馬鹿であつた。それを承知している細君にすら、夫は決して賢い男ではなかつた。

「私も今度<sup>わたくし</sup>という今度は困りました」

最初にこういつた父は健三からはかばかしい返事すら得なかつ

た。

父はやがて財界で有名な或人の名を挙げた。その人は銀行家でもあり、また実業家でもあつた。

「実はこの間ある人の周旋で会つて見ましたが、どうか旨く出来  
そうですよ。三井と三菱を除けば日本ではまあ彼所位なもんです  
から、使用人になつたからといって、別に私の体面に関わる事も  
ありませんし、それに仕事をする区域も広いようですから、面白  
く働けるだろうと思うんです」

この財力家によつて細君の父に予約された位地というのは、関  
西にある或<sup>ある</sup>私立の鉄道会社の社長であつた。会社の株の大部分を

一人で所有しているその人は、自分の意志のままに、其所そこの社長を選ぶ特権を有していたのである。しかし何十株か何百株かの持主として、予あらかじめ資格を作って置かなければならない父は、どうして金の工面をするだろう。事状に通じない健三にはこの疑問さえ解けなかった。

「一時必要な株数だけを私の名儀に書換てもらうんです」

健三は父の言葉に疑を挟むほど、彼の才能を見縊みくびっていたなかった。彼と彼の家族とを目下の苦境から解脱げだつさせるという意味においても、その成功を希望しない訳に行かなかった。しかし依然として元の立場に立っている事も改める訳に行かなかった。彼の挨あい

掬<sup>さつ</sup>は形式的であつた。そうして幾分か彼の心の柔らかい部分をわざと堅苦しくした。老巧な父はまるで其所に注意を払わないように見えた。

「しかし困る事に、これは今が今という訳に行かないのです。時機があるものですからな」

彼は懷からまた一枚の辞令見たようなものを出して健三に見せた。それには或保険会社が彼に顧問を囑託するという文句と、その報酬として月々彼に百円を贈与するという条件が書いてあつた。

「今御話した一方の方が出来たらこれはやめるか、または出来て

も続けてやるか、その辺はまだ分らないんですが、とにかく百円でも当座の凌しのぎにはなりますから」

昔し彼が政府の内意で或官職を抛なげつた時、当路の人は山陰道筋のある地方の知事なら転任させても好よいという条件を付けた事があつた。しかし彼は断然それを斥しりぞけた。彼が今大して隆盛でもない保険会社から百円の金を貰もらつて、別に厭いやな顔をしないのも、やはり境遇の変化が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。

こうした懸け隔てのない父の態度は、ややともすると健三を自分の立場から前へ押し出そうとした。その傾向を意識するや否や彼はまた後戻りをしなければならなかつた。彼の自然は不自然ら

しく見える彼の態度を倫理的に認可したのである。

## 七十七

細君の父は事務家であつた。ややともすると仕事本位の立場からばかり人を評価したがつた。乃木<sup>のぎ</sup>將軍が一時台湾総督になつて間もなくそれをやめた時、彼は健三に向つてこんな事をいった。

「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤<sup>あつ</sup>く実に立派なものです。しかし総督としての乃木さんが果して適任であるかどうかと

いう問題になると、議論の余地がまだ大分あるように思います。個人の徳は自分に親しく接触する左右のものには能く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を与えようとするには不充分です。其所へ行くとやっぱ手腕ですね。手腕がなくっちゃ、どんな善人でもただ坐っているより外に仕方がありませんからね」

彼は在職中の関係から或会の事務一切を管理していた。侯爵を会頭に頂くその会は、彼の力で設立の主意を綺麗に事業の上で完成した後、彼の手元に二万円ほどの剰余金を委ねた。官途に縁がなくなってから、不如意に不如意の続いた彼は、ついその委託金



に手を付けた。そうして何時の間にか全部を消費してしまった。  
しかし彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打ち明けな  
かった。従って彼はこの預金から当然生まれて来る百円近くの利  
子を毎月調達して、まいげつちようだつ体面を繕ろわなければならなかった。自家の  
経済よりもかえってこの方を苦に病んでいた彼が、公生涯の持続  
に絶対に必要なその百円を、月々保険会社から貰うようになった  
のは、当時の彼の心中に立入って考えて見ると、全く嬉しいに違  
なかつた。

よほど後になつて始めてこの話を細君から聴いた健三は、彼女  
の父に対して新たな同情を感じただけで、不徳義漢として彼を悪  
にく

む気は更に起らなかった。そういう男の娘と夫婦になっているのが恥ずかしいなどとは更に思わなかった。しかし細君に対しての健三は、この点に関して殆んど無言であつた。細君は時々彼に向つていった。――

「妾<sup>わたし</sup>、どんな夫でも構いませんわ、ただ自分に好くしてくれさえすれば」

「泥棒でも構わないのかい」

「ええええ、泥棒だろうが、詐欺師だろうが何でも好<sup>い</sup>いわ。ただ女房を大事にしてくれれば、それで沢山なのよ。いくら偉い男だって、立派な人間だって、宅<sup>うち</sup>で不親切じゃ妾にや何にもならな

いんですもの」

実際細君はこの言葉通りの女であった。健三もその意見には賛成であった。けれども彼の推察は月の暈かきのように細君の言外まで滲にじみ出した。学問ばかりに屈託くつたくしている自分を、彼女がこういう言葉でよそながら非難するのだという臭におがどこやらでした。しかしそれよりも遥かに強く、夫の心を知らない彼女がこんな態度で暗あんに自分の父を弁護するのではないかという感じが健三の胸を打った。

「己おれはそんな事で人と離れる人間じゃない」

自分を細君に説明しようと力つとめなかった彼も、独りで弁解の言

葉を繰り返す事は忘れなかった。

しかし細君の父と彼との交情に、自然の溝渠みぞが出来たのは、やはり父の重きを置き過ぎている手腕の結果としか彼には思えなかった。

健三は正月に父の所へ礼に行かなかった。恭賀新年という端書だけを出した。父はそれを寛仮ゆるさなかった。表向それを咎とがめる事もしなかった。彼は十二、三になる末の子に、同じく恭賀新年という曲りくねった字を書かして、その子の名前で健三に賀状の返しをした。こういう手腕で彼に返報する事を巨細こさいに心得ていた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正がせいを口ずから述べなかった

かの原因については全く無反省であつた。

一事は万事に通じた。利が利を生み、子に子が出来た。二人は次第に遠ざかった。やむをえないで犯す罪と、遣<sup>や</sup>らんでも済むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てている健三は、性質<sup>たち</sup>の宜<sup>よろ</sup>しくないこの余裕を非常に惡<sup>にく</sup>み出した。

## 七十八

「与<sup>くみ</sup>しやすい男だ」

實際において与しやすい或物を多量に有<sup>も</sup>っていると自覺しながら

らも、健三は他ひとからこう思われるのが癢しやくに障った。

彼の神経はこの肝癢かんしゃくを乗り越えた人に向って鋭どい懐しみを感  
じた。彼は群衆のうちにあつて直すぐそういう人を物色する事の出来  
る眼を有っていた。けれども彼自身はどうしてもその域に達せら  
れなかった。だからなおそういう人が眼に着いた。またそういう  
人を余計尊敬したくなった。

同時に彼は自分を罵ののした。しかし自分を罵らせるようにする相  
手をば更に烈はげしく罵った。

かくして細君の父と彼との間には自然の造った溝渠みぞが次第に出  
来上った。彼に対する細君の態度も暗あんにそれを手伝ったには相違

なかった。

二人の間柄がすれすれになると、細君の心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家でも同情の結果、冥々めいめいの裡うちに細君の肩を持たなければならなくなつた。しかし細君の肩を持つという事は、或場合において、健三を敵とするという意味に外ならなかつた。二人は益離えちきりれるだけであつた。

幸にして自然は緩和剤としての歇私ヒステリー的里を細君に与えた。発作は都合好く二人の關係が緊張した間際に起つた。健三は時々便所へ通う廊下うつぶせに俯伏うつぶせになつて倒れている細君を抱き起して床の上まで連れて来た。真夜中に雨戸を一枚明けた縁側の端はじに蹲踞うずくまつてい

る彼女を、後から両手で支えて、寢室へ戻つて来た経験もあった。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧として夢よりも分別がなかった。瞳孔が大きく開いていた。外界はただ幻影のよう  
に映るらしかった。

枕辺に坐つて彼女の顔を見詰めている健三の眼には何時でも不安が閃めいた。時としては不憫の念が凡てに打ち勝った。彼は能く気の毒な細君の乱れかかった髪に櫛を入れて遣った。汗ばんだ額を濡れ手拭で拭いて遣った。たまには氣を確にするために、顔へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした。



発作の今よりも劇<sup>はげ</sup>しかった昔の様も健三の記憶を刺戟<sup>しげき</sup>した。

或時の彼は毎夜細い紐<sup>ひも</sup>で自分の帯と細君の帯とを繋<sup>つな</sup>いで寐<sup>ね</sup>た。

紐の長さを四尺ほどにして、寐返<sup>ねがえ</sup>りが充分出来るように工夫され

たこの用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。

或時の彼は細君の鳩尾<sup>みぞおち</sup>へ茶碗<sup>ちやわん</sup>の糸底<sup>あて</sup>を宛<sup>あて</sup>がって、力任せに押し

付けた。それでも踏<sup>ふ</sup>ん反<sup>そ</sup>り返ろうとする彼女の魔力をこの一点で

喰<sup>く</sup>い留めなければならぬ彼は冷たい油汗を流した。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。

「御天道<sup>おてんとう</sup>さまが来ました。五色<sup>しき</sup>の雲へ乗って来ました。大変よ、

貴夫<sup>あなた</sup>」

「妾<sup>わたし</sup>の赤ん坊は死んじまった。妾の死んだ赤ん坊が来たから行かなくっちゃならない。そら其所<sup>そこ</sup>にいるじゃありませんか。桔槔<sup>はねつるべ</sup>の中に。妾ちよつと行つて見て来るから放して下さい」

流産してから間もない彼女は、抱き竦<sup>すく</sup>めにかかる健三の手を振り払つて、こういいながら起き上がろうとしたのである。……

細君の発作は健三に取つての大いなる不安であつた。しかし大抵の場合にはその不安の上に、より大いなる慈愛の雲が霰<sup>たなび</sup>いていた。彼は心配よりも可哀想<sup>かわいそう</sup>になつた。弱い憐<sup>あわ</sup>れなものの前に頭を下げて、出来得る限り機嫌を取つた。細君も嬉<sup>うれ</sup>しそうな顔をした。

だから発作に故意だろうという疑の掛からない以上、また余りに肝癰かんしゃくが強過ぎて、どうしても勝手にしろという気にならない以上、最後にその度数が自然の同情を妨げて、何でそう己おれを苦しめるのかという不平が高まらない以上、細君の病気は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要であつた。

不幸にして細君の父と健三との間にはこういう重宝な緩和剤が存在していなかつた。従つて細君が本もとで出来た両者の疎隔は、たとい夫婦関係が常に復した後あとでも、ちよつと埋める訳に行かなかつた。それは不思議な現象であつた。けれども事実には相違なかつた。

## 七十九

不合理な事の嫌な健三は心の中でそれを苦に病んだ。けれども別にどうする了簡も出さなかった。彼の性質はむきでもあり一図でもあったと共に頗る消極的な傾向を帯びていた。

「己おれにそんな義務はない」

自分に訊いて、自分に答を得た彼は、その答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起臥する決心をした。成行が自然に解決を付けてくれるだろうとさえ予期しなかった。

不幸にして細君もまたこの点においてどこまでも消極的な態度

を離れなかった。彼女は何か事件があれば動く女であつた。他か  
ら頼まれて男より邁進まいしんする場合もあつた。しかしそれは眼前に手  
で触れられるだけの明瞭めいりような或物を捉つかまえた時に限っていた。とこ  
ろが彼女の見た夫婦関係には、そんな物がどこにも存在していな  
かつた。自分の父と健三の間にもこれというほどの破綻はたんは認めら  
れなかつた。大きな具象的な変化でなければ事件と認めない彼女  
はその他たを閑却した。自分と、自分の父と、夫との間に起る精神  
状態の動揺は手の着けようのないものだと観じていた。

「だって何にもないじゃありませんか」

裏面にその動揺を意識しつつ彼女はこう答えなければならな

かった。彼女に最も正当と思われたこの答が、時として虚偽の響をもつて健三の耳を打つ事があつても、彼女は決して動かなかつた。しまいになつても構わないという投げ遣りなやの気分が、単に消極的な彼女をなおの事消極的に練り堅めて行つた。

かくして夫婦の態度は悪い所で一致した。相互の不調和を永續するためにと評されても仕方のないこの一致は、根強い彼らの性格から割り出されていた。偶然というよりもむしろ必然の結果であつた。互に顔を見合せた彼らは、相手の人相で自分の運命を判断した。

細君の父が健三の手で調達ちよつだつされた金を受取つて歸つてから、そ

れを特別の問題ともしなかった夫婦は、かえって余事を話し合っ  
た。

「産婆は何時頃生れるというのかい」

「何時はつきりって判然はつきりいもしませんが、もう直じきですわ」

「用意は出来てるのかい」

「ええ奥の戸棚の中に入っています」

健三には何が這はい入っているのか分らなかった。細君は苦しそう  
に大きな溜息ためいきを吐ついた。

「何しろこう重苦しくつちや堪らない。早く生れてくれなくつ  
ちや」

「今度は死ぬかも知れないっていったじゃないか」

「ええ、死んでも何でも構わないから、早く生んじまいたいわ」

「どうも御氣の毒さまだな」

「好いわ、死ねば貴夫のせいだから」

健三は遠い田舎で細君が長女を生んだ時の光景を憶い出した。

不安そうに苦い顔をしていた彼が、産婆から少し手を貸してくれといわれて産室へ入った時、彼女は骨に応えるような恐ろしい力でいきなり健三の腕に獅噛み付いた。そうして拷問でもされる人のように唸った。彼は自分の細君が身体の上に受けつつある苦痛を精神的に感じた。自分が罪人ではないかという気さえした。



「産をするのも苦しいだろうが、それを見ているのも辛いものだぜ」

「じゃどこかへ遊びにでもいらっしやいな」

「一人で生めるかい」

細君は何とも答えなかった。夫が外国へ行っている留守に、次の娘を生んだ時の事などはまるで口にしなかった。健三も訊いて見ようとは思わなかった。生れ付心配性な彼は、細君の唸り声うなを余所よそにして、ぶらぶら外を歩いていられるような男ではなかった。

産婆が次に顔を出した時、彼は念を押した。

「一週間以内かね」

「いえもう少し後あとでしょう」

健三も細君もその気でいた。

## 八十

日取が狂って予期より早く産気さんけづいた細君は、苦しそうな声を出して、傍そばに寐ねている夫の夢を驚ろかした。

「先刻さつきから急に御腹おなかが痛み出して……」

「もう出そうなのかい」

健三にはどの位な程度で細君の腹が痛んでいるのか分らなかった。彼は寒い夜の中に夜具から顔だけ出して、細君の様子をそつと眺めた。

「少し撫<sup>さす</sup>って遣<sup>や</sup>ろうか」

起き上る事の臆<sup>おっくう</sup>な彼は出来るだけ口先で間に合せようとした。彼は産についての経験をただ一度しか有<sup>も</sup>っていなかった。その経験も大方は忘れていた。けれども長女の生れる時には、こういう痛みが、潮の満干<sup>みちひ</sup>のように、何度も来たり去ったりしたように思えた。

「そう急に生れるもんじゃないだろうな、子供ってものは。一仕<sup>ひとし</sup>

切痛<sup>きり</sup>んではまた一仕切治まるんだろう」

「何だか知らないけれども段々痛くなるだけですわ」

細君の態度は明らかに彼女の言葉を証拠立てた。凝<sup>じつ</sup>と蒲団<sup>ふとん</sup>の上に落付<sup>おちつ</sup>いていられない彼女は、枕を外して右を向いたり左へ動いたりした。男の健三には手の着けようがなかった。

「産婆を呼ぼうか」

「ええ、早く」

職業柄産婆の宅<sup>うち</sup>には電話が掛けていたけれども、彼の家にそんな気の利いた設備のあろうはずはなかった。至急を要する場合は起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の医者<sup>いしや</sup>の所へ馳<sup>か</sup>け付け

るのを例にしていた。

初冬はつふゆの暗い夜はまだ明け離れるのに大分間だいぶんがあつた。彼はその人とその人の門かどを敲たたく下女げじよの迷惑を察した。しかし夜明よあけまで安閑と待つ勇氣がなかつた。寢室ふすまの襖を開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口まで来た彼は、すぐ召使の一人を急せぎ立てて暗い夜の中へ追い遣つた。

彼が細君の枕元へ歸つて来た時、彼女の痛みは益劇ますますはげしくなつた。彼の神経は一分ごとに門前で停とまる車の響を待ち受けなければならぬほどに緊張して来た。

産婆は容易に來なかつた。細君の唸うなる声が絶間たえまなく静かな夜の

室を不安に攪き乱した。五分経つか経たないうちに、彼女は「もう生れます」と夫に宣告した。そうして今まで我慢に我慢を重ねて泳えて来たような叫び声を一度に揚げると共に胎児を分娩した。

「確かりしろ」

すぐ立って蒲団の裾の方に廻った健三は、どうして好いか分らなかった。その時例の洋燈は細長い火蓋の中で、死のように静かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落している辺は、夜具の縞柄さえ判明しないぼんやりした陰で一面に裏まれていた。

彼は狼狽した。けれども洋燈を移して其所を輝すのは、男子の

見るべからざるものを強<sup>し</sup>いて見るような心持がして気が引けた。  
彼はやむをえず暗中に摸索した。彼の右手は忽ち<sup>たちま</sup>一種異様の触覚をもつて、今まで経験した事のない或物に触れた。その或物は寒天のようにぷりぷりしていた。そうして輪廓からいっても恰好<sup>かっこう</sup>の判然しない何かの塊<sup>かたまり</sup>に過ぎなかった。彼は気味の悪い感じを彼の全身に伝えるこの塊を軽く指頭で撫<sup>な</sup>でて見た。塊りは動きもしなければ泣きもしなかった。ただ撫でるたんびにぷりぷりした寒天のようなものが剥<sup>は</sup>げ落ちるように思えた。もし強く抑えたり持ったりすれば、全体がきつと崩れてしまうに違ないと彼は考えた。彼は恐ろしくなつて急に手を引込<sup>ひっこ</sup>めた。

「しかしこのままにして放って置いたら、風邪を引くだろう、寒さで凍えてしまってだろう」

死んでいるか生きてるかさえ弁別みわけのつかない彼にもこういう懸念が湧わいた。彼は忽ち出産の用意が戸棚の中うちに入れてあるといった細君の言葉を思い出した。そうしてすぐ自分の後部うしろにある唐紙からかみを開けた。彼は其所から多量の綿を引き摺ずり出した。脱脂綿という名さえ知らなかった彼は、それをむやみに千切ちぎって、柔かい塊の上に載せた。



その内待<sup>まち</sup>に待った産婆が来たので、健三は漸<sup>ようや</sup>く安心して自分の室<sup>へや</sup>へ引き取った。

夜<sup>よ</sup>は間もなく明けた。赤子<sup>あかご</sup>の泣く声が家の中の寒い空気を顫<sup>ふる</sup>わせた。

「御安産で御目出とう御座います」

「男かね女かね」

「女の御子さんで」

産婆は少し気の毒そうに途中で句を切った。

「また女か」

健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今

度生れたのもまた女、都合三人の娘の父になった彼は、そう同じものばかり生んでどうする気だろうと、心の中で暗に細君を非難した。しかしそれを生ませた自分の責任には思い到らなかつた。

田舎で生まれた長女は肌理の濃やかな美しくしい子であつた。健

三はよくその子を乳母車に乗せて町の中を後から押して歩いた。

時によると、天使のように安らかな眠に落ちた顔を眺めながら宅へ歸つて来た。しかし当にならないのは想像の未来であつた。健

三が外国から歸つた時、人に伴れられて彼を新橋に迎えたこの娘は、久しぶりに父の顔を見て、もっと好い御父さまかと思つたと傍のものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに

悪い方に變化していた。彼女の顔は段々丈が詰つて来た。輪廓に角が立った。健三はこの娘の容貌の中にいつか成長しつつある自分の相好の悪い所を明らかに認めなければならなかった。

次女は年が年中腫物だらけの頭をしていた。風通しが悪いからだろうというのが本で、とうとう髪の毛をじよぎじよぎに剪ってしまった。顴の短かい眼の大きなその子は、海坊主の化物のような風をして、其所をうろろろしていた。

三番目の子だけが器量好く育とうとは親の慾目にも思えなかった。

「ああいうものが続々生れて来て、必竟どうするんだらう」

彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、こういう自分や自分の細君なども、必竟どうするんだろうという意味も臃氣おぼろげに交まじっていた。

彼は外へ出る前にちよつと寢室へ顔を出した。細君は洗い立てのシーツの上に穩かに寐ねていた。子供も小さい附属物のように、厚い綿の入った新調の夜具蒲団ふとんに包くるまれたまま、傍に置いてあった。その子供は赤い顔をしていた。昨夜暗闇ゆうべくらやみで彼の手に触れた寒天のような肉塊とは全く感じの違ふものであつた。

一切も綺麗きれいに始末されていた。其所そこいらには汚よごれ物の影さえ見えなかつた。夜来やらいの記憶は跡方もない夢らしく見えた。彼は産婆

の方を向いた。

「蒲団は換えて遣ったのかい」

「ええ、蒲団も敷布も換えて上げました」

「よくこう早く片付けられるもんだね」

産婆は笑うだけであつた。若い時から独身で通して来たこの女  
の声や態度はどことなく男らしかった。

「貴夫がむやみに脱脂綿を使つて御しまいになつたものだから、  
足りなくつて大変困りましたよ」

「そうだろう。随分驚ろいたからね」

こう答えながら健三は大して気の毒な思いもしなかった。それ

よりも多量に血を失なつて蒼い顔あおをしている細君の方が懸念の種になつた。

「どうだ」

細君は微かすかに眼を開けて、枕の上で軽く肯うなずいた。健三はそのまま外へ出た。

例刻に歸つた時、彼は洋服のままでもた細君の枕元すわに坐つた。  
「どうだ」

しかし細君はもう肯うなずかなかつた。

「何だか変なようです」

彼女の顔は今朝見た折と違つて熱で火照ほつていた。

「心持が悪いのかい」

「ええ」

「産婆を呼びに遣ろうか」

「もう来るでしょう」

産婆は来るはずになっていた。

## 八十二

やがて細君の腋わきの下に験温器あてが宛あてがわれた。

「熱が少し出ましたね」

産婆はこういつて度盛どもりの柱の中に上のぼった水銀を振り落した。彼女は比較的言葉寡すくなであつた。用心のため産科の医者を呼んで診みてもらつたらどうだという相談さえせずに歸つてしまった。

「大丈夫なのかな」

「どうですか」

健三は全くの無知識であつた。熱さえ出ればすぐ産褥熱さんじよくねつじゃなからうかという危惧きぐの念を起した。母から掛り付けて来た産婆に信頼している細君の方がかえつて平氣であつた。

「どうですか、御前の身体からだじゃないか」

細君は何とも答えなかつた。健三から見ると、死んだつて構わ



ないという表情がその顔に出ているように思えた。

「人がこんなに心配して遣るのに」

この感じを翌る日まで持ち続けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。そうして午後に歸つて来て、細君の熱がもう退めていゝる事に気が付いた。

「やっぱり何でもなかったのかな」

「ええ。だけど何時また出て来るか分りませんわ」

「産をすると、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」

健三は真面目であつた。細君は淋しい頬に微笑を洩らした。

熱は幸にしてそれぎり出なかつた。産後の経過は先ず順当に

行つた。健三は既定の三週間を床の上に過すべく命ぜられた細君の枕元へ来て、時々話をしながら坐<sup>すわ</sup>つた。

「今度<sup>こんだ</sup>は死ぬ死ぬっていいながら、平気で生きているじゃないか」

「死んだ方が好ければ何時でも死にます」

「それは御随意だ」

夫の言葉を笑談<sup>しょうだん</sup>半分に聴いていられたようになった細君は、自分の生命に対して鈍いながらも一種の危険を感じたその当時を顧みなければならなかった。

「実際今度<sup>こんだ</sup>は死ぬと思つたんですもの」

「どういう訳で」

「訳はないわ、ただ思うのに」

死ぬと思ったのにかえって普通の人より軽い産をして、予想と事実が丁度裏表になった事さえ、細君は気に留めていなかった。

「御前は呑気だね」  
のんき

「貴夫こそ呑気よ」  
あなた

細君は嬉しそうに自分の傍に寐ている赤ん坊の顔を見た。そうして指の先で小さい頬片を突ついて、あやし始めた。その赤ん坊はまだ人間の体裁を具えた眼鼻を有っているとはいえないほど変な顔をしていた。

「産が軽いだけあって、少し小さ過ぎるようだね」

「今に大きくなりますよ」

健三はこの小さい肉の塊りが今の細君のように大きくなる未来を想像した。それは遠い先にあった。けれども途中で命の綱が切れない限り何時か来るに相違なかった。

「人間の運命はなかなか片付かないもんだな」

細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。そうしてその意味が解らなかった。

「何ですって」

健三は彼女の前に同じ文句を繰り返すべく余儀なくされた。

「それがどうしたの」

「どうもしないけれども、そうだからそうだというのさ」

「詰らないわ。他に解らない事さえいいや、好いかと思つて」

細君は夫を捨ててまた自分の傍に赤ん坊を引き寄せた。健三は厭な顔もせず書齋へ入った。

彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職になろうとしてならずにいる兄の事があつた。喘息で斃れようと  
してまだ斃れずにいる姉の事があつた。新らしい位地が手に入る  
ようであつた。その他島田の事も御常の事もあつた。そうして自分とこれらの人々との関係が皆

なまだ片付かずにいるという事もあった。

## 八十三

子供は一番気楽であつた。生きた人形でも買ってもらつたように喜んで、閑ひまさえあると、新らしい妹いもうとの傍そばに寄りたがつた。その妹の瞬またたき一つさえ驚嘆の種になる彼らには、噫くさめでも欠あくびでも何でもかでも不可思議な現象と見えた。

「今にどんなになるだろう」

当面に忙殺ぼうさいされる彼らの胸にはかつてこうした問題が浮かばな

かった。自分たち自身の今にどんなになるかをすら領解し得ない子供らは、無論今にどうするだろうなどと考えるはずがなかった。

この意味で見た彼らは細君よりもなお遠く健三を離れていた。外から帰った彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやりこれらの一団を眺めた。

「また塊かたまりっているな」

彼はすぐ踵きびすを回めぐらして部屋の外へ出る事があつた。

時によると彼は服も改めずにすぐ其所そこへ胡坐あぐらをかいた。

「こう始終湯婆ゆたんぽばかり入れていちゃ子供の健康に悪い。出してし

まえ。第一いくつ入れるんだ」

彼は何にも解らないくせに好い加減な小言をいってかえって細君から笑われたりした。

日が重なっても彼は赤ん坊を抱いて見る気にならなかった。それでいて一つ室に塊へやっている子供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。

「女は子供を専領してしまうものだね」

細君は驚ろいた顔をして夫を見返した。其所そこには自分が今まで無自覚で実行して来た事を、夫の言葉で突然悟らされたような趣もあつた。



「何で藪やぶから棒にそんな事を仰おつしやるの」

「だってそうじゃないか。女はそれで気に入らない亭主かたきうちに敵討かたきうちをするつもりなんだろう」

「馬鹿を仰おやい。子供わたくしが私の傍そばへばかり寄り付くのは、貴夫あなたが構かまい付けて御遣おやりなさないからです」

「己おれを構かまい付けなくさせたものは、取とりも直たださず御前ごぜんだろう」

「どうでも勝手になさい。何ぞというひがと僻ひがみばかりいつて。どうせ口の達者な貴夫には敵かないませんから」

健三はむしろ真面目まじめであつた。僻くちごうみとも口巧くちごう者とも思わなかつた。

「女は策略が好きだからいけない」

細君は床の上で寐返りねがえをしてあちらを向いた。そうして涙をぽたぽたと枕の上に落した。

「そんなに何も私わたくしを虐めいじなくつても……」

細君の様子を見ていた子供はすぐ泣き出しそうにした。健三の胸は重苦しくなった。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥さんじよくを離れ得ない彼女の前に慰藉いしやの言葉を並べなければならなかった。しかし彼の理解力は依然としてこの同情とは別物であった。細君の涙を拭ふいてやった彼は、その涙で自分の考えを訂正する事が出来なかった。

次に顔を合せた時、細君は突然夫の弱点を刺した。

「貴夫何故その子を抱いて御遣りにならないの」

「何だか抱くと喉呑だからさ。頸でも折ると大変だからね」

「嘘を仰しやい。貴夫には女房や子供に対する情合が欠けているんですよ」

「だって御覧な、ぐたぐたして抱き慣れない男に手なんか出せやしないじゃないか」

実際赤ん坊はぐたぐたしていた。骨などはどこにあるかまるで分らなかった。それでも細君は承知しなかった。彼女は昔し一番目の娘に水疱瘡の出来た時、健三の態度が俄かに一変した実例を

証拠に挙げた。

「それまで毎日抱いて遣っていたのに、それから急に抱かなくなっただじゃありませんか」

健三は事実を打ち消す気もなかった。同時に自分の考えを改めようとしなかった。

「何といたって女には技巧があるんだから仕方がない」

彼は深くこう信じていた。あたかも自分自身は凡<sup>すべ</sup>ての技巧から解放された自由の人であるかのように。

退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く床の上で読んだ。  
時々枕元に置いてある厚紙の汚ならしいその表紙が健三の注意を  
惹く時、彼は細君に向って訊いた。

「こんなものが面白いのかい」

細君は自分の文学趣味の低い事を嘲けられるような気がした。

「いいじゃありませんか、貴夫に面白くなくったって、私にさえ  
面白けりや」

色々な方面において自分と夫の隔離を意識していた彼女は、す  
ぐこんな口が利きたくなつた。

健三の所へ嫁ぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから

官邸に出入<sup>でいり</sup>する二、三の男を知っているぎりであつた。そうしてその人々はみんな健三とは異<sup>ちが</sup>つた意味で生きて行くものばかりであつた。男性に対する觀念をその数人から抽象して健三の所へ持つて来た彼女は、全く予期と反対した一個の男を、彼女の夫において見出した。彼女はそのどっちかが正しくなければならな  
と思つた。無論彼女の眼には自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考えは單純であつた。今にこの夫が世間から教育されて、自分の父のように、型が變つて行くに違ないとい  
う確信を有<sup>も</sup>つていた。

案に相違して健三は頑強<sup>がんきやう</sup>であつた。同時に細君<sup>こぎみ</sup>の膠着力<sup>くわうちりきよく</sup>も固

かった。二人は二人同志で軽蔑<sup>けいべつ</sup>し合った。自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、ややともすると心の中で夫に反抗した。健三はまた自分を認めない細君を忌々<sup>いまいま</sup>しく感じた。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下に見下<sup>みくだ</sup>す態度を公けにして憚<sup>はばか</sup>らなかった。

「じゃ貴夫が教えて下されば好<sup>い</sup>いのに。そんなに他<sup>ひと</sup>を馬鹿にばかりなさらないで」

「御前の方に教えてもらおうという気がないからさ。自分はもうこれで一人前だという腹があっちゃ、己<sup>おれ</sup>にやどうする事も出来ないよ」

誰が盲従するものかという気が細君の胸にあると同時に、到底

啓発しようがないではないかという弁解が夫の心に潜んでいた。二人の間に繰り返されるこうした言葉争いは古いものであった。しかし古いだけで埒らちは一向開かなかつた。

健三はもう飽きたという風をして、手摺てずれのした貸本を投げ出した。

「読むなというんじゃない。それは御前の随意だ。しかし余あんまり眼を使わないようにしたら好いだろう」

細君は裁縫しごが一番好きであつた。夜眼よるが冴さえて寐ねられない時などは、一時でも二時でも構わずに、細い針の目を洋燈ランプの下に運ばせていた。長女か次女が生れた時、若い元氣に任せて、相当の時



期が経過しないうちに、縫物を取上げたのが本で、大變視力を悪くした経験もあつた。

「ええ、針を持つのは毒ですけども、本位構わないでしょう。それも始終読んでいるんじゃないから」

「しかし疲れるまで読み続けない方が好かろう。でないと後で困る」

「なに大丈夫です」

まだ三十に足りない細君には過労の意味が能く解らなかつた。彼女は笑って取り合わなかつた。

「御前が困らなくつても己が困る」

健三はわざと手前勝手らしい事をいった。自分の注意を無にする細君を見ると、健三はよくこんな言葉遣いをしたがった。それがまた夫の悪い癖の一つとして細君には数えられていた。

同時に彼のノートは益細ますますかくなつて行つた。最初蠅はえの頭位であつた字が次第に蟻ありの頭ほどに縮まつて来た。何故なぜそんな小さな文字を書かなければならないのかとさえ考えて見なかつた彼は、殆んど無意味に洋筆ペンを走らせてやまなかつた。日の光りの弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈ランプから出る薄い灯火ともしびの影、彼は暇さえあれば彼の視力を濫費らんぴして顧みなかつた。細君に向つてした注意をかつて自分に払わなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思わなかつ

た。細君もそれで平気らしく見えた。

## 八十五

細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼らの庭に霜柱の錐きりを立てようとしていた。

「大変荒れた事、今年は例いつもより寒いようね」

「血が少なくなったせいで、そう思うんだらう」

「そうでしょうかしら」

細君は始めて気が付いたように、両手を火鉢ひばちの上に翳かざして、自

分の爪つめの色を見た。

「鏡を見たら顔の色でも分りそうなものなのにね」

「ええ、そりや分ってますわ」

彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白あおしろい頬ほおを二、三度撫なでた。

「しかし寒い事も寒いんでしょう、今年は」

健三には自分の説明を聴かない細君が可笑おかしく見えた。

「そりや冬だから寒いに極きままっているさ」

細君を笑う健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身体からだに厳あたしく中あたつた。彼はやむをえず書斎に炬燵こたつ

を入れて、<sup>りようひざ</sup>両膝から腰のあたりに浸<sup>し</sup>み込む冷<sup>ひえ</sup>を防いだ。神経衰弱の結果こう感ずるのかも知れないとさえ思わなかった彼は、自分に対する注意の足りない点において、細君と異<sup>かわ</sup>る所がなかった。

毎朝夫を送り出してから髪に櫛<sup>くし</sup>を入れる細君の手には、長い髪の毛が何本となく残った。彼女は梳<sup>す</sup>くたびに櫛の齒に絡<sup>から</sup>まるその抜毛を残り惜<sup>おしげ</sup>気に眺めた。それが彼女には失なわれた血潮よりもかえって大切らしく見えた。

「新らしく生きたものを拵<sup>こしら</sup>え上げた自分は、その償いとして衰えて行かなければならない」

彼女の胸には微<sup>かす</sup>かにこういう感じが湧<sup>わ</sup>いた。しかし彼女はその

微かな感じを言葉に纏めるほどの頭を有っていなかった。同時にその感じには手柄をしたという誇りと、罰を受けたという恨みと、が交っていた。いずれにしても、新らしく生れた子が可愛くなるばかりであつた。

彼女はぐたぐたして手応えのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、その丸い頬へ自分の唇を持って行つた。すると自分から出たものはどうしても自分の物だという気が理窟なしに起つた。

彼女は自分の傍にその子を置いて、また裁ものの板の前に坐つた。そうして時々針の手をやめては、暖かそうに寐ているその顔を、心配そうに上から覗き込んだ。

「そりゃ誰の着物だい」

「やっぱりこの子のです」

「そんなにいくつも要るのかい」

「ええ」

細君は黙って手を運ばしていた。

健三は漸やっと気が付いたように、細君の膝ひざの上に置かれた大きな模様のある切地きれじを眺めた。

「それは姉から祝ってくれたんだろう」

「そうです」

「下らない話だな。金もないのに止せば好いのに」

健三から貰<sup>もら</sup>った小遣<sup>うち</sup>の中を割<sup>さ</sup>いて、こういう贈り物をしなければ気の済まない姉の心持が、彼には理解出来なかつた。

「つまり己<sup>おれ</sup>の金で己<sup>おれ</sup>が買<sup>か</sup>ったと同じ事になるんだからな」

「でも貴夫<sup>あなた</sup>に対する義理だと思<sup>おも</sup>っていらっしゃるんだから仕方がありませんわ」

姉は世間でいう義理を克明に守り過ぎる女であつた。他<sup>ひと</sup>から物を貰<sup>もら</sup>えばきつとそれ以上のものを贈<sup>く</sup>り返<sup>かへ</sup>そうとして苦しがつた。

「どうも困るね、そう義理々々つて、何が義理だかさっぱり解<sup>と</sup>りやしない。そんな形式的な事をするより、自分の小遣<sup>うち</sup>を比<sup>ひ</sup>田<sup>だ</sup>に借<sup>か</sup>りられないような用心でもする方がよっぽど増<sup>ふ</sup>した」



こんな事に掛けると存外無神経な細君は、強いて姉を弁護しようとしなかった。

「今にまた何か御礼をしますからそれで好いでしょう」

他<sup>ひと</sup>を訪問する時に殆<sup>ほと</sup>んど土産<sup>みやげ</sup>ものを持参した例<sup>ためし</sup>のない健三は、それでもまだ不審そうに細君の膝の上にあるめりんすを見詰めていた。

## 八十六

「だから元は御姉<sup>おあねえ</sup>さんの所へ皆なが色んな物を持って来たんで

すつて」

細君は健三の顔を見て突然こんな事をいい出した。――

「十とおのものには十五の返しをなさる御姉さんの気性を知ってるもんだから、皆なその御礼を目的あてに何か呉れるんだそうですよ」

「十のものに十五の返しをするつたって、高が五十銭が七十五銭になるだけじゃないか」

「それで沢山なんでしょう。そういう人たちは」

他ひとから見ると酔興ひととしか思われなほど細かなノートこしらばかり拵こしらえている健三には、世の中にそんな人間が生きていようとさえ思えなかった。

「随分厄介な交際つきあいだね。だいち馬鹿々々しいじゃないか」

「傍はたから見れば馬鹿々々しいようですけれども、その中に入ると、やっぱり仕方がないんでしよう」

健三はこの間よそから臨時に受取った三十円を、自分がどう消費してしまったかの問題について考えさせられた。

今から一カ月余り前、彼はある知人に頼まれてその男の経営する雑誌に長い原稿を書いた。それまで細かいノートより外に何も作る必要のなかった彼に取つてのこの文章は、違った方面に働いた彼の頭脳の最初の試みに過ぎなかった。彼はただ筆の先にしたた滴る面白い気分きぶんに駆られた。彼の心は全く報酬を予期していなかつ

た。依頼者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外なものを拾ったように喜んだ。

兼てからわが座敷の如何にも殺風景なのを苦に病んでいた彼は、すぐ団子坂にある唐木の指物師の所へ行つて、紫檀の懸額を一枚作らせた。彼はその中に、支那から歸った友達に貰った北魏の二十品という石摺のうちにある一つを択り出して入れた。それからその額を環の着いた細長い胡麻竹の下へ振ら下げて、床の間の釘へ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付かないせいか、額は静かな時でも斜に傾いた。

彼はまた団子坂を下りて谷中の方へ上つて行つた。そうして其

所<sup>こ</sup>にある陶器店から一個の花<sup>は</sup>瓶<sup>ないけ</sup>を買って来た。花瓶は朱色であつた。中に薄い黄で大きな草花が描かれていた。高さは一尺余りであつた。彼はすぐそれを床の間の上へ載せた。大きな花瓶とふらふらする比較的小さい懸額とはどうしても釣合が取れなかつた。彼は少し失望したような眼をしてこの不調和な配合を眺めた。けれどもまるで何にもないよりは増しだと考えた。趣味に贅<sup>ぜい</sup>沢<sup>たく</sup>をいふ余裕のない彼は、不満足のうち満足しなければならなかつた。

彼はまた本郷通りにある一軒の呉服屋へ行つて反<sup>たん</sup>物<sup>もの</sup>を買つた。織物について何の知識もない彼はただ番頭が見せてくれるものの

うちから、好<sup>い</sup>い加減な選択をした。それはむやみに光<sup>か</sup>る緋<sup>すい</sup>であつた。幼稚な彼の眼には光らないものより光るものの方が上等に見えた。番頭<sup>ばんとう</sup>に揃<sup>そろ</sup>いの羽織<sup>はおり</sup>と着物<sup>きもの</sup>を拵<sup>こしら</sup>えるべく勧められた彼は、遂に一匹<sup>いっせき</sup>の伊勢崎銘仙<sup>いせざきめいせん</sup>を抱えて店を出た。その伊勢崎銘仙という名前さえ彼はそれまでついぞ聞いた事がなかった。

これらの物を買<sup>と</sup>い調<sup>と</sup>えた彼は毫<sup>ごう</sup>も他人について考えなかった。新らしく生れる子供さえ眼中になかった。自分より困っている人の生活などはてんから忘れていた。俗社会の義理<sup>かちよう</sup>を過重<sup>かちよう</sup>する姉に比べて見ると、彼は憐<sup>あわ</sup>れなものに対する好意すら失なっていた。「そう損をしてまでも義理が尽されるのは偉いね。しかし姉は生

れ付いての見栄坊<sup>みえぼう</sup>なんだから、仕方がない。偉くない方がまだ増  
しだろう」

「親切<sup>しんせつぎ</sup>気はまるでないんでしょうか」

「そうさな」

健三はちよつと考えなければならなかった。姉は親切気のある  
女に違いなかった。

「ことによると己<sup>おれ</sup>の方が不人情に出来ているのかも知れない」

この会話がまだ健三の記憶を新しく彩いろどっていた頃、彼は御常おつねから第二回の訪問を受けた。

先達せんだつて見た時とほぼ同じように粗末な服装なりをしている彼女の恰かつ好こうは、寒さと共に襦袢じゆばん胴着どうぎの類でも重ねたのだろう、前よりは益ますます丸まっちくなっていた。健三は客のために出した火鉢ひばちをすぐその人の方へ押し遣やった。

「いえもう御構ごい下さいますな。今日きょうは大分だいぶん御暖おあつたかで御座ごいますから」

外部そとには穏やかな日が、障子に簾はめめた硝子ガラス越ごしに薄く光っていた。



「あなたは年を取って段々御肥りになるようですね」

「ええ御蔭さまで身体の方はまことに丈夫で御座います」

「そりゃ結構です」

「その代り身上の方はただ痩せる一方で」

健三には老後になってからこうむくむく肥る人の健康が疑がわれた。少なくとも不自然に思われた。どこか不気味に見えるところもあった。

「酒でも飲むんじゃないだろうか」

こんな推察さえ彼の胸を横切った。

御常の肌身に着けているものは悉とく古びていた。幾度水を

潜くぐったか分らないその着物なり羽織はおりなりは、どこかに絹の光が残っているようで、また変にごつごつしていた。ただどんなに時代を食っても、綺麗きれいに洗張あらいはりが出来ている所に彼女の気性が見えるだけであつた。健三は丸いながら如何いかにも窮屈そうなその人の姿を眺めて、彼女の生活状態と彼女の口に距離のない事を知つた。

「どこを見ても困る人だらけで弱りますね」

「こちらなどが困っていらしっちゃあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」

健三は弁解する気にさえならなかった。彼はすぐ考えた。

「この人は己おれを自分より金持と思つているように、己を自分より

丈夫だとも思っているのだろう」

近頃の健三は実際健康を損な<sup>そこ</sup>っていた。それを自覚しつつ彼は医者にも診<sup>み</sup>てもらわなかった。友達にも話さなかった。ただ一人で不愉快を忍んでいた。しかし身体の未来を想像するたんびに彼はむ・し・や・く・し・や・した。或時は他<sup>ひと</sup>が自分をこんなに弱くしてしまつたのだというような気を起して、相手のないのに腹を立てた。

「年が若くって起居<sup>たちい</sup>に不自由さえなければ丈夫だと思ふんだろう。門構<sup>もんがまえ</sup>の宅<sup>うち</sup>に住んで下女<sup>げじよ</sup>さえ使っていれば金でもあると考えるように」

健三は黙って御常の顔を眺めていた。同時に彼は新らしく床<sup>とこ</sup>の

間に飾まられた花瓶はないけとその後のに懸かつてゐる懸額かけがくとを眺めた。近いうちに袖そでを通すべきぴかぴかする反物たんものも彼の心のうちにあつた。彼は何故なぜこの年寄なに対して同情を起し得ないのだろうかと怪しんだ。

「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」

彼は姉の上に加えた評をもう一遍腹の中で繰り返した。そうして「何不人情でも構うものか」という答を得た。

御常は自分の厄介になつてゐる娘婿の事について色々な話をし始めた。世間一般によく見る通り、その人の手腕うでがすぐ彼女の問題になつた。彼女の手腕というのは、つまり月々入る金の意味

で、その金より外に人間の価値を定めるものは、彼女に取って、広い世界に一つも見<sup>み</sup>当<sup>あた</sup>らないらしかった。

「何しろ取<sup>とり</sup>高<sup>だか</sup>が少ないもんですから仕方が御座いません。もう少し稼<sup>かせ</sup>いでくれると好<sup>い</sup>いのですけれども」

彼女は自分の娘婿<sup>つら</sup>を捉<sup>とら</sup>まえて愚<sup>や</sup>図<sup>ぐ</sup>だとも無<sup>む</sup>能<sup>のう</sup>だともいわない代りに、毎月彼の労力が産み出す収入の高を健三の前に並べて見せた。あたかも物指<sup>ものさし</sup>で反物の寸法さえ計れば、縞柄<sup>しまがら</sup>だの地質だのは、まるで問題にならないといった風に。

生憎<sup>あいにく</sup>健三はそうした尺度で自分を計ってもらいたくない商売をしている男であった。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければ

ならなかった。

## 八十八

好い加減な時分に彼は立って書斎に入った。机の上に載せてある紙入を取って、そつと中を改めると、一枚の五円札があつた。彼はそれを手に握つたまま元の座敷へ歸つて、御常の前へ置いた。

「失礼ですがこれで俤くるまへでも乗って行つて下さい」

「そんな御心配を掛けては済みません。そういうつもりで上あがつた

のでは御座いせんから」

彼女は辞退の言葉と共に紙幣を受け納めて懐ふところへ入れた。

小遣を遣やる時の健三がこの前と同じ挨拶あいさつを用いたように、それを貰もらう御常の辞令も最初と全く違わなかった。その上偶然にも五円という金高かねだかさえ一致していた。

「この次来た時に、もし五円札がなかったらどうしよう」

健三の紙入がそれだけの実質で始終充たされていない事はその所有主の彼に知れているばかりで、御常に分るはずがなかった。

三度目に来る御常を予想した彼が、三度目に遣る五円を予想する訳に行かなかった時、彼はふと馬鹿々々しくなった。

「これからあの人が来ると、何時でも五円遣らなければならぬような気がする。つまり姉が要<sup>い</sup>らざる義理<sup>ぎりだて</sup>立をするのと同じ事なのかしら」

自分の関係した事じゃないといった風に熨斗<sup>ひのし</sup>を動かしていた細君は、手を休めずにこういった。――

「ないときは遣らないでも好<sup>い</sup>いじゃありませんか。何もそう見栄<sup>みえ</sup>を張る必要はないんだから」

「ない時に遣ろうったって、遣れないのは分ってるさ」

二人の問答はすぐ途切れてしまった。消えかかった炭を熨斗<sup>ひのし</sup>から火鉢<sup>ひばち</sup>へ移す音がその間に聞こえた。



「どうしてまた今日は五円入っていたんです。貴夫あなたの紙入かみいれに」

健三は床の間に釣り合わない大きな朱色の花瓶はなびけを買うのに四円いくらか払った。懸額かけがくを誂あつらえるとき五円なにがしか取られた。

指物師さしものしが百円に負けて置くから買わないかといった立派な紫檀したんの書棚をじろじろ見ながら、彼はその二十分の一にも足らない代価を大事そうに懷中から出して匠人しやうにんの手に渡した。彼はまたびかびかする一匹の伊勢崎銘仙いせざきめいせんを買うのに十円余りを費やした。友達から受取った原稿料がこう形を変えたあとに、手垢てあかの付いた五円札がたった一枚残ったのである。

「実はまだ買いたいものがあるんだがな」

「何を御買いになるつもりだったの」

健三は細君の前に特別な品物の名前を挙げる事が出来なかった。

「沢山あるんだ」

慾に際限のない彼の言葉は簡単であつた。夫と懸け離れた好尚を有<sup>も</sup>っている細君は、それ以上追窮する面倒を省いた代りに、外の質問を彼に掛けた。

「あの御婆<sup>おばあ</sup>さんは御姉<sup>おあねえ</sup>さんなんぞよりよっぽど落ち付いているのね。あれじゃ島田<sup>うち</sup>って人と宅<sup>うち</sup>で落ち合つても、そう喧嘩<sup>けんか</sup>もしないでしょう」

「落ち合わないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顔を見合せでもして見るがいい、それこそ堪<sup>たま</sup>らないや。一人ずつ相手にしているんでさえ沢山な所へ持つて来て」

「今でもやっぱり喧嘩が始まるでしょうか」

「喧嘩はとにかく、己<sup>おれ</sup>の方が厭<sup>いや</sup>じゃないか」

「二人ともまだ知らないようね。片っ方が宅<sup>うち</sup>へ来る事を」

「どうだか」

島田はかつて御常の事を口にしなかった。御常も健三の予期に反して、島田については何にも語らなかった。

「あの御婆さんの方がまだあの人より好<sup>い</sup>いでしょう」

「どうして」

「五円貰うと黙って帰って行くから」

島田の請求慾の訪問ごとに増長するのに比べると、御常の態度は尋常に違なかつた。

## 八十九

日ならず鼻の下の長い島田の顔がまた健三の座敷に現われた時、彼はすぐ御常の事を聯想れんそうした。

彼らだって生れ付いての敵同志かたきでない以上、仲の好いい昔もあつ

たに違ない。他<sup>ひと</sup>から爪<sup>つめ</sup>に灯<sup>ひ</sup>を点<sup>とも</sup>すようだといわれるのも構わずに、金ばかり溜<sup>た</sup>めた当時は、どんなに楽しかったろう。どんな未来の希望に支配されていただろう。彼らに取<sup>む</sup>つて睦<sup>むつ</sup>ましさの唯一の記念とも見るべきその金がどこかへ飛んで行<sup>い</sup>ってしまった後<sup>あと</sup>、彼らは夢のような自分たちの過去を、果してどう眺<sup>のぞ</sup>めているだろう。

健三はもう少しで御常の話を島田にするところであつた。しかし過去に無感覚な表情しか有<sup>も</sup>たない島田の顔は、何事も覚えていないように鈍<sup>どん</sup>かつた。昔の憎<sup>ぞう</sup>悪<sup>お</sup>、古い愛<sup>あい</sup>執<sup>しゆう</sup>、そんなものは当時の金と共に彼の心から消え失せてしまつたと思われなかつた。

彼は腰から烟草タバコ入を出して、刻み烟草を雁首がんくびへ詰めた。吸殻すいがらを落すときには、左の掌てのひらで烟管キセルを受けて、火鉢ひばちの縁たたを敲たたかなかつた。脂やにが溜たまっていると見えて、吸う時にじゅじゅ音がした。彼は無言で懐中ふところを探った。それから健三の方を向いた。

「少し紙はありませんか、生憎あいにく烟管が詰あつて」

彼は健三から受取った半紙を割さいて小撚こよりを拵こしらえた。それで二返も三返も羅宇ラウの中を掃除した。彼はこういう事をするのに最も馴なれた人であつた。健三は黙つてその手際を見ていた。

「段々暮になるんでさぞ御忙がしいでしょう」

彼は疎通とおりの好くなつた烟管をぶつぶつと心持好さそうに吹きな

がらこういった。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりゃ結構だ。大抵の人はそうは行きませんよ」

島田がまだ何かいおうとしているうちに、奥で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のようですね」

「ええ、つい此間こないだ生れたばかりです」

「そりゃどうも。ちっ些とも知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へええ、失礼だがこれで幾人目いくたりですか」

島田は色々な事を訊いた。それに相当な受応うけこたえをしている健三の胸にどんな考えが浮かんでいるかまるで気が付かなかった。

出産率が殖えると死亡率も増すという統計上の議論を、つい四、五日前ある外国の雑誌で読んだ健三は、その時赤ん坊がどこかで一人生れれば、年寄が一人どこかで死ぬものだというような理窟とも空想とも付かない変な事を考えていた。

「つまり身代りに誰かが死ななければならぬのだ」

彼の観念は夢のようにぼんやりしていた。詩として彼の頭をぼうつと侵すだけであつた。それをもつと明瞭めいりょうになるまで理解の力で押し詰めて行けば、その身代りは取も直さず赤ん坊の母親に違



なかった。次には赤ん坊の父親でもあった。けれども今の健三は其所<sup>そこ</sup>まで行く気はなかった。ただ自分の前にいる老人にだけ意味のある眼<sup>まなこ</sup>を注いだ。何のために生きているか殆<sup>ほと</sup>んど意義の認めようのないこの年寄は、身代りとして最も適当な人間に違なかった。

「どういう訳でこう丈夫なのだろう」

健三は殆んど自分の想像の残酷さ加減さえ忘れてしまった。そうして人並でないわが健康状態については、毫<sup>毫</sup>も責任がないものの如き忌々<sup>いまいまい</sup>しさを感じた。その時島田は彼に向って突然こういった。――

「御縫おぬいもとうとう亡くなってね。御祝儀は済んだが」

とても助からないという事だけは、脊髄病せきずいびょうという名前から推おして、とうに承知していたようなものの、改まってそういわれて見ると、健三も急に気の毒になった。

「そうですか。可愛想かわいそうに」

「なに病気が病気だからとても癒なおりっこないんです」

島田は平然としていた。死ぬのが当り前だといったように烟草の輪を吹いた。

しかしこの不幸な女の死に伴なって起る経済上の影響は、島田に取って死そのものよりも遥はるかに重大であつた。健三の予想はすぐ事実となつて彼の前に現れなければならなかつた。

「それについて是非一つ聞いてもらわないと困る事があるんですが」

此所ここまで来て健三の顔を見た島田の様子は緊張していた。健三は聴きこかない先からその後を推察する事が出来た。

「また金でしょう」

「まあそうです。御縫が死んだんで、柴野と御藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今までのように月々送らせる訳に行かな

くなつたんでね」

島田の言葉は変にぞんざいになったり、また鄭寧<sup>ていねい</sup>になつたりした。

「今までは金鵒勲章<sup>きんしゅくしやう</sup>の年金だけはちゃんちゃんどこっちへ来たんですがね。それが急になくなると、まるで目的<sup>あて</sup>が外れるような始末で、私も困<sup>わたし</sup>るんです」

彼はまた調子を改めた。

「とにかくこうなつちや、御前を措<sup>お</sup>いてもう外に世話をしてもらう人は誰もありやしない。だからどうかしてくれなくつちや困る」

「そう他にのし懸<sup>ひと</sup>つて来たって仕方ありません。今の私<sup>わたくし</sup>にはそれだけの事をしなければならぬ因縁<sup>いんねん</sup>も何もないんだから」

島田は凝<sup>じつ</sup>と健三の顔を見た。半ば探りを入れるような、半ば弱いものを脅かすようなその眼付は、単に相手の心を激昂<sup>げっこう</sup>させるだけであつた。健三の態度から深入<sup>ふかいり</sup>の危険を知つた島田は、すぐ問題を区切つて小さくした。

「永い間の事はまた緩々<sup>ゆるゆる</sup>御話しをすゝとして、じゃこの急場だけでも一つ」

健三にはどういふ急場が彼らの間に持ち上つてゐるのか解らなかつた。

「この暮を越さなくっちゃならないんだ。どこの宅<sup>うち</sup>だって暮になりや百と二百と纏<sup>まと</sup>った金の要<sup>い</sup>るのは当り前だろう」

健三は勝手にしろという気になった。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑談<sup>しょうだん</sup>いっちゃいけない。これだけの構<sup>かまえ</sup>をしていて、その位の融通が利かないなんて、そんなはずがあるもんか」

「あつてもなくつても、ないからないというだけの話です」

「じゃいうが、御前の収入は月に八百円あるそうじゃないか」

健三はこの無茶苦茶な言掛<sup>いいがか</sup>りに怒<sup>おこ</sup>らされるよりはむしろ驚ろかされた。

「八百円だろうが千円だろうが、私の収入は私の収入です。貴方<sup>あなた</sup>の関係した事じゃありません」

島田は其所<sup>そこ</sup>まで来て黙った。健三の答が自分の予期に外れたというような風も見えた。ずうずうしい割に頭の発達していない彼は、それ以上相手をどうする事も出来なかった。

「じゃいくら困っても助けてくれないというんですね」

「ええ、もう一文も上ません」

島田は立ち上った。沓脱<sup>くつぬぎ</sup>へ下りて、開けた格子<sup>こうし</sup>を締める時に、彼はまた振り返った。

「もう参<sup>まゐ</sup>りませんから」

最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中に輝やいた。健三は敷居の上に立って明らかにその眼を見下した。しかし彼はその輝きのうちに何らの凄さも怖ろしさもまた不気味さも認めなかった。彼自身の眸から出る怒りと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに充分であつた。

細君は遠くから暗に健三の気色を窺つた。

「一体どうしたんです」

「勝手にするが好いや」

「また御金でも呉れろって来たんですか」

「誰が遣るもんか」



細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるような態度を見せた。

「あの御婆おばあさんの方が細く長く続くからまだ安全ね」

「島田の方だって、これで片付くもんかね」

健三は吐き出すようにこういつて、来るきたべき次の幕さえ頭の中に予想した。

## 九十一

同時に今まで眠っていた記憶も呼び覚まされずには済まなかった。彼は始めて新らしい世界に臨む人の鋭どい眼をもつて、実家

へ引き取られた遠い昔を鮮明かに眺めた。

実家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しにこんな出来損いできそこなが舞い込んで来たかという顔付をした父は、殆んど子としての待遇を彼に与えなかつた。今までと打つて變つた父のこの態度が、生の父うみに対する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に対してにこにこしていた父と、厄介物を背負い込んでからすぐ慳貪けんどんに調子を改めた父とを比較して一度は驚ろいた。次には愛想あいそをつかした。しかし彼はまだ悲觀する事を知らなかつた。發育に伴なう彼の生氣は、いくら抑え付けられても、下からむくむくと頭を擡もたげた。彼は遂

に憂鬱ゆううつにならずに済んだ。

子供を沢山有もっていた彼の父は、毫ごうも健三に依怙かかる気がなかった。今に世話になろうという下心のないのに、金を掛けるのは一銭でも惜しかった。繋つながる親子の縁で仕方なしに引き取ったようなものの、飯を食わせる以外に、面倒を見て遣やるのは、ただ損になるだけであつた。

その上肝心の本人は歸つて来ても籍は復もとらなかつた。いくら実家で丹精して育て上たにしたところで、いざという時に、また伴つれて行かれればそれまでであつた。

「食わすだけは仕方がないから食わして遣る。しかしその外の事

はこつちじゃ構えない。先方むこうでするのが当然だ」

父の理窟はこうであつた。

島田はまた島田で自分に都合の好い方からばかり事件の成行なりゆきを  
観望していた。

「なに実家へ預けて置きさえすればどうにかするだろう。その内  
健三が一人前になつて少しでも働らせるようになったら、その時  
表沙汰おもてぎたにしてもこつちへ奪還ふんだくつてしまえばそれまでだ」

健三は海にも住めなかつた。山にもいられなかつた。両方から  
突き返されて、両方の間をまごまごしていた。同時に海のものも  
食い、時には山のものにも手を出した。

実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかった。むしろ物品であつた。ただ実父が我<sup>が</sup>楽<sup>らく</sup>多<sup>た</sup>として彼を取り扱つたのに対して、養父には今に何かの役に立てて遣ろうという目算があるだけであつた。

「もうこつちへ引き取つて、給<sup>きゆう</sup>仕<sup>うじ</sup>でも何でもさせるからそう思うがいい」

健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かのついでにこんな事をいった。健三は驚ろいて逃げ歸つた。酷薄<sup>こはく</sup>という感じが子供心に淡い恐ろしさを与えた。その時の彼は幾<sup>いく</sup>歳<sup>つ</sup>だったか能<sup>よ</sup>く覚え  
ていないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつ

て世間に出なければならぬという慾が、もう充分萌きざしている頃であつた。

「給仕になんぞされては大変だ」

彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸さいわいにしてその言葉は徒勞むだに繰り返されなかつた。彼はどうかこうか給仕にならずに済んだ。

「しかし今の自分はどうして出来上つたのだろう」

彼はこう考えると不思議でならなかつた。その不思議のうちに、自分の周囲と能く闘い終おせたものだという誇りも大分交だいぶんまじつていた。そうしてまだ出来上らないものを、既に出来上つたように

見る得意も無論含まれていた。

彼は過去と現在との対照を見た。過去がどうしてこの現在に発展して来たかを疑がった。しかもその現在のために苦しんでいる自分にはまるで気が付かなかった。

彼と島田との関係が破裂したのは、この現在の御蔭であつた。

彼が御常を忌むのも、姉や兄と同化し得ないのもこの現在の御蔭であつた。細君の父と段々離れて行くのもまたこの現在の御蔭に違なかつた。一方から見ると、他と反ひとそりが合わなくなるように、現在の自分を作り上げた彼は気の毒なものであつた。

## 九十二

細君は健三に向っていった。――

「貴夫<sup>あなた</sup>に気に入る人はどうせどこにもいないでしょうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」

健三の心はこうした諷刺<sup>ふうし</sup>を笑って受けるほど落付<sup>おちつ</sup>いていなかった。周囲の事情は雅量に乏しい彼を益窮屈<sup>ますきまづ</sup>にした。

「御前は役に立ちさえすれば、人間はそれで好<sup>い</sup>いと思っっているんだろう」

「だって役に立たなくっちゃ何にもならないじゃありませんか」



生憎あいにく細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もそういう方面にだけ発達する性質たちであつた。これに反して健三は甚だ実用に遠い生れ付であつた。

彼には転宅の手伝いすら出来なかつた。大掃除の時にも彼は懐ふところ手ろでをしたなり澄ましていた。行李こうり一つ絡からげるにさえ、彼は細紐ほそびきをどう渡すべきものやら分らなかつた。

「男のくせに」

動かない彼は、傍はたのものの眼に、如何いかにも気の利かない鈍物のように映つた。彼はなおさら動かなかつた。そうして自分の本領ほんりやうを益反対ますみへの方面に移して行つた。

彼はこの見地から、昔し細君の弟を、自分の住んでいる遠い田舎<sup>いな</sup>へ伴<sup>か</sup>れて行<sup>つ</sup>って教育しようとした。その弟は健三から見ると如何にも生意気であつた。家庭のうちを横行して誰にも遠慮会釈がなかつた。ある理学士に毎日自宅で課業の復習をしてもらう時、彼はその人の前で構<sup>あぐら</sup>わず胡坐をかいた。またその人の名を何君何君と君づけに呼んだ。

「あれじゃ仕方がない。私<sup>わたくし</sup>に御預けなさい。私が田舎へ連れて行<sup>もつ</sup>て育てるから」

健三の申出<sup>もつしで</sup>は細君の父によつて黙<sup>も</sup>つて受け取られた。そうして黙<sup>も</sup>つて捨てられた。彼は眼前に横暴<sup>ほしいま</sup>を恣<sup>ま</sup>にする我子を見て、何

という未来の心配も抱<sup>いだ</sup>いていないように見えた。彼ばかりか、細君の母も平気であつた。細君も一向氣に掛ける様子がなかつた。

「もし田舎へ遣<sup>や</sup>つて貴夫と衝突したり何<sup>なん</sup>かすると、折合が悪くなつて、後が困るから、それでやめたんだそうです」

細君の弁解を聞いた時、健三は満更<sup>まんぜう</sup>の嘘<sup>うそ</sup>とも思わなかつた。けれどもその他<sup>ほか</sup>にまだ意味が残っているようにも考えた。

「馬鹿じゃありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」

周囲の様子から健三は謝絶の本意がかえつて此<sup>こ</sup>所<sup>こ</sup>にあるのではなからうかと推察した。

なるほど細君の弟は馬鹿ではなかった。むしろ伶俐<sup>りこう</sup>過ぎた。健三にもその点はよく解っていた。彼が自分と細君の未来のために、彼女の弟を教育しようとしたのは、全く見当の違った方面にあった。そうして遺憾ながらその方面は、今日<sup>こんにち</sup>に至るまでいまだに細君の父母にも細君にも了解されていなかった。

「役に立つばかりが能じゃない。その位の事が解らなくってどうするんだ」

健三の言葉は勢い権柄<sup>けんぺい</sup>づくであつた。傷<sup>きず</sup>けられた細君の顔には不満の色がありありと見えた。

機嫌の直つた時細君はまた健三に向つた。――

「そう頭からがみがみいわないで、もっと解るようにいって聞かして下すたら好いでしよう」

「解るようにいおうとすれば、理窟ばかり捏ね返すっていうじゃないか」

「だからもっと解りやすいように。私に解らないような小六こむずかしい理窟はやめにして」

「それじゃどうしたって説明しようがない。数字を使わずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」

「だって貴夫の理窟は、他ひとを捻ねじ伏せるために用いられるとより外に考えようのない事があるんですもの」

「御前の頭が悪いからそう思うんだ」

「私の頭も悪いかも知れませんが、中味のない空っぽの理窟で捻じ伏せられるのは嫌きらいですよ」

二人はまた同じ輪の上をぐるぐる廻り始めた。

## 九十三

面と向って夫としっくり融け合う事の出来ない時、細君はやむをえず彼に背中を向けた。そうして其所そこに寐ねている子供を見た。

彼女は思い出したように、すぐその子供を抱き上げた。

章魚たこのようにぐにゃぐにゃしている肉の塊りと彼女との間には、理窟の壁も分別の牆かきもなかった。自分の触れるものが取も直さず自分のような気がした。彼女は温かい心を赤ん坊の上に吐き掛けるために、唇を着けて所嫌わず接吻せつぶんした。

「貴夫あなたが私わたくしのものでなくっても、この子は私の物よ」

彼女の態度からこうした精神が明らかに読まれた。

その赤ん坊はまだ眼鼻立めはなだちさえ判明はつきりしていなかった。頭には何時

まで待っても殆んど毛ほとらしい毛が生えて来なかった。公平な眼から見ると、どうしても一個の怪物であつた。

「変な子が出来たものだなあ」

健三は正直な所をいった。

「どこの子だって生れたては皆なこの通りです」

「まさかそうでもなからう。もう少しは整ったのも生れるはずだ」

「今に御覧なさい」

細君はさも自信のあるような事をいった。健三には何という見当も付かなかつた。けれども彼は細君がこの赤ん坊のために夜中やちゆう何度となく眼を覚ますのを知っていた。大事な睡眠を犠牲にして、少しも不愉快な顔を見せないのも承知していた。彼は子供に対する母親の愛情が父親のそれに比べてどの位強いかの疑問にさ



え逢着ほうちやくした。

四、五日前少し強い地震のあった時、臆病おくびような彼はすぐ縁えんから庭へ飛び下りた。彼が再び座敷へ上あがつて来た時、細君は思いも掛けない非難を彼の顔に投げ付けた。

「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構わない気なんだから」

何故なぜ子供の安危あんきを自分より先に考えなかったかというのが細君の不平であつた。咄嗟とつさの衝動から起つた自分の行為に対して、こんな批評を加えられようとは夢にも思っていなかった健三は驚ろいた。

「女にはああいう時でも子供の事が考えられるものかね」

「当り前ですわ」

健三は自分が如何にも不人情のような気がした。

しかし今の彼は我物顔に子供を抱いている細君を、かえって冷かに眺めた。

「訳の分らないものが、いくら束になっただって仕様がなない」

しばらくすると彼の思索がもつと広い区域にわたって、現在から遠い未来に延びた。

「今にその子供が大きくなって、御前から離れて行く時期が来るに極きまっている。御前は己おれと離れても、子供とさえ融け合って一つになっていれば、それで沢山だという氣でいるらしいが、それは

間違だ。今に見ろ」

書齋に落付いた時、彼の感想がまた急に科学的色彩を帯び出した。

「芭蕉に実が結ると翌年からその幹は枯れてしまう。竹も同じ事である。動物のうちには子を生むために生きているのか、死ぬために子を生むのか解らないものがいくらでもある。人間も緩慢ながらそれに準じた法則にやっぱり支配されている。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犠牲にして子供に生を与えた以上、また余りのあらゆるものを犠牲にして、その生を守護しなければならぬまい。彼女が天からそういう命令を受けてこの世に出たとする

ならば、その報酬として子供を独占するのは当たり前だ。故意というよりも自然の現象だ」

彼は母の立場をこう考え尽した後、<sup>あと</sup>父としての自分の立場をも考えた。そうしてそれが母の場合とどう違っているかに思い<sup>いた</sup>到つた時、彼は心のうちでまた細君に向っていった。

「子供を有<sup>も</sup>った御前は仕合せである。しかしその仕合せを享<sup>う</sup>ける前に御前は既に多大な犠牲を払っている。これから先も御前の気の付かない犠牲をどの位払うか分らない。御前は仕合せかも知れないが、実は気の毒なものだ」

## 九十四

年は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細かい雪片がちらちらと見え出した。子供は日に何度となく「もういくつ寝ると御正月」という唄をうたつた。彼らの心は彼らの口にする唱歌の通りであつた。来るべき新年の希望に充ちていた。

書斎にいる健三は時々手に洋筆を持つたまま、彼らの声に耳を傾けた。自分にもああいう時代があつたのかしらなどと考えた。

子供はまた「旦那の嫌な大晦日」という毬歌をうたつた。健三は苦笑した。しかしそれも今の自分の身の上には痛切に的の中らな

かった。彼はただ厚い四<sup>よ</sup>つ折の半紙の束を、十<sup>とお</sup>も二十も机の上に重ねて、それを一枚ごとに読んで行く努力に悩まされていた。彼は読みながらその紙へ赤い印<sup>イン</sup>気で棒を引いたり丸を書いたり三角を附けたりした。それから細かい数字を並べて面倒な勘定もした。

半紙に認ためられたものは悉<sup>ことごと</sup>く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字画さえ判<sup>はん</sup>然<sup>ぜん</sup>しないのが多かった。乱暴で読めないものも時々出て来た。疲れた眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落<sup>が</sup>胆<sup>かり</sup>した。「ペネロピーの仕事」という英語の俚<sup>ことわざ</sup>諺<sup>げん</sup>が何遍となく彼の口<sup>の</sup>に上<sup>の</sup>った。

「何時まで経ったって片付きやしない」

彼は折々筆を擱<sup>お</sup>いて溜息<sup>ためいき</sup>をついた。

しかし片付かないものは、彼の周囲前後にまだいくらでもあった。彼は不審な顔をしてまた細君の持って来た一枚の名刺に眼を注がなければならなかった。

「何だい」

「島田の事についてちょっと御目に掛りたいっていうんです」

「今差<sup>さ</sup>支<sup>し</sup>るからって返してくれ」

一度立った細君はすぐまた戻って来た。

「何時伺<sup>い</sup>ったら好いか御都合を聞かして頂きたいんですって」

健三はそれどころじゃないという顔をしながら、自分の傍そばに高く積み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「何といいましょう」

「明後日あさっての午後に来て下さいといってください」

健三も仕方なしに時日を指定した。

仕事を中絶された彼はぼんやり烟草タバコを吹かし始めた。ところへ細君がまた入って来た。

「帰ったかい」

「ええ」

細君は夫の前に広げてある赤い印しるしの附いた汚ならしい書きもの



を眺めた。夜中に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面倒が健三に解らないように、この半紙の山を綿密に読み通す夫の困難も細君には想像出来なかった。――

調べ物を度外に置いた彼女は、坐<sup>すわ</sup>るとすぐ夫に訊<sup>たず</sup>ねた。――

「また何かそういつて来る気でしょうね。執<sup>しつ</sup>ツ濃<sup>こ</sup>い」

「暮のうちにどうかしようというんだらう。馬鹿らしいや」

細君はもう島田を相手にする必要がないと思った。健三の心はかえって昔の關係上多少の金を彼に遣<sup>や</sup>る方に傾いていた。しかし話は其所<sup>そこ</sup>まで発展する機会を得ずによそへ外<sup>そ</sup>れてしまった。

「御前の宅<sup>うち</sup>の方はどうだい」

「相変らず困るんでしよう」

「あの鉄道会社の社長の口はまだ出来ないのかい」

「あれは出来るんですって。けれどもそうこっちの都合の好いように、ちよつくらちよいとという訳には行かないんでしよう」

「この暮のうちに<sup>む</sup>は六<sup>む</sup>ずかしいのかね」

「とても」

「困るだろうね」

「困っても仕方がありませんわ。何もかもみんな運命なんだから」

細君は割合に落付<sup>おちつ</sup>いていた。何事も諦<sup>あきら</sup>らめているらしく見え

た。

## 九十五

見知らない名刺の持参者が、健三の指定した通り、中なかいちにち一日置いて再び彼の玄関に現れた時、彼はまだささくれた洋筆ペンさき先で、粗末な半紙の上に、丸だの三角だのと色々な符徴を附けるのに忙がしかった。彼の指頭ゆびさきは赤い印気インキで所々汚よごれていた。彼は手も洗わずにそのまま座敷へ出た。

島田のために来たその男は、前の吉田に比べると少し型を異ことに

していたが、健三からいえば、双方とも殆んど差別のない位懸け離れた人間であつた。

彼は縞の羽織に角帯を締めて白足袋を穿いていた。商人とも紳士とも片の付かない彼の様子なり言葉遣なりは、健三に差配という一種の人柄を思い起させた。彼は自分の身分や職業を打ら明ける前に、卒然として健三に訊いた。――

「貴方は私の顔を覚えて御出ですか」

健三は驚ろいてその人を見た。彼の顔には何らの特徴もなかった。強いていえば、今日までただ世帯染みて生きて来たという位のものであつた。

「どうも分りませんね」

彼は勝ち誇った人のように笑った。

「そうでしょう。もう忘れてもいい時分ですから」

彼は区切を置いてまた附け加えた。

「しかし私やこれでも貴方の坊ちゃん坊ちゃんていわれた昔をまだ覚えていますよ」

「そうですか」

健三は素ツ気ない挨拶をしたなり、その人の顔を凝と見守った。

「どうしても思い出せませんか。じゃ御話ししましょう。私や

昔し島田さんが扱所あつかいじよを遣やつていなすった頃、あすこに勤めていたものです。ほら貴方が悪戯いたずらをして、小刀で指を切つて、大騒ぎをした事があるでしょう。あの小刀は私の硯箱すずいばいの中にあつたんでさあ。あの時金盥かなだらうに水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」

健三の頭にはそうした事実が明らかにまだ保存されていた。しかし今自分の前に坐すわっている人のその時の姿などは夢にも憶おもい出せなかった。

「その縁故で今度また私が頼まれて、島田さんのために上あがつたよ  
うな訳合わけあいなんです」

彼は直本題すぐに入った。そうして健三の予期していた通り金の請

求をし始めた。

「もう再び御宅へは伺わないといってますから」

「この間帰る時既にそういつて行っただんです」

「で、どうでしょう、此<sup>ここ</sup>所<sup>こ</sup>いらで綺麗<sup>きれい</sup>に片を付ける事にしたら。

それではないと何時まで経っても貴方が迷惑するぎりですよ」

健三は迷惑を省いてやるから金を出せといった風な相手の口<sup>こう</sup>氣<sup>き</sup>を快よく思わなかった。

「いくら引つ懸っていたって、迷惑じゃありません。どうせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金を出す位なら、出さないで迷惑を我慢していた方が、

私<sup>わたし</sup>にはよッぽど心持が好いんです」

その人はしばらく考えていた。少し困ったという様子も見えた。しかしやがて口を開いた時は思いも寄らない事をいい出した。

「それに貴方も御承知でしょうが、離縁の際貴方から島田へ入れた書付がまだ向うの手にありますから、この際いくらでも纏<sup>まと</sup>めたものを渡して、あの書付と引き易<sup>ひ</sup>えになすった方が好くはありませんか」

健三はその書付を慥<sup>たしか</sup>に覚えていた。彼が実家へ復籍する事になった時、島田は当人の彼から一札入れてもらいたいと主張した



ので、健三の父もやむをえず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執った。そうして今度離縁になったについては、向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだという意味を僅わずか二行余に綴つづって先方へ渡した。

「あんなものは反故同然ですよ。向で持むこつつていても役に立たず、私が貰もらつても仕方がないんだ。もし利用出来る気ならいくらでも利用したら好いでしょう」

健三にはそんな書付を売り付けに掛るその人の態度がなお気に入らなかつた。

## 九十六

話が行き詰るとその人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題を取り上げた。いう事は散漫であつた。理で押せなければ情に訴<sup>こころ</sup>えるという風でもなかつた。ただ物にさえすれば好いという料簡<sup>りょうけん</sup>が露骨に見透かされた。収束するところなく共に動いていた健三はしまいに飽きた。

「書付を買えの、今に迷惑するのが厭<sup>いや</sup>なら金を出せのといわれるとこつちでも断るより外に仕方がありませんが、困るからどうかしてもらいたい、その代り向後<sup>こうご</sup>一切無心がましい事はいつて来な

いと保証するなら、昔の情義上少しの工面はして上げても構いません」

「ええそれがつまり私わたくしの来た主意なんですから、出来るならどうかそう願いたいもんで」

健三はそんなら何故なぜ早くそういわないのかと思った。同時に相手も、何故もつと早くそういつてくれないのかという顔付をした。

「じゃどの位出して下さいます」

健三は黙って考えた。しかしどの位が相当のところだか判明はっきりした目安の出て来きようはずはなかった。その上なるべく少ない方が

彼の便宜であつた。

「まあ百円位なものですね」

「百円」

その人はこう繰り返した。

「どうぞしよう、責<sup>せ</sup>めて三百円位にして遣<sup>や</sup>る訳には行きますまいか」

「出すべき理由さえあれば何百円でも出します」

「御尤<sup>ごもつと</sup>もだが、島田さんもああして困<sup>こ</sup>つてるもんだから」

「そんな事をいやあ、私<sup>わたし</sup>だって困<sup>こ</sup>っています」

「そうですか」

彼の語気はむしろ皮肉であつた。

「元来一文も出さないといったって、貴方あなたの方じゃどうする事も出来ないんでしょう。百円で悪けりや御止およしなさい」

相手は漸ようやく懸引かけひきをやめた。

「じゃともかくも本人によくそう話して見ます。その上でまた上あがる事にしますから、どうぞ何分」

その人が歸つた後で健三は細君に向つた。

「とうとう来た」

「どうしたっていうんです」

「また金を取られるんだ。人さえ来れば金を取られるに極きまってる

から厭だ」

「馬鹿らしい」

細君は別に同情のある言葉を口へ出さなかった。

「だって仕方がないよ」

健三の返事も簡単であつた。彼は其所<sup>そこ</sup>へ落付くまでの筋道を委<sup>くわ</sup>しく細君に話してやるのさえ面倒だつた。

「そりや貴夫<sup>あなた</sup>の御金を貴夫が御遣りになるんだから、私<sup>わたくし</sup>何もいう訳はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は擲<sup>た</sup>き付けるようにこういつて、また書斎へ入った。其所

には鉛筆で一面に汚よごされた紙が所々赤く染ったまま机の上で彼を待っていた。彼はすぐ洋ペ筆を取り上げた。そうして既に汚れたものをなおさら赤く汚さなければならなかった。

客に会う前と会った後との気分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起った時、彼は一旦読み終わったものを念のためまた読んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準であるかどうか、彼には全く分らなかった。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を弁護しながら、ずんずん眼を通し始めた。しかし積重ねた半紙の束は、いくら速力を増しても尽きる期

がなかった。漸く一組を元のように折るとまた新らしく一組を開かなければならなかった。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼はまた洋筆<sup>ペン</sup>を放り出した。赤い印気<sup>インキ</sup>が血のように半紙の上に滲<sup>にじ</sup>んだ。彼は帽子を被<sup>かぶ</sup>つて寒い往来へ飛び出した。

## 九十七

人通りの少ない町を歩いている間、彼は自分の事ばかり考えた。



「御前は必竟ひつきよう何をしに世の中に生れて来たのだ」

彼の頭のどこかでこういう質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそれに答えたくなかつた。なるべく返事を避けようとした。するとその声がなお彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰り返してやめなかつた。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

その声は忽ちたちませせら笑つた。

「分らないのじゃあるまい。分つていても、其所そこへ行けないのだらう。途中で引懸つているのだらう」

「己おれのせいじゃない。己のせいじゃない」

健三は逃げるようにずんずん歩いた。

賑にぎやかな通りへ来た時、迎年の支度に忙しい外界は驚異に近い新らしさを以て急に彼の眼を刺撃しげした。彼の気分は漸ようやく変った。

彼は客の注意を惹ひくために、あらゆる手段を尽して飾り立てられた店頭みせさきを、それからそれと覗のぞき込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚樹さんごじゅの根懸ねがけだの、蒔絵まきえの櫛笄くしこうがいだのを、硝子越ガラスごしに何の意味もなく長い間眺めていた。

「暮になると世の中の人はずっと何か買うものかしら」  
少なくとも彼自身は何にも買わなかった。細君も殆ほとんど何にも買わないといってよかった。彼の兄、彼の姉、細君の父、どれを

見ても、買えるような余裕のあるものは一人もなかった。みんな年を越すのに苦しんでいる連中ばかりであつた。中にも細君の父は一番非道ひどそうに思われた。

「貴族院議員になつてさえいれば、どこでも待つてくれるんだそうですね」

借金取に責められている父の事情を夫に打ち明けたついでに、細君はかつてこんな事をいった。

それは内閣の瓦解がかいした当時であつた。細君の父を閑職から引つ張り出して、彼の辞職を余儀なくさせた人は、自分たちの退しりぞく間際に、彼を貴族院議員に推挙して、幾分か彼に対する義理を立

てようとした。しかし多数の候補者の中から、限られた人員を選ばなければならなかった総理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまった。彼はついに選に洩れた。何かの意味で保険の付いていない人にのみ酷薄であつた債権者は直ちに彼の門に逼った。官邸を引き払った時に召仕の数減らした彼は、少時くして自用俵を廃した。しまいにはわが住宅を挙げて人手に渡した。頃は、もうどうする事も出来なかつた。日を重ね月を追つて益悲境に沈んで行つた。

「相場に手を出したのが悪いんですよ」

細君はこんな事もいった。

「御役人をしている間は相場師の方で儲けさせてくれるんですって。だから好いけれども、一旦役を退くと、もう相場師が構ってくれないから、みんな駄目になるんだそうです」

「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さえ解らない」

「貴方に解らなくったって、そうなら仕方がないじゃありませんか」

「何をいつてるんだ。それじゃ相場師は決して損をしっこないものに極きまっちゃうじゃないか。馬鹿な女だな」

健三はその時細君と取り換わせた談話まで憶おもい出した。

彼はふと気が付いた。彼と擦すれ違ちがう人はみんな急ぎ足に行き過

ぎた。みんな忙がしそうであつた。みんな一定の目的を有<sup>も</sup>つているらしかった。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動すると思われなかつた。

或者はまるで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥<sup>いちべつ</sup>を与えた。

「御前は馬鹿だよ」

稀<sup>まれ</sup>にはこんな顔付をするものさえあつた。

彼はまた宅<sup>うち</sup>へ歸つて赤い印氣<sup>インキ</sup>を汚<sup>きた</sup>ない半紙へなすくり始めた。

二、三日すると島田に頼まれた男がまた刺しを通じて面会を求めに來た。行掛り上断る訳に行かなかった健三は、座敷へ出て差配じみたその人の前に、再び坐すわるべく余儀なくされた。

「どうも御忙がしいところを度々たびたび出まして」

彼は世事慣れた男であつた。口で氣の毒そんな事をいう割に、それほど殊勝な様子を彼の態度のどこにも現わさなかつた。

「実はこの間の事を島田によく話しましたところ、そういう訳なら致し方がないから、金額はそれで宜よろしい、その代りどうか年内に頂戴ちやうだいしたい、とこういふんですがね」

健三にはそんな見込がなかつた。

「年内たつてもう僅わずかの日数しかないじゃありませんか」

「だから向うでも急ぐような訳でしてね」

「あれば今すぐ上げてもいいんです。しかしないんだから仕方がないじゃありませんか」

「そうですか」

二人は少時しばらく無言のままでした。

「どうでしょう、其所そこのところを一つ御奮発は願われますまいか。私も折角わたくしこうして忙がしい中を、島田さんのために、わざわざ遣やつて来たもんですから」

それは彼の勝手であつた。健三の心を動かすに足るほどの手数てかず



でも面倒でもなかった。

「御気の毒ですが出来ませんね」

二人はまた沈黙を間に置いて<sup>あいたい</sup>相對した。

「じゃ何時頃頂けるんでしょう」

健三には何時という<sup>あて</sup>目的もなかった。

「いずれ来年にでもなったらどうかしましょう」

「私もこうして頼まれて<sup>あが</sup>上った以上、何とか向<sup>むこ</sup>へ返事をしなくつ

ちやなりませんから、せめて日限でも一つ御取<sup>おとりきめ</sup>極を願いたいと思

います」

「御尤<sup>ごもつと</sup>もです。じゃ正月一杯とでもして置きましょう」

健三はそれより外にいいようがなかった。相手は仕方なしに帰って行った。

その晩寒さと倦怠けんたいを凌しのぐために蕎麦湯そばゆを拵こしらえてもらった健三は、どろどろした鼠色のものを啜すすりながら、盆を膝ひざの上に置いて傍そばに坐っている細君と話し合った。

「また百円どうかしなくっちゃならない」

「貴夫あなたが遣やらないでも好いものを遣るって約束なんぞなさるから後で困るんですよ」

「遣らないでもいいのだけれども、己おれは遣るんだ」  
言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。

「そう依故地を仰しやればそれまでです」

「御前は人を理窟ぽいとか何とかいって攻撃するくせに、自分にや大変形式ばった所のある女だね」

「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだから」

「理窟と形式とは違うさ」

「貴夫のは同なじですよ」

「じゃいつて聞かせるがね、己は口<sup>ロジック</sup>にだけ論理を有<sup>も</sup>っている男じゃない。口にある論理は己の手にも足にも、身体<sup>からだ</sup>全体にもあるんだ」

「そんなら貴夫の理窟がそう空っぽうに見えるはずがないじゃありませんか」

「空っぽうじゃないんだもの。丁度ころ柿の粉このようなもので、理窟が中うちから白く吹き出すだけなんだ。外部そとから喰く付つけた砂糖とは違ちがうさ」

こんな説明が既に細君には空っぽうな理窟であつた。何でも眼に見えるものを、しつかと手に掴つかまなくつては承知出来ない彼女は、この上夫と議論する事を好まなかつた。またしようと思つても出来なかつた。

「御前が形式張るというのはね。人間の内側はどうでも、外部そとへ

出た所だけを捉<sup>つら</sup>まえさえすれば、それでその人間が、すぐ片付けられるものと思っっているからさ。丁度御前の御父<sup>おとつ</sup>さんが法律家だもんだから、証拠さえなければ文句を付けられる因縁<sup>いんねん</sup>がないと考えているようなもので……」

「父はそんな事をいった事なんぞありやしません。私だってそう外部<sup>うわべ</sup>ばかり飾って生きてる人間じゃありません。貴夫が不断からそんな僻<sup>ひが</sup>んだ眼で他<sup>ひと</sup>を見ていらっしやるから……」

細君の瞼<sup>まぶた</sup>から涙がぽたぽた落ちた。いう事がその間に断絶した。島田に遣る百円の話しが、飛んだ方角へ外<sup>そ</sup>れた。そうして段々<sup>だんだん</sup>こんがら<sup>こんがら</sup>かって来た。

## 九十九

また二、三日して細君は久しぶりに外出した。

「無沙汰見舞かたがた少し歳暮に廻って来ました」

乳呑児を抱いたまま健三の前へ出た彼女は、寒い頬ほおを赤くし

て、暖かい空気の裡なかに尻しりを落付おちつけた。

「御前の宅うちはどうだい」

「別に変った事ありません。ああなると心配を通り越して、かえって平気になるのかも知れませんね」

健三は挨拶あいさつの仕様もなかった。

「あの紫檀したんの机を買わないかっていうんですけれども、縁起が悪  
いから止よしました」

舞葡萄まいぶどうとかいう木の一枚板で中を張り詰めたその大きな唐机とうつくえ  
は、百円以上もする見事なものであった。かつて親類の破産者か  
らそれを借金かたの抵当たに取った細君の父は、同じ運命もとの下に、早晚  
それをまた誰かに持って行かなくてはならなかったのである。  
「縁起はどうでも好いいが、そんな高価たかいものを買かう勇氣は当分  
こつちにもなさそうだ」

健三は苦笑しながら烟草タバコを吹かした。

「そういえば貴夫あなた、あの人に遣やる御金を比田ひださんから借りなくつ

て」

細君は藪やぶから棒にこんな事をいった。

「比田にそれだけの余裕があるのかい」

「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方をやめられたんですつて」

健三はこの新らしい報知を当然とも思った。また異様にも感じた。

「もう老朽だろうからね。しかしやめられれば、なお困るだろうじゃないか」

「追ってはどうか知れないでしょうけれども、差さしあ当り困るよ



うな事はないんですって」

彼の辞職は自分を引き立ててくれた重役の一人が、社と関係を絶った事に起因しているらしかった。けれども永年勤続して来た結果、権利として彼の手に入るべき金は、一時彼の経済状態を潤おすには充分であつた。

「居食いぐいをしていても詰らないから、確かな人があつたら貸したいからどうか世話をしてくれって、今日頼まれて来たんです」

「へえ、とうとう金貸を遣るようになったのかい」

健三は平生へいぜいから島田の因業を嗤わらっていた比田ひだだの姉あねだのを憶おもい浮べた。自分たちの境遇が変ると、昨日きのうまで輕蔑けいべつしていた人の真ま

似ねをして恬てんとして気の付かない姉夫婦は、反省の足りない点においてむしろ子供染じみていた。

「どうせ高利なんだろう」

細君は高利だか低利だかまるで知らなかった。

「何でも旨うまく運転すると月に三、四十円の利子になるから、それを二人の小遣こづかいにして、これから先細く長く遣つかって行くつもりだつて、御姉おあねえさんがそう仰おつしやいましたよ」

健三は姉のいう利子の高から胸算用むなざんようで元金もとぎんを勘定して見た。

「悪くすると、またみんな損すっちゃうだけだ。それよりそう慾張よくばうないで、銀行へでも預けて置いて相当の利子を取る方が安全だが

な」

「だから確たしかな人に貸したいっていうんでしょ」

「確な人はそんな金は借りないさ。怖いからね」

「だけど普通の利子じゃ遣って行けないんでしょ」

「それじゃ己おれだって借りるのは厭いやださ」

「御兄おあにいさんも困っていらしてよ」

比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先ずその手始として、兄に金を借りてくれと頼んだのだそうである。

「馬鹿だな。金を借りてくれ、借りてくれって、こっちから頼む奴もないじゃないか。兄貴だって金は欲しいだろうが、そんな剣けん

呑<sup>のん</sup>な思いまでして借りる必要もあるまいからね」

健三は苦々しいうちにも滑稽<sup>こっけい</sup>を感じた。比田の手前勝手な気性がこの一事でも能く窺<sup>うかが</sup>われた。それを傍<sup>はた</sup>で見えて澄ましている姉の料簡<sup>りょうけん</sup>も彼には不可思議であつた。血が続いていても姉弟<sup>きょうだい</sup>という心持は全くしなかつた。

「御前己が借りるとでもいったのかい」

「そんな余計な事いやしません」

利子の安い高いは別問題として、比田から融通してもらおうという事が、健三にはとても真面目まじめに考えられなかった。彼は毎月まいげついくらかずつの小遣を姉に送る身分であつた。その姉の亭主から今度はこつちで金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。

「辻褄つじつまの合わない事は世の中にいくらでもあるにはあるが」  
「こういう掛けた彼は突然笑いたくなくなった。

「何だか変だな。考えると可笑おかしくなるだけだ。まあ好いいや己おれが借りて遣やらなくつてもどうにかなるんだらうから」

「ええ、そりゃ借手はいくらでもあるんでしよう。現にもう一口

ばかり貸したんですって。彼所あそこいらの待合まちあいか何かへ」

待合という言葉が健三の耳になおさら滑稽こっけいに響いた。彼は我を忘れたように笑った。細君にも夫の姉の亭主が待合へ小金を貸したという事実が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の名前に関わると思うような性質たちではなかった。ただ夫と一所になって面白そうに笑っていた。

滑稽の感じが去った後で反動が来た。健三は比田について不愉快な昔まで思い出させられた。

それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であった。病人は平生せいから自分の持っている両蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、

「これを今に御前に遣ろう」と殆んど口癖くちくせのようにいつていた。時計を所有した経験のない若い健三は、欲しくて堪らないその装飾品が、何時になったら自分の帯に巻き付けられるのだろうかと思像して、暗あんに未来の得意を予算に組み込みながら、一、二カ月を暮した。

病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなった人の記念かたみとも見るべきこの品物は、不幸にして質に入れてあった。無論健三にはそれを受出す力がなかった。彼は義姉あねから所有権だけを譲り渡されたと同様で、肝心の時計には手も触れる事が出来ずに幾

日かを過ごした。

或日皆なが一つ所に落合った。するとその席上で比田が問題の時計を懐中<sup>ふところ</sup>から出した。時計は見違えるように磨かれて光っていた。新らしい紐<sup>ひも</sup>に珊瑚樹<sup>さんごじゅ</sup>の珠<sup>たま</sup>が装飾として付け加えられた。彼はそれを勿体<sup>もったい</sup>らしく兄の前に置いた。

「それではこれは貴方<sup>あなた</sup>に上げる事にしますから」

傍<sup>そば</sup>にいた姉も殆んど比田と同じような口上を述べた。

「どうも色々御手数<sup>おてかず</sup>を掛けまして、有難う。じゃ頂戴<sup>ちやうだい</sup>します」

兄は礼をいってそれを受取った。

健三は黙って三人の様子を見ていた。三人は殆んど彼の其所<sup>そこ</sup>に



いる事さえ眼中に置いていなかった。しまいまで一言も発しなかった彼は、腹の中で甚しい侮辱を受けたような心持がした。しかし彼らは平気であつた。彼らの仕打を仇敵きゆうてきの如く憎んだ健三も、何故彼らがそんな面中つらあてがましい事をしたのか、どうしても考へ出せなかつた。

彼は自分の権利も主張しなかつた。また説明も求めなかつた。ただ無言のうちに愛想あいそうを尽かした。そうして親身の兄や姉に対して愛想を尽かす事が、彼らに取って一番非道ひどい刑罰に違なかつたと判断した。

「そんな事をまだ覚えていらつしやるんですか。貴夫あなたも随分執念

深いわね。御兄<sup>おあに</sup>いさんが御聴きになつたらさぞ御驚ろきなさるでしょう」

細君は健三の顔を見て暗にその気色<sup>けしき</sup>を伺った。健三はちつとも動かなかつた。

「執念深かろうが、男らしくなかつたが、事實は事實だよ。よし  
事實に棒を引いたつて、感情を打ち殺す訳には行かないからね。  
その時の感情はまだ生きているんだ。生きて今でもどこかで働い  
ているんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」  
「御金なんか借りさえしなきゃあ、それで好いじゃありません  
か」

こういった細君の胸には、比田たちばかりでなく、自分の事も、自分の生家の事も勘定に入れてあった。

## 百一

歳が改たまつた時、健三は一夜のうちに変わった世間の外観を、気のなさそうな顔をして眺めた。

「すべて余計な事だ。人間の小刀細工だ。」

実際彼の周囲には大晦日も元日もなかった。悉く前の年の引続きばかりであった。彼は人の顔を見て御目出とうというのさえ厭

になった。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも会わずに黙っている方がまだ心持が好かった。

彼は普通の服装なをしてぶらりと表へ出た。なるべく新年の空気の通わない方へ足を向けた。冬木立ふゆこたちと荒た畠はたけ、藁葺屋根わらぶきと細い流ながれ、そんなものが盆槍ぼんやりした彼の眼に入った。しかし彼はこの可憐かれんな自然に対してももう感興を失っていた。

幸い天気は穏かであった。空風からかぜの吹き捲まくらない野面のづらには春に似た霽もやが遠く懸かっていた。その間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身体からだを包んだ。彼は人もなく路みちもない所へわざわざ迷い込んだ。そうして融とけかかった霜で泥だらけになった靴の重いのに気

が付いて、しばらく足を動かさずにいた。彼は一つ所に佇立<sup>たたず</sup>んで  
いる間に、気分を紛<sup>ま</sup>らそうとして絵を描<sup>か</sup>いた。しかしその絵があ  
まり不味<sup>まず</sup>いので、写生はかえって彼を自暴<sup>やけ</sup>にするだけであつた。  
彼は重たい足を引き摺<sup>ず</sup>ってまた宅<sup>うち</sup>へ歸つて来た。途中で島田に遣<sup>や</sup>  
るべき金の事を考えて、ふと何か書いて見ようという気を起し  
た。

赤い印氣<sup>インキ</sup>で汚ない半紙をなすくる業<sup>わざ</sup>は漸<sup>よう</sup>く済んだ。新らしい仕  
事の始まるまでにはまだ十日の間があつた。彼はその十日を利用  
しようとした。彼はまた洋筆<sup>ペン</sup>を執つて原稿紙に向つた。

健康の次第に衰えつつある不快な事実を認めながら、それに注

意を払わなかった彼は、猛烈に働らいた。あたかも自分で自分の身体に反抗でもするように、あたかもわが衛生を虐待するように、また己れの病気に敵討かたきうちでもしたいように。彼は血に餓うえた。しかも他ひとを屠ほふる事が出来ないのでやむをえず自分の血を啜すすって満足した。

予定の枚数を書きおえた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。

「ああ、ああ」

彼は獣けだものと同じような声を揚げた。

書いたものを金に換える段になって、彼は大した困難にも遭遇せずに済んだ。ただどんな手続きでそれを島田に渡して好いいか

ちよつと迷つた。直接の会見は彼も好まなかつた。向うももう参<sup>あ</sup>上り<sup>が</sup>ませんといい放つた最後の言葉に対して、彼の前へ出て来る気のない事は知れていた。どうしても中へ入って取り次ぐ人の必要があつた。

「やっぱり御兄<sup>おあにい</sup>さんか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでしょう。今までの行掛りもあるんだから」

「まあそれでもするのが、一番適当なところだろう。あんまり有難くはないが。公けな他人を頼むほどの事でもないから」

健三は津守坂<sup>つのかみざか</sup>へ出掛けて行つた。

「百円遣るの」

驚ろいた姉は勿体<sup>もったい</sup>なさそうな眼を丸くして健三を見た。

「でも健ちゃんなんぞは顔が顔だからね。そうし・み・つ・た・れ・た・真似<sup>まね</sup>も出来まいし、それにあの島田<sup>じま</sup>って爺<sup>じい</sup>さんが、ただの爺さんと違<sup>ちが</sup>って、あの通りの悪党<sup>わる</sup>だから、百円位仕方がないだろうよ」

姉は健三の腹にない事まで一人合点<sup>ひとりがてん</sup>でべらべら喋<sup>しゃべ</sup>舌<sup>べ</sup>った。

「だけど御正月早々御前さんも随分好い面<sup>つら</sup>の皮さね」

「好い面の皮鯉<sup>こい</sup>の滝登<sup>たきのぼ</sup>りか」

先刻<sup>さつき</sup>から傍<sup>そば</sup>に胡坐<sup>あぐら</sup>をかいて新聞を見ていた比田は、この時始めて口を利いた。しかしその言葉は姉に通じなかった。健三にも解らなかった。それをさも心得顔にあははと笑う姉の方が、健三に



はかえって可笑<sup>おか</sup>しかった。

「でも健ちゃんはいいね。御金を取ろうとすればいくらでも取れるんだから」

「こちとらとは少し頭の寸法が違うんだ。右大将頼朝公<sup>うだいしやうよりともこう</sup>の髑髏<sup>しやりこうべ</sup>と来ているんだから」

比田は変挺<sup>へんてこ</sup>な事ばかりいった。しかし頼んだ事は一も二もなく引き受けてくれた。

比田と兄が揃そろって健三の宅うちを訪問おとずしたのは月の半ば頃であつた。松飾の取り払われた往来にはまだどことなく新年の香においがした。暮も春もない健三の座敷の中に坐すわった二人は、落付おちつかないように其所そこいらを見廻した。

比田は懷から書付を二枚出して健三の前に置いた。

「まあこれで漸ようやく片が付きました」

その一枚には百円受取った事と、向後こうご一切の關係を断つという事が古風な文句で書いてあつた。手蹟ては誰のとも判断が付かなかつたが、島田の印は確かに捺おしてあつた。

健三は「しかる上は後日ごじつに至り」とか、「后日ごじつのため誓約件くだんの

如し」とかいう言葉を馬鹿にしながら黙読した。

「どうも御手数おてすうでした、ありがとうございます」

「こういう証文さえ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでないと何時まで蒼蠅うるさく付け纏まとわれるか分ったもんじゃないよ。ねえ長さんちやうさん」

「そうさ。これで漸く一安心出来たようなものだ」

比田と兄の会話は少しの感銘も健三に与えなかった。彼には遣やらないでもいい百円を好意的に遣ったのだという気ばかり強く起った。面倒を避けるために金の力を藉かりたとはどうしても思えなかった。

彼は無言のままもう一枚の書付を開いて、其所に自分が復籍する時島田に送った文言もんごんを見出した。

「私儀わたくしぎ今般貴家御離縁に相成あいな、実父より養育料差出候そうつについて  
は、今後とも互に不実不人情に相成ざるよう心掛ぞんじたと存候」

健三には意味も論理ロジックも能く解よらなかった。

「それを売り付けようというのが向うの腹さね」

「つまり百円で買って遣ったようなものだね」

比田と兄はまた話し合った。健三はその間に言葉を挟さしはさむのさえ厭いやだった。

二人が帰ったあとで、細君は夫の前に置いてある二通の書付を

開いて見た。

「こっちの方は虫が食ってますね」

「反故ほごだよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠かみくずかごへ入れてしまえ」

「わざわざ破がなくっても好いでしよう」

健三はそのまま席を立った。再び顔を合わせた時、彼は細君に

向って訊きいた。――

「先刻さつきの書付はどうしたい」

「筆笥たんすの抽斗ひきだしにしまつて置きました。」

彼女は大事なものでも保存するような口振くちふりでこう答えた。健三

は彼女の所置を咎めもしない代りに、賞める気にもならなかった。

「まあ好かった。あの人だけはこれで片が付いて」  
細君は安心したといわぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたって」

「でも、ああして証文を取って置けば、それで大丈夫でしょう。  
もう来る事も出来ないし、来たって構い付けなければそれまで  
じゃありませんか」

「そりゃ今までだって同じ事だよ。そうしようと思えば何時でも  
出来たんだから」

「だけど、ああして書いたものをこっちの手に入れて置くと大変  
違いますわ」

「安心するかね」

「ええ安心よ。すっかり片付いちゃったんですもの」

「まだなかなか片付きやしないよ」

「どうして」

「片付いたのは上部<sup>うわべ</sup>だけじゃないか。だから御前は形式張った女  
だというんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「じゃどうすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起つた事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ」

健三の口調は吐き出すように苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を抱き上げた。

「お好きな子だ。御父さまの仰やる事は何かちつとも分りやしないわね」

細君はこういいいい、幾度か赤い頬に接吻した。



## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---